

兵庫県芦屋市

業	平	遺	跡	第 61 地 点
月	若	遺	跡	第 79・81 地 点
寺	田	遺	跡	第178・181地点

発掘調査報告書

— 都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査 V —

2006

芦 屋 市

芦屋市教育委員会

兵庫県芦屋市

業平遺跡 第 61 地点

月若遺跡 第 79・81 地点

寺田遺跡 第178・181地点

発掘調査報告書

— 都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅴ —

2006

芦屋市

芦屋市教育委員会

序 文

古代から自然環境と交通事情に恵まれた芦屋市では、数多くの遺跡・遺物が発見され、人々が集まり住まいしたことを証しています。

都市計画道路山手幹線街路事業は、防災の役割も担っており、阪神・淡路大震災の復興計画の中で急がれるものでしたが、道路予定地には、多くの重要遺跡が点在するため、大規模な調査になることが予想されました。長期の調査は、芦屋市教育委員会の調査体制では困難なため、芦屋市から神戸市に委託することをお願いし、兵庫県・神戸市・芦屋市の協議を経て、事前発掘調査を開始しました。

この調査は、平成12年度から始まりましたが、年次別に1冊の報告書を刊行しており、本書はその5冊目にあたります。

今年度の発掘調査でも貴重な埋蔵文化財が見つかっています。特に寺田・月若遺跡で確認された高句麗系の軒丸瓦や法隆寺式の軒平瓦は、白鳳文化期の地域社会のありかたを知る上で注目に値する歴史資料です。

発掘調査から本書の刊行に至るには多くの方々の御指導と御協力を頂きました。関係各位の御努力に対しまして、心より深く感謝いたします。

平成18年3月31日

芦屋市教育長

藤原 周三

例 言

1. 本書は、芦屋市松ノ内町・月若町・三条南町・西芦屋町で実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都市計画道路山手幹線街路築造事業に伴うもので、神戸市が芦屋市との間に委託に関する協定書を締結して実施したものである。

発掘調査にあたっては芦屋市教育委員会を調査主体とし、神戸市教育委員会を調査機関とした。現地調査に関しては、財団法人神戸市体育協会が神戸市からの委託を受けて実施した。発掘調査組織については、本文（第1章第1節（3））に記した。

発掘調査の地点名、所在地、調査期間、調査面積及延べ面積、調査担当は以下の表のとおりである。

遺跡名	地点名	所在地	調査期間	調査面積（）内は延べ面積	調査担当
栗平遺跡	61地点	芦屋市松ノ内町72番の1他	平成16年6月17日～平成16年12月10日	約1700㎡（約2670㎡）	安田 滋 山口 英正 阿部 功
月若遺跡	79地点	芦屋市月若町66番6	平成16年4月15日～平成16年5月14日	約105㎡	山口 英正
月若遺跡	81地点	芦屋市月若町69番他	平成16年9月2日～平成16年12月7日	約359㎡（約1077㎡）	安田 滋
寺田遺跡	178地点	芦屋市三条南町7番1	平成16年5月21日～平成16年9月1日	約336㎡（約1344㎡）	安田 滋
寺田遺跡	181地点	芦屋市西芦屋町30番1他	平成16年12月8日～平成17年3月18日 平成17年4月4日～平成17年4月19日	約349㎡（約1745㎡）	安田 滋

3. 本書の作成は調査担当者がそれぞれ分担執筆した。文責は目次のとおりである。
4. 各調査の遺構写真は神戸市教育委員会文化財課 丸山 潔と各調査担当者が撮影した。遺物写真は独立行政法人奈良文化財研究所 牛嶋 茂氏の指導を得て、杉本和樹氏が撮影した。
5. 各調査の遺構図等は各調査担当者ならびに調査補助員 王 元林 鹿本直子 平山裕之 真鍋貴恒が作成した。また調査区全体の空中写真測量は株式会社ジオテクノ関西に委託した。
6. 本書で使用した各地点の遺構番号は3桁の数字を使用し、100の位で遺構面を表示するようにした。
7. 本書で使用した方位・座標は平面直角座標系V系（日本測地系）である。標高は、東京湾平均海水準（T.P.）で表示している。また、図中で使用した方位は、座標北を示している。
8. 本書に掲載した遺跡分布図には、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「西宮」を使用した。
9. 発掘調査に伴う遺構・遺物の図面、写真、出土遺物は報告書刊行後に芦屋市教育委員会が保管する。
10. 現地調査は、兵庫県教育委員会ならびに芦屋市教育委員会の指導・助言を得て実施した。また、芦屋市建設部街路課の協力を得た。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯と経過	(阿部) 1
(1) 調査に至る経緯	(阿部) 1
(2) 発掘調査の経過	(安田・山口・阿部) 1
(3) 調査組織	(山口) 6
第2節 遺跡の立地と歴史的環境	(阿部) 7
(1) 調査地の地理的環境	7
(2) 業平遺跡・月若遺跡・寺田遺跡の概要と周辺の歴史的環境	9
第2章 業平遺跡第61地点の調査	13
第1節 調査の概要	(阿部) 13
(1) 調査の方法	13
(2) 基本層序	14
第2節 第3遺構面の遺構と遺物	(山口) 15
(1) 土器棺	15
(2) 土坑	17
(3) 竪穴住居	19
(4) 柱穴	21
(5) 遺構に伴わない遺物	21
第3節 第2遺構面の遺構と遺物	(山口・阿部・中村) 27
(1) 竪穴住居	27
(2) 古墳	31
(3) 埋葬施設	38
(4) 土坑	41
(5) 溝状遺構	41
(6) 自然河道	42
(7) その他の遺構	42
第4節 第1遺構面の遺構と遺物	(山口) 43
(1) 掘立柱建物	44
(2) 溝状遺構	46
(3) 自然河道	47
(4) 遺構に伴わない遺物	47
第5節 小 結	47
第3章 月若遺跡第79地点の調査	(山口) 49
第1節 調査の概要	49
(1) 調査の方法	49
(2) 基本層序	49
第2節 遺構と遺物	51
(1) 溝状遺構	51
(2) 用途不明土坑	52
第3節 小 結	52

第4章 月若遺跡第81地点の調査	(安田)	53
第1節 調査の概要		53
(1) 調査の方法		53
(2) 基本層序		54
第2節 縄文時代の遺物		55
第3節 第3遺構面の遺構		55
第4節 第2遺構面の遺構と遺物		57
(1) 土坑		57
(2) ビット		57
(3) 溝		57
第5節 第1遺構面の遺構と遺物		67
(1) 飛鳥～奈良時代の遺構と遺物		67
(2) 中世の遺構と遺物		71
第6節 小 結		72
第5章 寺田遺跡第181地点の調査	(安田)	73
第1節 調査の概要		73
(1) 調査の方法		73
(2) 基本層序		74
第2節 第5遺構面の遺構と遺物		74
(1) 土坑		76
(2) 集石土坑		76
(3) 自然流路		76
(4) 縄文時代の遺物		77
第3節 第4遺構面の遺構と遺物		77
(1) 土坑・ビット		77
(2) 溝		79
(3) 落ち込み		79
第4節 第3遺構面の遺構と遺物		79
(1) 土坑		79
(2) 落ち込み		79
(3) 溝		79
(4) 土器溜り		84
第5節 第2遺構面の遺構と遺物		84
(1) 古墳時代後期末の竪穴住居		86
(2) 古墳時代中期末～後期の溝		87
(3) 掘立柱建物		87
第6節 第1遺構面の遺構と遺物		88
(1) 飛鳥時代の柱穴		90
(2) 飛鳥時代の遺物		90
(3) 中世の遺構と遺物		92
第7節 小 結		102

第6章 寺田遺跡第178地点の調査	(安田) 103
第1節 調査の概要	103
(1) 調査の方法	103
(2) 基本層序	104
第2節 第4遺構面の遺構と遺物	104
(1) 土坑	106
(2) 溝	107
(3) 遺物包含層出土の遺物	107
第3節 第3遺構面の遺構と遺物	109
(1) 竪穴住居	109
(2) 溝	111
第4節 第2遺構面の遺構と遺物	111
(1) 竪穴住居	113
(2) 掘立柱建物	121
第5節 第1遺構面の遺構と遺物	122
(1) 掘立柱建物	122
(2) 遺物包含層出土の土器	124
(3) 平安時代の遺構と遺物	125
第6節 小 結	126
第7章 まとめ	(安田) 127

挿図目次

第1章 はじめに	頁	fig. 41	S T 201	39
fig. 1 調査地点の位置	2	fig. 42	S T 202出土遺物	39
fig. 2 調査地の位置	7	fig. 43	S T 202	39
fig. 3 周辺の遺跡	8	fig. 44	S X 201	40
第2章 桑平遺跡第61地点		fig. 45	S K 201	41
fig. 4 調査区の地区割	13	fig. 46	S K 201出土遺物	41
fig. 5 桑平遺跡第61地点調査区位置	13	fig. 47	S D 204	42
fig. 6 1区西壁土層	14	fig. 48	S D 204出土遺物	42
fig. 7 S T 301	15	fig. 49	S D 208出土遺物	42
fig. 8 S T 301出土遺物	15	fig. 50	第1遺構面	43
fig. 9 第3遺構面	16	fig. 51	S B 101	44
fig. 10 S K 301	17	fig. 52	S P 142出土遺物	44
fig. 11 S K 302	17	fig. 53	S B 102	44
fig. 12 S K 322	17	fig. 54	S P 169出土遺物	44
fig. 13 S K 328	18	fig. 55	S P 167~169	45
fig. 14 S K 328出土遺物	18	fig. 56	S B 103	45
fig. 15 S K 329	18	fig. 57	S D 103出土遺物	46
fig. 16 S K 329出土遺物	18	fig. 58	S D 111	46
fig. 17 S B 301	19	fig. 59	土器群1出土遺物	46
fig. 18 S B 301出土遺物	20	fig. 60	S D 111出土遺物	47
fig. 19 S P 312出土遺物	21	fig. 61	遺構に伴わない遺物	47
fig. 20 遺構に伴わない遺物(1)	22	第3章 月若遺跡第79地点		
fig. 21 遺構に伴わない遺物(2)	23	fig. 62	月若遺跡第79地点調査区位置	49
fig. 22 遺構に伴わない遺物(3)	24	fig. 63	月若遺跡第68・79地点土層	50
fig. 23 遺構に伴わない遺物(4)	25	fig. 64	調査区平面	51
fig. 24 遺構に伴わない遺物(5)	26	fig. 65	月若第68・79地点平面合成図	52
fig. 25 S B 201	27	第4章 月若遺跡第81地点		
fig. 26 第2遺構面	28	fig. 66	月若遺跡第81地点調査区位置	53
fig. 27 S B 202出土遺物	29	fig. 67	調査区南壁土層	54
fig. 28 S B 202	29	fig. 68	縄文土器	55
fig. 29 S B 203	30	fig. 69	第3遺構面	56
fig. 30 S B 204	30	fig. 70	第2遺構面	58
fig. 31 1号墳・2号墳	31	fig. 71	S D 203遺物出土状況	59
fig. 32 1号墳周溝出土遺物	32	fig. 72	S D 203土層断面	60
fig. 33 1号墳石室	33	fig. 73	S D 203出土土器(1)	61
fig. 34 1号墳玄室出土遺物(1)	33	fig. 74	S D 203出土土器(2)	63
fig. 35 1号墳玄室出土遺物(2)	34	fig. 75	S D 203出土土器(3)	64
fig. 36 1号墳玄室出土遺物(3)	35	fig. 76	S D 203出土鉄製品・鉄滓	65
fig. 37 鉄釘使用状態模式図	36	fig. 77	第1遺構面	66
fig. 38 玄室内遺物出土状況と木棺復元位置	37	fig. 78	S B 102	67
fig. 39 1号墳付近出土遺物	38	fig. 79	S D 101土層断面	68
fig. 40 2号墳周溝出土遺物	38	fig. 80	S D 101出土遺物	69

fig. 81	S D101出土鉄製品・鉄滓	70
fig. 82	S B101	71
fig. 83	S B101出土鉄滓	71
fig. 84	S D102出土土器	71
第5章 寺田遺跡第181地点		
fig. 85	寺田遺跡第181地点調査区位置	73
fig. 86	調査区北壁土層	74
fig. 87	第5遺構面	75
fig. 88	S K504	76
fig. 89	S X501	76
fig. 90	縄文土器	77
fig. 91	第4遺構面	78
fig. 92	第3遺構面	80
fig. 93	S X302	81
fig. 94	S D301	81
fig. 95	S D301出土土器(1)	82
fig. 96	S D301出土土器(2)	83
fig. 97	土器溜り301	84
fig. 98	土器溜り301出土土器	84
fig. 99	第2遺構面	85
fig. 100	S B201	86
fig. 101	S B201出土土器	86
fig. 102	S D202遺物出土状況	87
fig. 103	S D202出土遺物	87
fig. 104	S B202	88
fig. 105	第1遺構面	89
fig. 106	飛鳥時代柱穴	90
fig. 107	飛鳥時代遺物	91
fig. 108	S K101遺物出土状況	93
fig. 109	S K101	93
fig. 110	S K101出土土器(1)	94
fig. 111	S K101出土土器(2)	95
fig. 112	S K101出土鉄製品	95
fig. 113	S K103	97
fig. 114	S K103出土土器	98

fig. 115	S K103出土鉄製品	99
fig. 116	S K105	100
fig. 117	S K105出土土器	100
fig. 118	S X101	101
fig. 119	中世柱穴	101
fig. 120	中世柱穴出土遺物	102
第6章 寺田遺跡第178地点		
fig. 121	寺田遺跡第178地点調査区位置	103
fig. 122	調査区北壁土層	104
fig. 123	第4遺構面	105
fig. 124	S K402	106
fig. 125	S K404	106
fig. 126	第4遺構面出土土器	107
fig. 127	第3遺構面	108
fig. 128	S B301	109
fig. 129	S B301出土土器	110
fig. 130	S D301出土土器	111
fig. 131	第2遺構面	112
fig. 132	S B201・S B202・ S B203・S B204	114
fig. 133	S B201・S B202・ S B203出土土器	115
fig. 134	S B205	116
fig. 135	S B205出土土器	116
fig. 136	S B206	117
fig. 137	S B206出土土器(1)	119
fig. 138	S B206出土土器(2)	120
fig. 139	S B207	121
fig. 140	S B208	121
fig. 141	S B209	122
fig. 142	第1遺構面	123
fig. 143	S B101	124
fig. 144	遺物包含層出土土器	124
fig. 145	S X101	125
fig. 146	S X101出土土器	125

表目次

第2章 葉平遺跡第61地点

表1	縄文土器出土地一覧	23
表2	石器出土地・計測値一覧(1)	24

表3	石器出土地・計測値一覧(2)	25
表4	1号墳出土鉄製品計測値一覧	35

挿図写真目次

挿図写真1	業平遺跡第61地点作業風景(1) …… 3	挿図写真10	寺田遺跡第179地点作業風景(2) …… 5
挿図写真2	業平遺跡第61地点現地説明会 …… 3	挿図写真11	芦屋大学附属中学校 トライやるウィーク …… 5
挿図写真3	業平遺跡第61地点作業風景(2) …… 3	挿図写真12	遺物整理作業 …… 5
挿図写真4	業平遺跡第61地点作業風景(3) …… 3	挿図写真13	コウヤマキ(木口150倍) …… 36
挿図写真5	月若遺跡第81地点作業風景(1) …… 4	挿図写真14	コウヤマキ(柾目250倍) …… 36
挿図写真6	月若遺跡第81地点作業風景(2) …… 4	挿図写真15	コウヤマキ(板目150倍) …… 36
挿図写真7	寺田遺跡第181地点作業風景(1) …… 4	挿図写真16	月若遺跡第79地点作業風景 …… 52
挿図写真8	寺田遺跡第181地点作業風景(2) …… 4		
挿図写真9	寺田遺跡第179地点作業風景(1) …… 5		

カラー写真図版目次

業平遺跡第61地点		寺田遺跡遺跡第181地点	
カラー写真図版 1	1号墳全景(南から) 1号墳遺物出土状況(南西から)	カラー写真図版 5	第 1 遺構面全景(南東から)
カラー写真図版 2	S T 301(北から) S B 301(西から)	カラー写真図版 6	S K 101遺物出土状況 S K 101出土遺物
月若遺跡第81地点		寺田遺跡遺跡第178地点	
カラー写真図版 3	第 1 遺構面全景(南東から)	カラー写真図版 7	第 2 遺構面全景(南東から)
カラー写真図版 4	S D 203出土遺物	カラー写真図版 8	S B 206遺物出土状況 S B 206出土遺物

写真図版目次

業平遺跡第61地点	写真図版11	奥壁付近遺物出土状況(南西から)
写真図版1	2区	第3遺構面(西から)
写真図版2	3区	第3遺構面全景(南西から)
	3区	第3遺構面全景(北西から)
写真図版3	2区	S K301(南から)
	2区	S B301(東から)
写真図版4	3区	S K322(北西から)
	3区	S K329(北から)
写真図版5	1区	第2遺構面全景(西から)
写真図版6	2区	第2遺構面全景(東から)
写真図版7	S B201・202(北東から)	
	S B204(南東から)	
写真図版8	2区	第2遺構面南西部(北東から)
	1号墳東半部・2号墳(東から)	
写真図版9	1号墳西半部(北西から)	
	1号墳主体部(北から)	
写真図版10	1号墳主体部(南から)	
	写真図版12	閉塞石除去状況(北西から)
	写真図版13	1号墳周溝(南西から)
		1号墳周溝断面図(西から)
	写真図版14	S T201(南東から)
		S T202(南東から)
	写真図版15	S K201(南東から)
		S D204(南西から)
	写真図版16	2区 第1遺構面全景(東から)
	写真図版17	2区 第1遺構面全景(西から)
		S P169断面(西から)
	写真図版18	1区 西壁土層断面
		3区 南側土層断面
	写真図版19	S T301出土遺物
		S K329出土遺物

	遺構に伴わない遺物 (1)
写真図版20	遺構に伴わない遺物 (2)
	遺構に伴わない遺物 (3)
写真図版21	遺構に伴わない遺物 (4)
	遺構に伴わない遺物 (5)
写真図版22	S B301出土遺物
写真図版23	1号墳玄室出土遺物
	1号墳周溝出土遺物
写真図版24	鉄製品
写真図版25	鉄製品 (X線写真)
写真図版26	1号墳付近出土遺物
	2号墳周溝出土遺物
	S D204出土遺物
	S D208出土遺物
	S K201出土遺物
	S P142出土遺物
写真図版27	S P169出土遺物
	S D111出土遺物
	S D111内土器群1出土遺物
	遺構に伴わない遺物
月若遺跡第79地点	
写真図版28	全景 (西から)
	全景 (東から)
月若遺跡第81地点	
写真図版29	第3遺構面全景 (南東から)
	第3遺構面全景 (北東から)
写真図版30	第2遺構面全景 (南東から)
	第2遺構面全景 (北東から)
写真図版31	S D203 (南から)
	S D203遺物出土状況 (北から)
写真図版32	S D203遺物出土状況 (北から)
	S D203遺物出土状況 (南から)
写真図版33	S D203セクション3・4東半 (北から)
	S D203セクション3・4西半 (北から)
写真図版34	第1遺構面全景 (南東から)
	第1遺構面全景 (北西から)
写真図版35	S B102 (北東から)
	S B101 (北から)
写真図版36	S D101 (北から)
	S D101セクション (南から)
写真図版37	縄文土器
	S D203出土遺物 (1)
写真図版38	S D203出土遺物 (2)
写真図版39	S D203出土遺物 (3)
写真図版40	S D203出土遺物 (4)

写真図版41	S D203出土遺物 (5)
写真図版42	S D203出土遺物 (6)
写真図版43	S D203出土遺物 (7)
写真図版44	S D203出土絵画土器
	S D203出土砥石
	S D101出土埴
写真図版45	S D102出土遺物
写真図版46	月若遺跡第81地点出土鉄製品・鉄滓
	同上X線写真
寺田遺跡第181地点	
写真図版47	第5遺構面西半全景 (南東から)
	第5遺構面礫群 (南東から)
写真図版48	第5遺構面礫群 (東から)
	S K504 (西から)
	S X501 (南東から)
写真図版49	第5遺構面東半全景 (南東から)
	S R501
写真図版50	第4遺構面全景 (南東から)
	第4遺構面全景 (西から)
写真図版51	第3遺構面全景 (南東から)
	第3遺構面全景 (西から)
写真図版52	第3遺構面東半 (南西から)
	S X302 (南から)
写真図版53	土器溜り301 (北西から)
	S D301 (南東から)
写真図版54	第2遺構面西半全景 (南東から)
	第2遺構面全景 (西から)
写真図版55	第2遺構面東半全景 (南西から)
	S B202
写真図版56	S B201炭化材検出状況 (西から)
	S B201炭化材検出状況 (北から)
写真図版57	S B201上層床面
	S B201下層床面
写真図版58	第1遺構面西半全景 (南東から)
	第1遺構面全景 (西から)
写真図版59	第1遺構面東半全景 (南西から)
	S K101遺物出土状況 (北から)
写真図版60	S K101 (東から)
	S K101セクション (西から)
写真図版61	S K103 (西から)
	S K103セクション (南から)
写真図版62	S K105 (東から)
	S X101 (北東から)
写真図版63	S P1009 (西から)
	S P1064 (東から)

	S P 1035 (東から)	写真図版80	第3遺構面全景 (南東から)
写真図版64	石製品		第3遺構面全景 (西から)
	縄文土器	写真図版81	S B 301 (南から)
	S D 301出土土器 (1)		S B 301中央土坑 (西から)
写真図版65	S D 301出土土器 (2)	写真図版82	第2遺構面全景 (南東から)
写真図版66	S D 301出土土器 (3)		第2遺構面全景 (西から)
写真図版67	土器溜り301出土土器	写真図版83	S B 201・S B 202・
	S D 201出土土器		S B 203・S B 204 (南から)
	S B 201出土土器		S B 203遺物出土状況 (北西から)
写真図版68	S P 1064出土遺物	写真図版84	S B 206遺物出土状況 (西から)
	S P 1009出土瓦		S B 206 (西から)
	飛鳥時代の遺物	写真図版85	S B 206東半遺物出土状況 (西から)
写真図版69	S K 101出土土器 (1)		S B 206西半遺物出土状況 (北から)
写真図版70	S K 101出土土器 (2)	写真図版86	S B 206庵付近遺物出土状況 (西から)
写真図版71	S K 101出土土器 (3)		S B 206竈 (西から)
写真図版72	出土鉄製品	写真図版87	S B 205 (南から)
写真図版73	出土鉄製品X線写真		S B 207 (西から)
写真図版74	S K 103出土土器 (1)	写真図版88	S B 208 (西から)
写真図版75	S K 103出土土器 (2)		S B 209 (北から)
	S K 103出土石鍋	写真図版89	第1遺構面全景 (南東から)
	S K 103出土壁材		第1遺構面全景 (西から)
写真図版76	S K 105出土遺物	写真図版90	S B 101 (南西から)
	S P 1035出土遺物		S X 101 (東から)
	S P 1061出土遺物	写真図版91	第4遺構面出土遺物
	S P 1073出土遺物		S B 301出土土器 (1)
	S P 1037出土遺物	写真図版92	S B 301出土土器 (2)
	S P 1075出土遺物	写真図版93	S B 201出土土器
写真図版77	S P 1078出土遺物		S B 202出土土器
	S P 1081出土遺物		S B 203出土土器
	遺物包含層出土竈羽口		S B 205出土土器
	第1遺構面柱穴出土遺物	写真図版94	S B 206出土土器 (1)
寺田遺跡第178地点		写真図版95	S B 206出土土器 (2)
写真図版78	第4遺構面全景 (南東から)	写真図版96	S B 206出土土器 (3)
	第4遺構面全景 (西から)	写真図版97	遺物包含層出土土器
写真図版79	S K 404 (東から)	写真図版98	S X 101出土土器
	S K 402 (北から)		

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

山手幹線街路築造事業は、尼崎市から神戸市に至る全長約30kmの六甲山南麓地域を結ぶ幹線道路として計画されたもので、芦屋市域では約2.3kmが事業対象である。当事業は、阪神地域に甚大な被害をもたらせた阪神・淡路大震災の復興事業の一つに位置づけられ、現在その整備が進められている。

芦屋市内の事業は、多くの区間で未着手の状況にあった。事業予定地内には業平遺跡、月若遺跡、寺田遺跡等、周知の埋蔵文化財包蔵地が存在し、平成9年度に芦屋市教育委員会が実施した試掘調査の結果、遺跡が広範囲に拡がることが確認された。

芦屋市・芦屋市教育委員会は、この事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の取り扱いについて、兵庫県教育委員会と協議し、緊急調査を多数控えている芦屋市の現状を鑑みて、調査主体を芦屋市教育委員会とし、調査機関は神戸市教育委員会として発掘調査を実施することとした。このことについては、地方自治法に基づく自治体間の事務一部委託として、平成12年度に「埋蔵文化財の発掘調査業務に関する協定書」を、芦屋市・芦屋市教育委員会と神戸市との間に、兵庫県教育委員会を立会人として締結した。

神戸市教育委員会ではこの協定書に基づき、平成12年度からこの事業に伴う発掘調査を実施している。平成16年度は5年目にあたり、業平遺跡第61地点、月若遺跡第79・81地点、寺田遺跡第178・181地点の3遺跡、5地点の調査を実施した。

(2) 発掘調査の経過

業平遺跡第61地点は、残土置場や空中写真測量のクレーン進入路確保のため、3分割して調査を実施した。芦屋市街路課による土留工事完了後、平成16年6月17日資材を搬入して、仮囲い設置を開始し、6月23日から1区の重機掘削を開始した。

1区では、後世の削平のため古墳時代から中世の遺構が同一面で検出された。この面では古墳時代の竪穴住居等を検出した。8月6日に空中写真測量を実施した。8月12日から重機により下層の掘下げを開始したが、遺構、遺物共確認されなかった。8月24日に全景写真撮影、記録作業を継続し、8月26日に1区の調査を完了した。

8月27日から1区の埋め戻しと並行して2区の重機掘削作業を開始した。第1遺構面は9月6日より遺構面の精査を行い、掘立柱建物等を検出した。9月15日に全景撮影を行い第1遺構面の調査を完了した。第2遺構面は9月16日から遺構面の検出を行い、古墳、埋葬施設等を検出した。10月15日に空中写真撮影、全景撮影を行った。10月30日に現地説明会を実施し、103人の見学者があった。第3遺構面は11月5日から遺構面の精査を行い、弥生時代の竪穴住居、縄文時代の土器棺等を検出した。11月10日に空中写真撮影を行い、11月30日に2区の調査を完了した。

3区は10月18日から重機掘削を開始し、第2遺構面から横穴式石室を検出した。11月25日に記者発表を行なった。同日に空中写真撮影と全景撮影を行い、12月1日に第2遺構面の調査を完了した。第3遺構面は12月2日に遺構面の精査を実施し、縄文時代晩期の土坑等を検

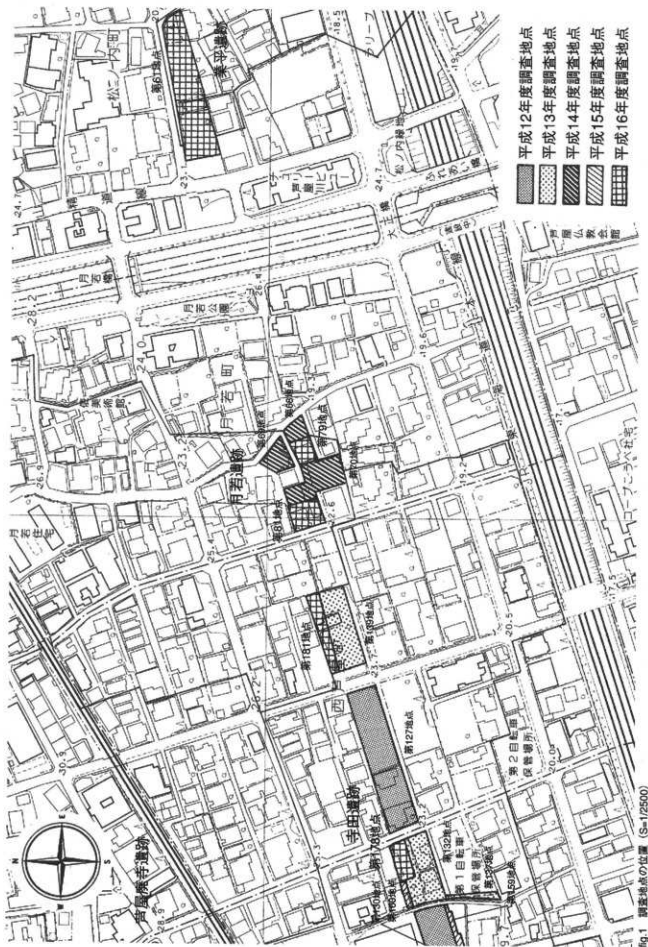


Fig.1 調査地点の位置 (S=1/2500)

出した。12月3日に空中写真撮影を行い、12月10日までに埋め戻しや調査資材の搬出を行い、現地での調査作業を完了した。

月若遺跡第79地点 月若遺跡第79地点は、4月15日から仮囲い等の準備工を開始し、4月21日から重機掘削を始めた。西半部は宅地造成時に削平されており、遺構は残存しなかった。東半部で近世以降の耕作に伴う溝等が検出された。4月28日に全景撮影を行い、5月14日までに埋め戻しや調査資材の搬出を行い、現地での調査作業を完了した。

月若遺跡第81地点 月若遺跡第81地点は、平成16年9月2日に調査地の仮囲いを設置して始まった。9月8日からは重機掘削を開始し、翌9日から第1遺物包含層を掘削し遺構面を検出した。9月13日には大溝（SD101）の掘削を開始した。10月1日には第1遺構面の空中写真撮影を行い、翌4日に全景写真を撮影した。撮影終了後、第2遺物包含層を掘削し、10月6日から第2遺構面の遺構検出を行った。10月12日から遺構掘削を行い、10月14日からは弥生時代後期の溝SD203の掘削を行った。10月29日には第2遺構面の全景写真を撮影し、11月1日には空中写真撮影を行った。同日撮影終了後、第3遺物包含層の掘削を開始し、11月4日に第3遺構面の遺構検出を行った。翌5日からは遺構の掘削を開始した。11月9日から、第3遺構面の調査と並行してSD203西半部検出のため、調査区の西側拡張を開始した。11月25日には第3遺構面の全景写真撮影を行い、翌26日に空中写真撮影を行った。11月29日には第3遺構面以下の層を確認するため、調査区中央に断割り調査を実施した。11月30日には調査区壁面の土層図を作成し、埋め戻しを開始した。12月6日には埋め戻しが完了し、翌7日に仮囲いを撤去し資材搬出して調査は終了した。



挿図写真 1 兼平遺跡第61地点作業風景 (1)



挿図写真 2 兼平遺跡第61地点現地説明会



挿図写真 3 兼平遺跡第61地点作業風景 (2)



挿図写真 4 兼平遺跡第61地点作業風景 (3)

寺田遺跡第181地点

寺田遺跡第181地点は、平成16年12月8日に資材搬入し、仮囲いを設置して調査が始まった。12月13日には重機掘削を開始し、翌14日から調査区西半の第1遺構面の遺構を検出した。12月15日には調査区西半における第1遺構面の遺構掘削を開始し、12月20日には東半部の第1遺物包含層の掘削を始めた。平成17年1月24日には第1遺構面の全景写真を撮影し、翌25日に空中写真撮影を実施した。1月26日には第2遺物包含層の掘削を開始し、翌27日には堅穴住居が確認された。1月28日から遺構掘削を開始した。2月7日に第2遺構面の全景写真を撮影し、翌8日空中写真を撮影した。翌9日から第3遺物包含層の掘削を開始し、土坑等が確認された。翌10日から第3遺構面の精査を行い、2月14日から遺構掘削を開始した。2月23日には第3遺構面の全景写真撮影を行い、翌24日には空中写真撮影を実施した。翌25日から第4遺物包含層の掘削を開始し、遺構面の検出を行った。2月28日から遺構の掘削を行い、3月2日に第4遺構面の全景写真を撮影して、翌3日に空中写真撮影を実施した。同日写真撮影後、第5遺物包含層である黄褐色粗砂の掘削を開始し、3月4日に第5遺構面を検出した。3月7日には遺構面の精査を行い、土坑等の掘削を行った。3月9日第5遺構面西半部の全景写真を撮影し、翌10日に空中写真撮影を実施した。3月11日には第5遺構面の東半部を検出し、流路等の掘削を行った。3月15日から18日まで西半部の埋め戻しを行い、完了後、第181地点の調査を一時中断して、平成16年度の調査は終了した。

平成17年4月4日に調査を再開し、調査区東端の南拉張部（第139地点の未掘削部）の重機掘削を開始した。翌5日には流路の掘削を始め、4月11日には第5遺構面東半部の全景写真を撮影した。4月13日には空中写真撮影を実施した。翌14日から18日まで埋め戻しを行い、



押図写真 5 寺田遺跡第181地点作業風景 (1)



押図写真 6 寺田遺跡第181地点作業風景 (2)



押図写真 7 寺田遺跡第181地点作業風景 (1)



押図写真 8 寺田遺跡第181地点作業風景 (2)

翌19日に資材を搬出して調査が終了した。

寺田遺跡第178地点 寺田遺跡第178地点は、平成16年5月19日に仮囲いを設置して始まった。5月25日には重機掘削を開始し、翌26日からは第1遺物包含層の掘削を開始した。翌27日には第1遺構面の遺構を検出した。5月31日には平安時代土器溜りを確認し、6月3日から遺構掘削を行った。6月10日には第1遺構面の全景写真撮影を行い、6月15日には空中撮影を行った。また同日と翌16日の2日間芦屋大学附属中学校生徒17名がトライやる・ウィークとして発掘調査を体験した。6月16日から第2遺物包含層の掘削を開始し、6月18日には遺構検出を行い、堅穴・住居址等が確認された。6月22日から遺構掘削を行い、7月15日には第2遺構面の全景撮影ならびに空中写真撮影を実施した。7月22日からは第3遺物包含層の掘削を開始し、翌23日には遺構検出を行った。7月27日には堅穴・住居址が確認され掘削を開始した。7月30日には第3遺構面の全景写真を撮影し、8月4日には空中写真撮影を行った。8月6日からは第4遺物包含層の掘削を開始し、8月9日には遺構検出を行った。8月18日から遺構の掘削を行い、8月26日に第4遺構面の全景写真を撮影し、翌27日には空中写真撮影を実施した。8月31日に調査区の土層図を作成し、9月1日に資材を搬出して調査は終了した。

整理作業

整理作業は平成16・17年度に神戸市埋蔵文化財センターで実施した。出土遺物に関して、水洗作業、ネーミング作業、復元作業、金属器・木製品の保存処理、実測、製図、写真撮影を行い、報告書の作成を実施した。



挿図写真 9 寺田遺跡第178地点作業風景 (1)



挿図写真 10 寺田遺跡第179地点作業風景 (2)



挿図写真 11 芦屋大学附属中学校トライやるウィーク



挿図写真 12 遺物整理作業

(3) 調査組織

発掘調査は、これまでに引き続き芦屋市から神戸市が受託し、神戸市から財団法人神戸市体育協会に委託して実施している。調査組織は下記のとおりである。

平成16年度

	神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当				
	檀上 重光 前神戸女子短期大学教授				
	工楽 善通 大阪府立狭山池博物館館長				
	和田 晴吾 立命館大学文学部教授				
芦屋市教育委員会	神戸市教育委員会事務局			財団法人神戸市体育協会	
教育長	藤原 周三	教育長	小川 雄三	会長	矢田 立郎
社会教育部長	高嶋 修	社会教育部長	高橋英比古	副会長	矢野栄一郎
文化財課長	西川 孝夫	教育委員会参事	桑原 泰豊	(専務理事事務取扱)	
主査(学芸員)	森岡 秀人	(文化財課長事務取扱)		常務理事	野浪 建作
主査	田中 尚美	社会教育部主幹	渡辺 伸行	総務課長	横関 勇
係員(学芸員)	竹村 忠洋	(埋蔵文化財指導係長事務取扱)		総務課主査(兼務)	菅本 宏明
嘱託(学芸員)	坂田 典彦	〃	宮本 郁雄	調査担当学芸員	安田 滋
嘱託(学芸員)	白谷 朋世	(埋蔵文化財センター)所長事務取扱)			
		埋蔵文化財調査係長	丹治 康明		
		文化財課主査	丸山 潔		
		事務担当学芸員	東 喜代秀		
		調査担当学芸員	山口 英正		
		〃	阿部 功		

平成17年度

	神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当					
	檀上 重光 前神戸女子短期大学教授					
	工楽 善通 大阪府立狭山池博物館館長					
	和田 晴吾 立命館大学文学部教授					
芦屋市教育委員会	神戸市教育委員会事務局			財団法人神戸市体育協会		
教育長	藤原 周三	教育長	小川 雄三	会長	家治川 豊	
社会教育部長	高嶋 修	社会教育部長	高橋英比古	副会長	矢野栄一郎	
生涯学習課長	石濱 正昭	教育委員会参事	桑原 泰豊	(専務理事事務取扱)		
生涯学習課長補佐	中戸 博幸	(文化財課長事務取扱)		常務理事	野浪 建作	
主査(学芸員)	森岡 秀人	社会教育部主幹	渡辺 伸行	総務課長	横関 勇	
係員	春木 和子	(埋蔵文化財指導係長事務取扱)		総務課主査(兼務)	菅本 宏明	
係員(学芸員)	竹村 忠洋	〃	丸山 潔			
嘱託(学芸員)	坂田 典彦	(埋蔵文化財センター)所長事務取扱)				
嘱託(学芸員)	白谷 朋世	埋蔵文化財調査係長	丹治 康明			
		文化財課主査	安田 滋			
		事務担当学芸員	東 喜代秀			
		整理担当学芸員	山口 英正			
		〃	内藤 俊哉			
		〃	阿部 功			
		保存科学担当学芸員	中村 大介			

第2節 遺跡の立地と歴史的環境

(1) 調査地の地理的環境

芦屋市は兵庫県南東部に位置する。東西約2.5km、南北約8.3kmの南北に長い市域を有し、面積は18.57km²である。市域は、六甲山南麓および、六甲山地から大阪湾に流入する中小河川がもたらした土砂堆積により形成された沖積地にかけて位置する。その市域の多くは傾斜地である。東側を西宮市、西側は神戸市と接し、南側に大阪湾に臨む。

今回の調査地は芦屋市域の西側に位置し、東から、松ノ内町（業平遺跡）、月若町（月若遺跡）、西芦屋町、三条南町（寺田遺跡）にかけて所在する。調査地の中央部を芦屋川が南北に貫流し、北側を阪急電鉄神戸本線、南側はJR東海道本線に挟まれた、南への緩斜面地上に立地する、閑静な住宅地域である。

芦屋市から神戸市にかけての六甲山南麓地域では、六甲山地から大阪湾に流入する中小の河川によって、狭小な臨海平野部が形成されている。芦屋川、旧東川はこれら中小河川で、芦屋川の両岸には芦屋川・旧東川により形成された扇状地が広がり、芦屋川右岸の扇状地は、旧東川に侵食された谷により東西2つに分割できる。東側が芦屋川扇状地、西側は旧東川扇状地と呼称される。両者のうち旧東川扇状地は小規模で、標高もやや低い。業平遺跡は芦屋川扇状地の左岸に、月若遺跡は右岸に立地し、寺田遺跡は旧東川流路を挟んだ東西、2つの扇状地上に位置する。

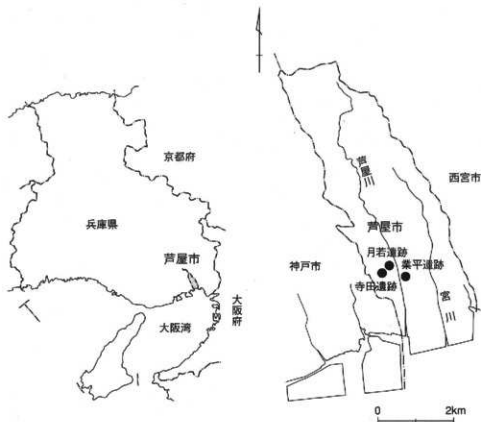
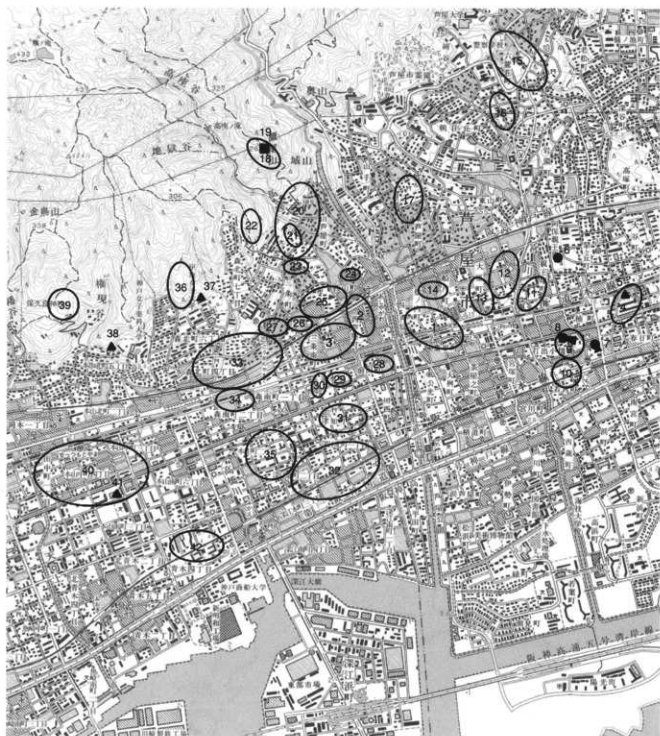


fig.2 調査地の位置



- | | | | |
|-------------|--------------|-------------|-------------|
| 1. 桑平遺跡 | 12. 打出岸造り遺跡 | 23. 冠遺跡 | 34. 森南町遺跡 |
| 2. 月若遺跡 | 13. 大原遺跡 | 24. 西山町遺跡 | 35. 本庄町遺跡 |
| 3. 寺田遺跡 | 14. 船戸遺跡 | 25. 戸原庵寺遺跡 | 36. 東山遺跡 |
| 4. 堂ノ上遺跡 | 15. 八十塚古墳群 | 26. 三糸九ノ坪遺跡 | 37. 森銅鐸出土地 |
| 5. 堂ノ上銅鐸出土地 | 16. 朝日ヶ丘遺跡 | 27. 三糸岡山遺跡 | 38. 生駒銅鐸出土地 |
| 6. 阿保親王塚古墳 | 17. 藤ヶ谷遺跡 | 28. 津知遺跡 | 39. 保久良神社遺跡 |
| 7. 金津山古墳 | 18. 城山遺跡 | 29. 清水町遺跡 | 40. 本山遺跡 |
| 8. 打出小樋古墳 | 19. 鷹尾城跡 | 30. 六糸遺跡 | 41. 本山銅鐸出土地 |
| 9. 打出小樋遺跡 | 20. 城山・三糸古墳群 | 31. 前田遺跡 | 42. 北青木遺跡 |
| 10. 若宮古墳 | 21. 山戸屋遺跡 | 32. 深江北町遺跡 | |
| 11. 久保古墳 | 22. 会下山遺跡 | 33. 森北町遺跡 | |

fig.3 周辺の遺跡 (S=1:25000)

(2) 樂平遺跡・月若遺跡・寺田遺跡の概要と周辺の歴史的環境

旧石器時代

丘陵上に立地する朝日ヶ丘⁽¹⁾、打出小槌⁽²⁾、岩ヶ平⁽³⁾等の各遺跡から国府型のナイフ形石器が出土しているが、遺構の存在は現在までに確認されていない。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、早期から遺物の出土が確認されている。早期の遺跡では山芦屋遺跡⁽⁴⁾から高山寺式の押型文土器や石器類が出土している。

前期の遺跡は山芦屋遺跡⁽⁵⁾が継続する他、朝日ヶ丘遺跡が成立する。中期に入ると山芦屋遺跡で中期末の北白川C式期の竪穴住居が検出されている。また本庄町遺跡⁽⁶⁾からは船元式を中心とした土器が出土している。後期には本庄町遺跡⁽⁷⁾からは貯蔵穴群が検出され、森南町遺跡⁽⁸⁾では土器が出土している。晩期前半には六条遺跡⁽⁹⁾で土器が、晩期後半には北青木⁽¹⁰⁾、本山⁽¹¹⁾、森南町遺跡等で土器が出土している他、若宮遺跡⁽¹²⁾では突帯文土器が遺構に伴って出土する等、晩期には居住域の沖積低地部への進出傾向が認められる。

樂平遺跡では第31地点⁽¹³⁾から前期前葉の羽島下層式併行期の土器と共に石鏃、多量の剥片等が出土し、阪神間では調査例の少ない石器製作地と考えられている。

月若遺跡では第13地点⁽¹⁴⁾から前期初頭、第2地点⁽¹⁵⁾から中期末の土器が出土している。

寺田遺跡では第105地点から後期の土器、第139地点⁽¹⁶⁾で晩期の篠原式と考えられる遺構、遺物が検出された他、各地点から晩期の遺物の出土が確認されている。

弥生時代

弥生時代に入ると、本山遺跡⁽¹⁷⁾においてまず集落の形成が認められ、近畿地方最古段階の弥生土器と共に多量の木製品が出土している。本山遺跡は後期まで継続し、西摂地域の拠点集落のひとつとして位置づけられている。また、前期中頃には北青木遺跡⁽¹⁸⁾が成立し、前期後半には若宮遺跡等、遺跡の数は増加する。中期に入ると若宮遺跡⁽¹⁹⁾から中期初頭の竪穴住居が確認されているものの、一時期遺跡の数は減少する傾向がみられる。中期後半には再び遺跡の数は増加傾向を示す。また、この時期には大阪湾を臨む丘陵上に会下山⁽²⁰⁾、城山⁽²¹⁾、東山遺跡等⁽²²⁾の高地性集落が出現し、後期初頭まで継続する。後期には芦屋廃寺、森北町等の遺跡が確認され、後期後半に入ると冠、三条岡山⁽²³⁾、三条九ノ坪⁽²⁴⁾、本庄町等、遺跡の数はさらに増加する。森南町遺跡では多量の遺構、遺物が検出されている。また、森北町遺跡⁽²⁵⁾では前漢鏡が出土している他、深江北町遺跡⁽²⁶⁾では円形周溝墓群が検出されている。また当地域では生駒銅鐸⁽²⁷⁾、本山銅鐸⁽²⁸⁾、森銅鐸⁽²⁹⁾、堂ノ上銅鐸⁽³⁰⁾が出土している。

樂平遺跡第26地点⁽³¹⁾では前期を中心とする前期～中期の土坑9基が検出されている。

月若遺跡では後期前半までは第12地点で中期後半の土坑1基が確認されているものの、遺構、遺物の存在は希薄であり、後期後半以降、第13、25地点で検出された竪穴住居を始め、多くの地点で遺構、遺物が検出されている⁽³²⁾。

寺田遺跡は、旧東川以西の第133・142・152・166・167・168地点⁽³³⁾から前期後半～中期初頭頃の竪穴住居、貯蔵穴等が検出されている他、第151、153地点では、自然流路内から多量の土器と共に木製高杯、銀先等の木製品が出土している。この他、第1地点⁽³⁴⁾から前期の土器が、第16地点⁽³⁵⁾から土坑墓が検出される等、前期後半～中期初頭の集落姿が次第に明らかになりつつある。中期の段階では第55⁽³⁶⁾・95⁽³⁷⁾・127・133・139地点から遺構、遺物が確認されているが、その数は多くはなく、前段階に比べて減少傾向にあるものと考えられる。後期前半には第55地点で竪穴住居1棟が確認されるものの、その数は少なく、減少傾向

は続くものとみられる。後期後半に入ると第40・95・117・118⁽³⁸⁾・128⁽³⁹⁾・137・139・159地点等多くの地点で遺構、遺物が確認される。月若遺跡等周辺の遺跡の動向と共通して、急増して行く傾向が認められ、古墳時代初頭にかけて継続していく。

古墳時代

芦屋川右岸地域では、古墳時代前期から、集落遺跡は再び減少する傾向が認められる。

～飛鳥時代

業平遺跡では第26地点から古墳時代後期の堅穴住居2棟、土坑、溝等が検出されているが、JR東海道本線を挟んで北側の第27地点からも遺構が確認されたことから、業平遺跡の遺構の広がりは業平町から船戸町に広がる事が判明した。

月若遺跡では、前期段階に第18・19地点⁽⁴⁰⁾で堅穴住居が各1棟検出されているが、中期～飛鳥時代にかけて、第18・19・71地点で堅穴住居が検出されている他、各地点で遺構、遺物が出土しており、増加傾向が認められる。この他、月若遺跡の特色として、第1・12・18・19・69地点では滑石製模造品が出土している。従来より指摘されている月若遺跡の祭祀遺物の豊富さを特徴づけるものである⁽⁴¹⁾。また、近隣では、当遺跡の北西に位置する三条岡山遺跡⁽⁴²⁾において祭祀遺構が検出されている。

寺田遺跡では第95地点で前期の堅穴住居1棟が検出されているが、中期以降に各地点で遺構、遺物の出土が増加し、後期～飛鳥時代にかけて、旧東川以東の第55・95・127・130・139・142地点で濃密な遺構、遺物の分布が認められる。旧東川以西の第133地点でも掘立柱建物が出土されているが、第166・167地点で土石流や流路内に大量の遺物の混入が認められることから、遺跡の中央部北寄り～東側の芦屋川扇状地上に、古墳時代後期～飛鳥時代にかけての集落の中心が推定される。また、近隣の三条九ノ坪遺跡⁽⁴³⁾からは「壬子年」（白雉3年[652]）銘の木簡が出土している。

一方古墳の造営は、宮川左岸の翠ヶ丘丘陵上で、前期に三角縁神獣鏡を有する阿保親王塚古墳⁽⁴⁴⁾が築造される。同丘陵上では中期後半に帆立貝形前方後円墳の金津山古墳⁽⁴⁵⁾、中期末に全長90mの前方後円墳である打出小植古墳⁽⁴⁶⁾が築造される。この他、過去には後期の古墳が存在したとされ、これらを総称して翠ヶ丘古墳群と呼称されている⁽⁴⁷⁾。後期～終末期には六甲山麓斜面に八十塚古墳群⁽⁴⁸⁾、城山・三条古墳群⁽⁴⁹⁾等の群集墳が築造される。後者にはミニチュア炊飯具を副葬する特色があり、在地系の前者に対し、渡来系の造墓集団の想定が指摘がある⁽⁵⁰⁾。

奈良～平安時代

芦屋川右岸の扇状地上には、白鳳期建立と考えられる芦屋廃寺⁽⁵¹⁾が存在し、金堂基壇を始め、近年の発掘調査からその様相がしだいに明らかになりつつある。また、津知遺跡⁽⁵²⁾では大型掘立柱建物が発見され、「和同開珎」・「萬年通寶」の銭貨、墨書土器、円面硯、芦屋廃寺の同范瓦などが出土し、深江北町遺跡⁽⁵³⁾からは「驛」と墨書された多数の土器や、「承和」（834～848）銘の支給伝票木簡などが出土しており、葦屋驛家の関連遺構であることが有力視されている。

月若遺跡では旧傍示川を東限にした西側で、奈良・平安時代の遺構、遺物が出土されており、以東では分布が見られないとの指摘がある。これまでの調査では第35・37地点から奈良時代の掘立柱建物、土坑、ピットが検出されている。平安時代後半以降遺構、遺物は大きく減少している⁽⁵⁴⁾。

寺田遺跡では第1・127・133・137・141、166、167地点で奈良時代の掘立柱建物等の遺構

が検出されている。また、第90地点⁽⁵⁵⁾からは「大領」、「小領」の黒土器が出土している。平安時代は第133地点で顕著な遺構が確認されているが、遺構の分布はやや減少傾向と言える。第166・167地点では流入した状態で、奈良時代後半頃～平安時代前半頃の遺物が多量に出土した他、第166地点の井戸からは芦屋廃寺の同系瓦が出土している。

鎌倉時代以降

鎌倉時代以降は栗平、芦屋廃寺、月若、寺田、津知、前田、六条、森北町、森南町等多くの遺跡が知られており、各遺跡からは顕著な遺構、遺物が確認されている。

寺田遺跡では平安時代～鎌倉時代にかけての特色のある出土遺物として、第166・167地点出土の滑石製石鍋（11世紀）や、第139地点から出土の中国産黄釉鉄絵盤（12世紀後半）が挙げられる。石鍋は近畿地方での出土が稀な、断面縦長の楕状突起を有する古いタイプであり、第167地点出土のものはほぼ完形品である。黄釉鉄絵盤は兵庫県での出土例は他に尼崎市大物遺跡⁽⁵⁶⁾で知られている。大物遺跡では寺田遺跡出土と同じタイプの石鍋も出土しており、瀬戸内海交通の拠点のひとつと考えられる大物遺跡との出土遺物の共通点から、古代～中世にかけての寺田遺跡の性格を考える上で重要な遺物である。

月若、寺田遺跡の北西側に位置する高座川左岸の城山山頂には、室町時代には土豪瓦林政頼により鷹尾城が築城される⁽⁵⁷⁾。

近世には徳川幕府による大坂城再築に伴い、西宮市から神戸市東灘区にかけての六甲山南麓においても石材の切り出しが行われたことが文献などから知られている。分布調査、近年の発掘調査により「徳川大坂城東六甲採石場」と呼称される、石切丁場の状況が明らかになりつつある⁽⁵⁸⁾。

[註]

- (1) 村川行弘「朝日ヶ丘縄文遺跡・八十塚古墳群」 芦屋市教育委員会 1966
- (2) 大川勝幸・半澤幹雄「打出小槌遺跡（第22地点）」『平成8年度 年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1997
- (3) 藤井祐介「旧石器・縄文時代」『新修芦屋市史』資料編1 芦屋市役所 1976
- (4) 関西大学考古学研究室編「兵庫県芦屋市 山戸遺跡S4地点現地説明会資料」芦屋市教育委員会・関西大学山戸遺跡調査会 1983
- (5) 森岡秀人・水南アツ子編「平成7年度芦屋市内発掘調査一震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認（試掘）一概要報告書」芦屋市教育委員会 1996
- (6) 中居さやか・中村大介他「本庄町遺跡第9次調査 発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2003
- (7) 別府洋二・中川 涉他「本庄町遺跡」 兵庫県教育委員会 1991
- (8) 黒田恭正・中村大介「森岡町遺跡発掘調査報告書―第1・2次調査―」神戸市教育委員会 2005
- (9) 渡辺 昇編「芦屋市 六条遺跡」 兵庫県教育委員会 2003
- (10) a) 小川良太・山下史郎「北青木遺跡」 兵庫県教育委員会 1986
b) 宮本宏明・石島三和他「北青木遺跡発掘調査報告書―第3次調査―」神戸市教育委員会 1999
- (11) 井尻 格「本山遺跡 第23次調査」『平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1999
- (12) 森岡秀人・三輪見三・永光 寛他「若宮遺跡（第3・4・11・16・17・25・31・32・33・34地点）発掘調査概要報告書」芦屋市・芦屋市教育委員会 2002
- (13) 吉田宣夫・金森安孝「栗平遺跡（第31地点）」『平成8年度 年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1997
- (14) 浅岡俊夫・古川久雄他「芦屋市月若遺跡―第10地点・第13地点―」 六甲山南麓遺跡調査会 1993
- (15) 森岡秀人「総括―月若遺跡をめぐる諸問題―」『平成6年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書』 芦屋市教育委員会 1995
- (16) 前田佳久・平田朋子「寺田遺跡第139地点の調査」『寺田遺跡発掘調査報告書 第132・133・137・139・141・142地点』 芦屋市・芦屋市教育委員会 2003
- (17) 安田 滋「本山遺跡第17次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1998
- (18) 前掲 (9)
- (19) 森岡秀人・佐藤公保「若宮遺跡（第1・2地点）発掘調査報告書」芦屋市・芦屋市教育委員会 1999
- (20) 村川行弘・石野博信「会下山遺跡」 芦屋市教育委員会 1964
- (21) 村川行弘・森岡秀人「弥生時代」『新修 芦屋市史 資料編1』 芦屋市役所 1976
- (22) 宮本雄雄「本山町東山遺跡」『昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1987

- (23) 村川行弘・森岡秀人「三条岡山道跡」『芦屋市文化財調査報告』第10集 芦屋市教育委員会 1979
- (24) 柏原正民・日次謙一「三条九ノ坪道跡(第15地点)」『平成8年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1997
- (25) 黒田恭正「森北町道跡」『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1988
- (26) 山下史郎編「深江北町道跡—景宮神戸深江団地建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」兵庫県教育委員会 1988
- (27) 村川行弘「神戸市東灘区本山町中野字生駒出土の銅鐸」『考古学雑誌』51・2 1965
- (28) 神戸市教育委員会編「本山道跡 第12調査の概要」神戸市教育委員会 1991
- (29) 村川行弘・三本文雄「神戸市東灘区本山町坂下出土銅鐸(森岡鐸)」『神戸市板ヶ丘銅鐸・銅戈』兵庫県教育委員会 1969
- (30) 村川行弘「考古学上からみた芦屋」『新修 芦屋市史 本編』芦屋市役所 1971
- (31) 小松 譲・東 和幸「栗平道跡(第26地点)」『平成8年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1997
- (32) 竹村忠洋・白谷朋世「月若道跡(第71地点)発掘調査報告書」芦屋市教育委員会 2004
- (33) a) 前田佳久・平田朋子・中居さやか「寺田道跡発掘調査報告書 第127・130・132・133地点」芦屋市・芦屋市教育委員会 2002
b) 前田佳久編「寺田道跡発掘調査報告書 第132・133・137・141・142地点」芦屋市・芦屋市教育委員会 2003
c) 川上厚志・阿部 功・中村大介「寺田道跡発掘調査報告書 第150～153・157～160・166～168地点」芦屋市・芦屋市教育委員会 2005
- (34) 南 博史編「芦屋市寺田道跡発掘調査報告書」財団法人古代学協会 1985
- (35) 森岡秀人・和田秀寿・後神 泉「昭和63年度国庫補助事業 芦屋廃寺道跡K地点・寺田道跡第16次地点発掘調査概要報告書」芦屋市教育委員会 1989
- (36) 神野 信・吉田東明「寺田道跡(第55地点)」『平成8年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1997
- (37) 重藤輝行・竹村忠洋他「寺田道跡第95地点発掘調査概要報告書」芦屋市教育委員会 1999
- (38) 山田清朝・服部 寛「寺田道跡(第117～124地点)発掘調査概要報告書」芦屋市教育委員会 2001
- (39) 森岡秀人・坂田典彦・辻 康男「平成12・13年度国庫補助事業 寺田道跡(第128地点)発掘調査報告書」芦屋市教育委員会 2003
- (40) 森岡秀人「平成6年度国庫補助事業 芦屋市内道跡発掘調査概要報告書 月若道跡(第19地点)」芦屋市教育委員会 1995
- (41) a) 前田佳久・石島三和・中村大介他「月若道跡発掘調査報告書 第68・69・70地点」芦屋市・芦屋市教育委員会 2004
b) 竹村忠洋・白谷朋世「月若道跡(第71地点)発掘調査報告書」芦屋市教育委員会 2004
- (42) 村川行弘・村川義典「三条岡山道跡第4次調査概要」芦屋市教育委員会 1983
- (43) 高瀬一嘉「三条九ノ坪道跡」兵庫県教育委員会 1997
- (44) 森岡秀人「阿保親王塚古墳」『兵庫県史 考古資料編』兵庫県 1992
- (45) 前掲(5)
- (46) 前掲(12)
- (47) 森岡秀人「古墳時代の芦屋地方—近年の道跡調査をふりかえって—(上)・(下)」『兵庫県の歴史』23・24 兵庫県 1987・1988
- (48) 網干善教・米田文孝・竹村忠洋ほか編「八十塚古墳群の研究」関西大学文学部考古学研究室 200
- (49) 竹村忠洋「芦屋市域の古墳時代後期から飛鳥時代の道跡について」『八十塚古墳群の研究』関西大学文学部考古学研究室 2002
- (50) 森岡秀人「摂津・八十塚古墳群と免原郡草屋郷・賀美郷周辺の古代史」『八十塚古墳群の研究』関西大学文学部考古学研究室 2002
- (51) 森岡秀人・竹村忠洋「芦屋廃寺—芦屋廃寺中庭部の発掘調査」『平成12年度兵庫県下埋蔵文化財発掘調査連絡会資料』兵庫県教育委員会埋蔵文化財発掘調査事務所 2001
- (52) a) 阿部嗣治「津知道跡の調査(1)・(2)」『のじぎく文化財だより』第17・18号 財団法人淡神文化財協会
b) 森岡秀人「津知道跡第2地点の発掘調査の概要」『津知道跡第17地点発掘調査概要報告書』芦屋市教育委員会 1999
- (53) 山本雅和・阿部敬生・中谷 正「深江北町道跡 第9次 埋蔵文化財発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2002
- (54) 前掲(41) b)
- (55) 前掲(39)
- (56) a) 岡田 勝・山上真子編「尼崎市埋蔵文化財年報 平成7年度(2)」尼崎市教育委員会 2001
b) 岡田 勝・山上真子編「尼崎市埋蔵文化財年報 平成7年度(5)」尼崎市教育委員会 2004
- (57) 熱田 公福「壽尼城」『兵庫県の中世城館・荘園道跡』兵庫県教育委員会 1982
- (58) 森岡秀人・坂田典彦編「徳川大坂城東六甲探石場・岩ヶ平石切丁場跡」芦屋市教育委員会 2005

第2章 業平遺跡 第61地点の調査

第1節 調査の概要

本調査区は芦屋川東岸に位置し、現芦屋川の河道に近接する。現状では北西から南東方向へ下がる緩斜面に立地する。調査に先立ち実施した試掘調査の結果、厚い砂層の堆積が確認され、芦屋川の影響を強く受けているものと推定された。

(1) 調査の方法

発掘調査は、多量の排土が予測され、排土置場の確保及びラフタークレーンによる空中写真撮影実施の関係から、調査区を3区に分割して実施した。芦屋市街路課による鋼板矢板の打込設置作業、整地土の掘削除去、排土の搬出後に、まず東半部の調査から着手し、これを1区とした。1区の調査完了後に反転作業を行ない、西半部(2・3区)の調査を行なった。調査はバックホー、キャリアで整地土、旧耕土の除去を行ない、その後は人力で遺物包含層を掘削し、遺構の検出及び精査、遺構掘削を行なった。



fig.4 調査区の地区割



fig.5 業平遺跡第61地点調査区位置

(2) 基本層序

調査の結果、3面の遺構面を確認した。

基本層序は、1mを超える盛土及び攪乱層の下層に、昭和13年(1938)に発生した阪神大水害に伴うものと考えられる洪水砂層(淡茶褐色細砂)が1mを超えて厚く堆積する。2区と3区では、洪水砂層で覆われた旧耕土層・床土層下に、地表面から2.8m前後で、黒褐色シルトが存在する。この上面が第1遺構面であり、中世の遺構が検出された。1区では黒褐色シルトは存在せず、東端は流路(SR201)となり、大きく落ち込んでいた。3区の西半部分も、現代の攪乱及び水害の影響を受け、第1遺構面は存在せず、2区の西端で検出した自然河道(SR101)の底部付近を確認したに留まる。黒褐色シルトは古墳時代の遺物包含層であり、下層の暗黄灰色砂混シルトの上面が第2遺構面である。2・3区では古墳時代後期の遺構を検出した。暗黄灰色砂混シルトの下層が第3遺構面で、縄文時代晚期から弥生時代後期の遺構を同一面で検出した。尚、1区では、中世以降の削平の影響が大きく、調査対象となった遺構面は1面で、古墳時代と中世の遺構が同一面で検出されている。古墳時代に属する資料が多いことから、便宜的に調査対象面を第2遺構面とし、遺構全体図を作成した。

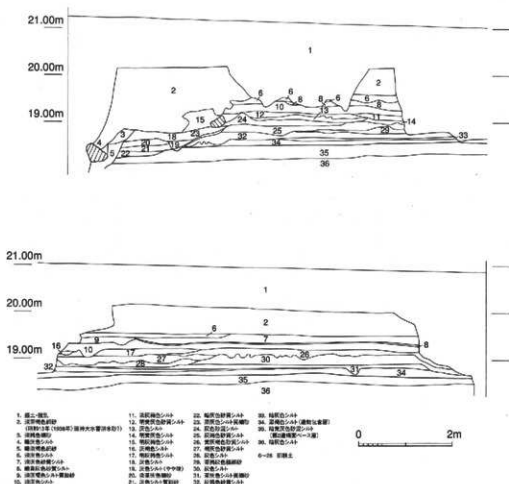


fig.6 1区西壁土層

第2節 第3遺構面の遺構と遺物

縄文時代晩期から弥生時代後期の遺構面である。第3遺構面の遺物包含層の大半は削平されているが、遺構面直上層及び第2遺構面の遺物包含層からは、縄文時代晩期の土器や石器が出土している。2区の西端部と3区では、第3遺構面と第2遺構面との峻別は明瞭であったが、2区の西端部以東は、ほぼ同一検出面である。当節で扱う資料は、層序と出土遺物から、第2遺構面検出遺構に先行すると判断できる遺構及び出土遺物である。地形は、3区から2区の西半部にかけては平坦であるが、2区の東半部から1区にかけて緩やかに傾斜している。遺構は調査区西半の平坦部を中心に分布しており、土器棺1基、竪穴住居1棟、土坑30基、柱穴数基を検出した。

(1) 土器棺

2区の西端部で縄文時代晩期の土器棺を1基検出した。

ST 301

北側の一部は攪乱により失われているが、直径95cm、深さ60cmの掘形に、底部を打ち欠いた深鉢を据えている。深鉢の頸部は、土圧等の影響ですべて破損しており、内側に落ち込んでいる。掘形の埋土は砂質が強く、土器内部の埋土は粘質土を主体とする。埋土から遺物等は出土しなかった。

1の復元口径は31.5cm、残存高は34.7cmである。波状口縁の波頂部は欠損している。口頸部は緩やかに外反し、内外面ともナデを施す。胴部は、外面は二枚貝条痕を、上半部はヨコ方向、下半部はナナメ方向に施している。内面は丁寧なナデ調整である。縄文時代晩期中葉の篠原式⁽¹⁾に属する資料である。

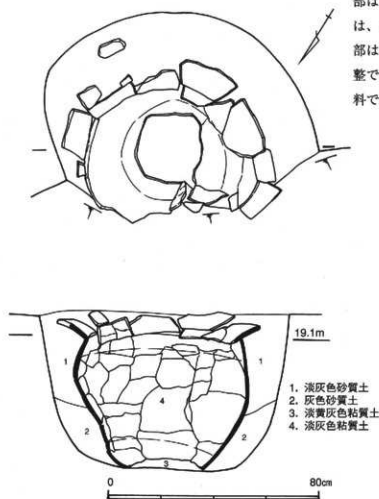


fig.7 ST301

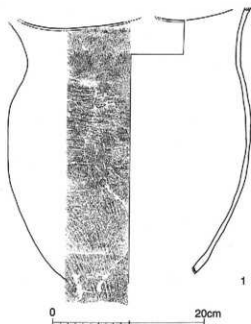
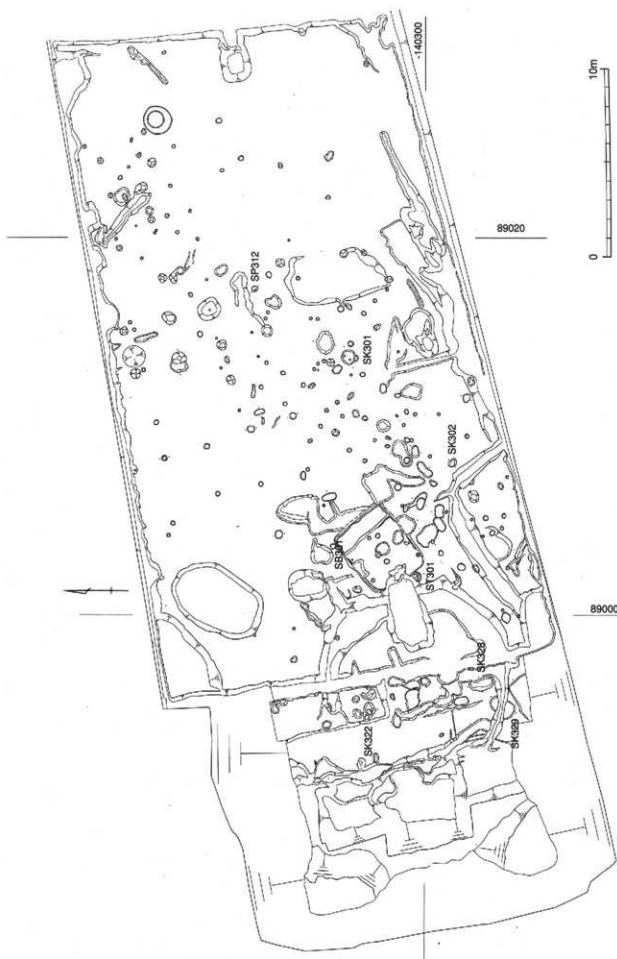


fig.8 ST301出土遺物

Fig. 3 聚S遺跡平面



(2) 土坑

土坑を30基検出した。遺物が出土した遺構は少ないが、出土遺物は、縄文時代晩期と古墳時代初頭の資料である。

- S K 301 長径80cm、短径65cm、深さ10cmの楕円形の土坑である。埋土から縄文時代晩期の土器が少量出土した。
- S K 302 長径55cm、短径50cm、深さ25cmの楕円形の土坑である。埋土から縄文時代晩期の土器が少量出土した。
- S K 322 長辺80cm、短辺65cm、深さ15cmの不定形の土坑である。底面より5cm程度上方で、花崗岩が3石出土した。遺構の性格は不明である。遺物は出土しなかった。

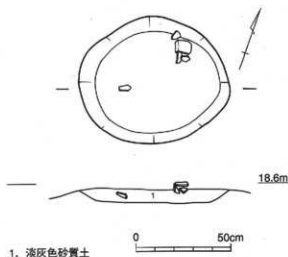


fig.10 SK301

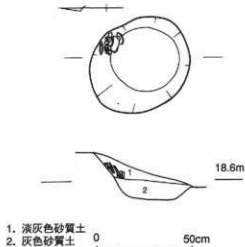


fig.11 SK302

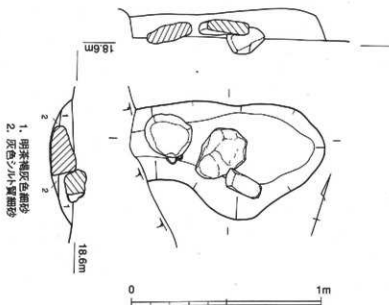


fig.12 SK322

S K 328

長辺125cm、短辺70cm、深さ20cmの不定形の土坑である。縄文土器が1点出土した。

2は縄文時代晩期の深鉢の口縁部である。波状口縁で、波頂部の一部は欠損しているが、凹みを持つ。口縁端部は面を持つ。内外面にケズリを施すが、外面に粘土接合痕を残す。篠原式に属する資料である。

S K 329

長辺135cm、短辺100cm、深さ25cmの不定形の土坑である。中央部を1号墳の周溝により攪乱されている。埋土より古墳時代初頭の遺物が出土した。

3は甕の底部から胴部である。胴部上半部は横方向、下半部は右上がりのタタキを施す。内面は板ナデを施す。この他に図化できなかったが、土坑の南端付近から、高坏の坏部の破片が出土している。

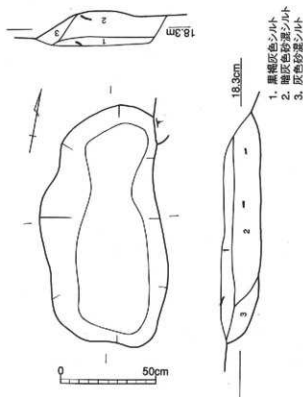


fig.13 SK328

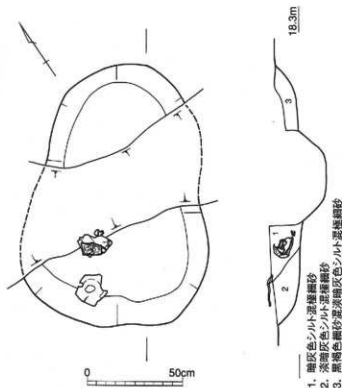


fig.15 SK329

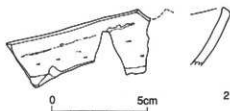


fig.14 SK328出土遺物

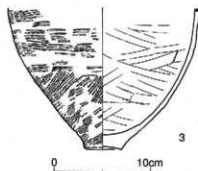


fig.16 SK329出土遺物

(3) 竪穴住居

2区の西半部で竪穴住居を1棟検出した。

S B301

4.25m×3.40mの方形の竪穴住居である。西辺の一部が攪乱されているが、周壁溝は全周すると考えられる。ベッド状遺構は西側の北半部はやや不明瞭であるが、東西の2箇所に設けている。東側のベッド状遺構は、盛土で設けられているが、西側のベッド状遺構の設置状況は不明である。中央土坑の周辺からは、炭の小片の広がりを確認した。柱穴は6基検出したが、主柱穴は2基と考えられる。南北壁際の床面に2基の土坑（SK01・SK02）が設けられているが、用途は不明である。

住居に伴う遺物は、SK02の上層で小型の鉢が1点、SK02の西側の床面から、砥石が1点、西側のベッド状遺構の南端から、完形の鉢が伏せられた状態で1点出土した。

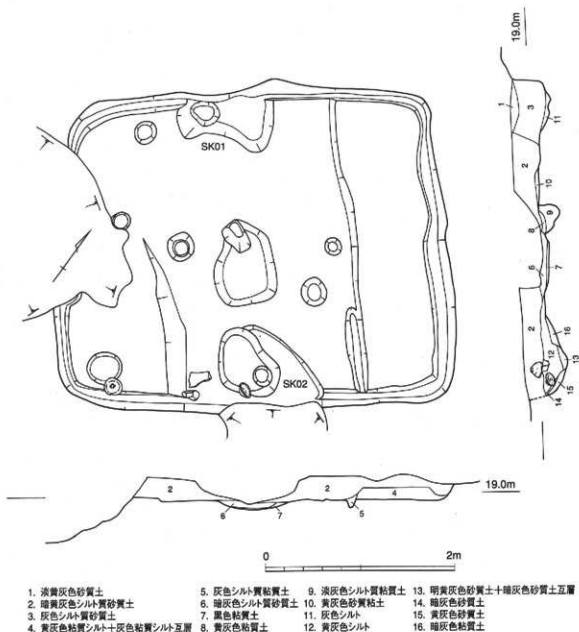


fig.17 SB301

古墳時代初頭の遺物である。

出土遺物

図化できた遺物は、鉢と砥石である。

4～6は鉢である。4は口縁端部を欠損するが、残存高7.7cm、底径3.5cmを測る。体部は内湾して上外方に広がり、口縁部は緩やかに外反する。体部外面はタキ後ナデを施し、内面はタテ方向のハケを施す。底部はわずかに凹む。5は口径13.8cm、器高4.9cm、底径8.4cmを測る。体部はわずかに内湾して外上方に伸び、口縁端部は丸い。体部外面はナデを施すが、下半部は指頭圧痕が残る。体部内面は板ナデを施す。突出する底部の外面は凹み、ナデを施す。6は口径19.2cm、器高10.7cm、底径3.8cmを測る。半球状の体部から口縁部は外反する。口縁端部は面を持ち、上方にわずかにつまみあげる。口頸部内外面はナデ、体部の外面はタキの後ヘラミガキ、上半部内面は丁寧なヨコハケを施す。底部は未調整で平坦面を持つ。

7は砥石である。長さ29.6cm、幅14.8cm、高さ9.7cm、質量590g、比重2.9を測り、砂岩製と考えられる。4面共に使用痕が確認できる。

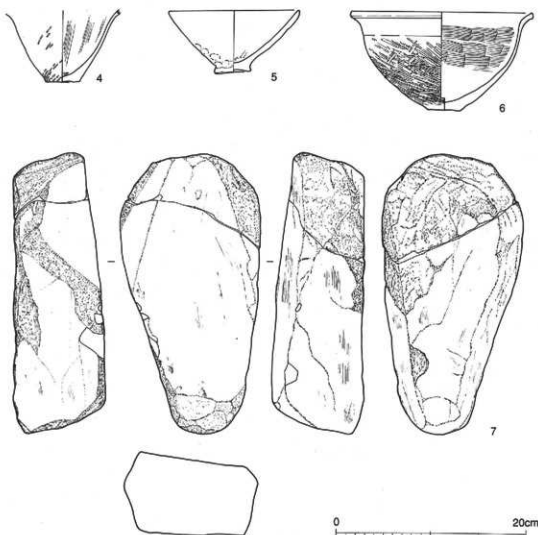


fig.18 SB301出土遺物

(4) 柱穴

SP312

直径約35cm、深さ25cmの柱穴である。埋土よりサヌカイト製石鏃が1点出土した。8は先端及び基部端部を欠損するが、凹基式の五角形鏃である。残存長19.5mm、基部幅16.7mm、厚さ3.6mm、重量1.07g、比重2.55を測る。

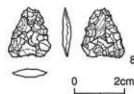


fig.19 SP312出土遺物

(5) 遺構に伴わない遺物

第3遺構面直上及び、上層の遺構や遺物包含層などの堆積土より、縄文時代晩期の遺物が多数出土した。図化した資料は、縄文土器、石器である。

縄文土器

出土した遺物は細片が多く、口径が復元できる資料はない。

9～11は浅鉢である。9は口縁部が内折した後、強く外折する。内外面ともにナデを施す。10は口縁端部を上方に屈折する。内面の屈曲線は明瞭である。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともミガキを施す。11は口縁端部を上方につまみ上げる。内面に1条の沈線を巡らす。内外面ともにミガキを施す。

12～26は深鉢である。12は強く外反する口縁部を持ち、口縁端部は面を持つ。内外面共に調整は不明である。13は直線的な口縁部が緩やかに外折する。器表面の残存状況は悪く、調整は不明である。14は緩やかに外反する口縁部を持ち、口縁端部はO字形のキザミを施す。外面は二枚貝条痕を施す。15は緩やかに外反する口縁部を持ち、口縁端部は面を持つ。外面はヘラケズリ、内面は丁寧なナデを施す。16は緩やかに外反する口縁部を持ち、口縁端部は面を持つ。外面は二枚貝条痕を施し、内面はナデを施す。17は波状口縁を持ち、波頂部は凹む。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は面を持つ。外面はヘラケズリ、内面は丁寧なナデを施す。18はわずかに外反する口縁部を持つ。器表面の残存状況は悪いが、外面にヘラケズリの痕跡が認められる。内面はナデを施す。19はわずかに外反する口縁部を持つ。外面は二枚貝条痕を施す。20はわずかに外反する口縁部を持つ。内外面共にナデを施す。21は直線的に伸びる口縁を持ち、口縁端部は上外方につまみあげる。外面はヘラケズリ、内面はナデを施す。22は直線的に伸びる口縁を持ち、口縁端部は狭いD字形のキザミを施す。外面は二枚貝条痕、内面はナデを施す。23は直線的に伸びる口縁部を持ち、胴部から強く外折する。口縁端部は丸い。外面は二枚貝条痕、内面はナデを施す。24はわずかに外反する口縁部を持ち、口縁端部は丸い。外面は二枚貝条痕、内面はナデを施す。生駒西麓の胎土である。25・26は滋賀里Ⅳ式の深鉢の口縁部で、口縁端部直下に突帯を巡らす。25は突帯にO字形、26はD字形のキザミを施す。共に、口縁端部にもキザミを施す。

27～33は底部である。33は平底気味であるが、他は底部が強く凹む。底径は、27が3.8cm、28が4.6cm、29が5.6cm、30が5.0cm、31が5.5cm、32が4.0cm、33が8.4cmを測る。

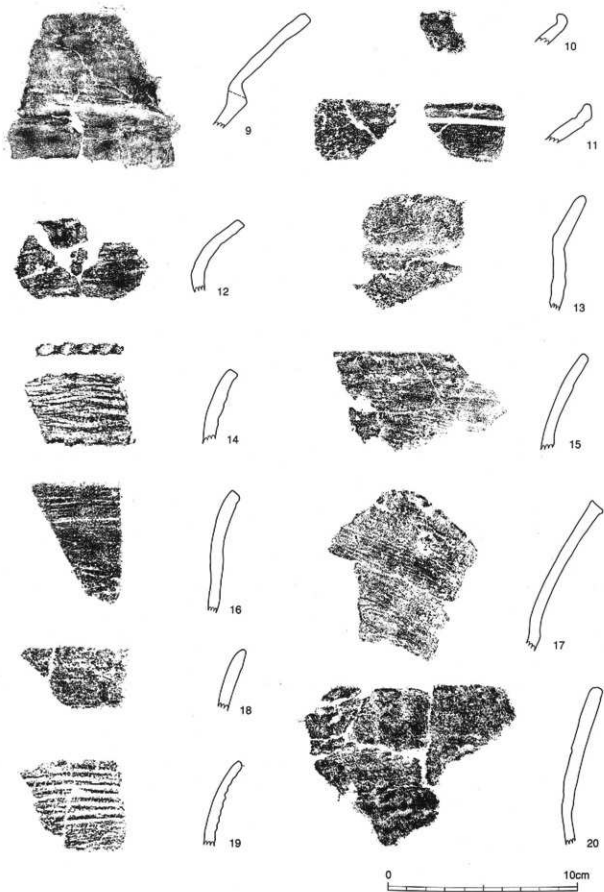


fig.20 遺構に伴わない遺物 (1)

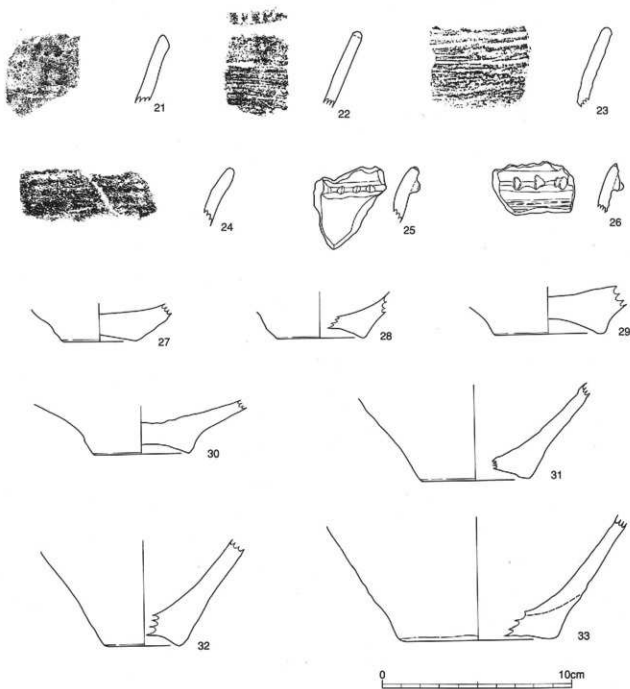


fig.21 遺構に伴わない遺物 (2)

番号	出土位置	番号	出土位置	番号	出土位置	番号	出土位置
9	2区西半部第2面	16	2区西半部第2面	23	2区西半部第2面	30	2区西半部第2面
10	2区西半部第2面	17	2区西半部第2面	24	2区西半部第3面	31	2区西半部第2面
11	2区西半部第2面	18	2区西半部第2面	25	2区西半部第3面	32	2区西半部第2面
12	2区西半部第3面	19	2区西半部第2面	26	2区西半部第2面	33	2区西半部第2面
13	2区西半部第2面	20	3区1号墳石室掘形	27	2区東半部第2面		
14	2区西半部第2面	21	2区西半部第2面	28	2区西半部第2面		
15	2区西半部第2面	22	2区西半部第3面	29	2区西半部第2面		

表1 縄文土器出土地一覧

石器 (34~60)

34は小片であるが、磨製石剣の先端部と考えられる。全面に研磨痕が確認できる。35は石棒または、磨製石剣の基部と考えられる。全面に研磨痕が確認できる。端部に使用痕が認められ、剥片となった後に再使用された可能性がある。36は石棒の一部と考えられる。加工痕或使用痕は確認できない。緑泥片岩製である。37は太形蛤刃石斧の刃部である。刃部に、使用時に欠損したと考えられる痕跡がある。38は磨石である。両面共に擦痕が確認できる。

39~60はサヌカイト製の石器である。39~48は石鏃である。すべて凹基式で、42~48は五角形鏃である。49~53は楔形石器である。54~60は削器である。

番号	遺物名	出土位置	長	幅	厚	重量	体積	比重	石材
34	磨製石剣?	2区1号墳周溝	41.5	19.1	12.4	9.07	3.41	2.66	サヌカイト
35	磨製石剣?	2区東半部第2面	66.8	21.4	6.8	12.51	5.00	2.50	サヌカイト
36	石棒?	SP140	143.3	35.9	10.2	55.15	21.50	2.57	緑泥片岩
37	太形蛤刃石斧	2区西半部第3面	69.5	79.9	33.3	291.00	104.00	2.80	砂岩
38	磨石	3区1号墳周溝	115.4	82.9	61.1	879.00	303.00	2.90	砂岩

表2 石器出土地・計測値一覧 (1)

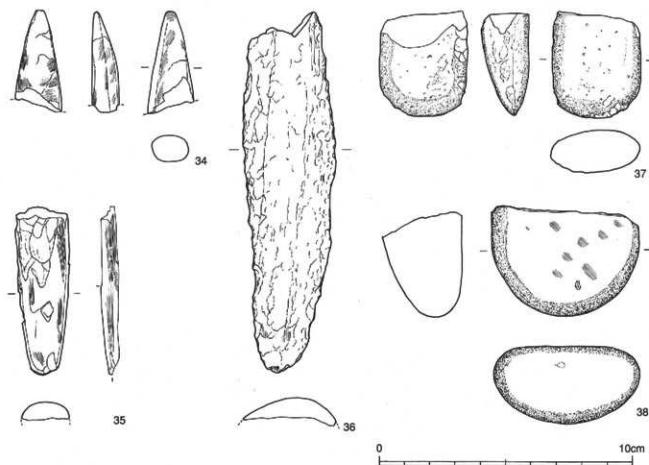


fig.22 遺構に伴わない遺物 (3)

番号	遺物名	出土位置	長	幅	厚	重量	体積	比重	番号	遺物名	出土位置	長	幅	厚	重量	体積	比重
39	石鏃	2区東半部旧跡土	14.7	13.4	2.2	0.33	0.12	2.75	50	楔形石器	SB301	32.8	23.3	8.2	4.44	1.68	2.64
40	石鏃	2区東半部旧跡土	16.2	12.8	2.1	0.42	0.19	2.21	51	楔形石器	SR301	21.2	21.5	3.9	2.21	0.84	2.63
41	石鏃	2区西半部第2面	22.3	10.4	2.7	0.55	0.21	2.62	52	楔形石器	2区東半部旧跡土	20.1	17.9	7.0	2.31	0.90	2.57
42	石鏃	SD207	14.1	14.2	2.7	0.50	0.22	2.27	53	楔形石器	2区西半部第2面	59.5	61.9	8.6	40.56	15.00	2.70
43	石鏃	SB301	21.1	13.7	3.5	0.79	0.31	2.55	54	磨器	SB301	34.0	16.8	5.9	3.72	1.43	2.60
44	石鏃	2区東半部旧跡土	22.2	13.5	3.2	0.65	0.25	2.60	55	磨器	3区自然河濱	37.6	33.6	7.3	7.90	3.01	2.62
45	石鏃	SB301	17.4	11.8	2.9	0.52	0.20	2.60	56	磨器	2区西半部第2面	62.2	34.8	8.3	14.26	5.50	2.59
46	石鏃	2区東半部旧跡土	21.4	15.1	3.0	0.93	0.36	2.58	57	磨器	2区西半部第2面	59.9	38.4	17.3	29.04	11.40	2.55
47	石鏃	1号墳石室床面直上	17.2	14.1	26.0	0.52	0.20	2.60	58	磨器	SB207	69.9	29.6	11.0	22.18	8.30	2.67
48	石鏃	2区東半部旧跡土	18.9	11.5	3.6	0.70	0.31	2.26	59	磨器	2区東半部旧跡土	97.8	44.7	8.5	40.64	15.40	2.64
49	楔形石器	2区西半部第2面	23.6	22.6	5.4	2.94	1.14	2.58	60	磨器	3区旧跡土	89.6	55.8	10.0	60.60	23.30	2.60

表3 石器出土地・計測値一覧(2)

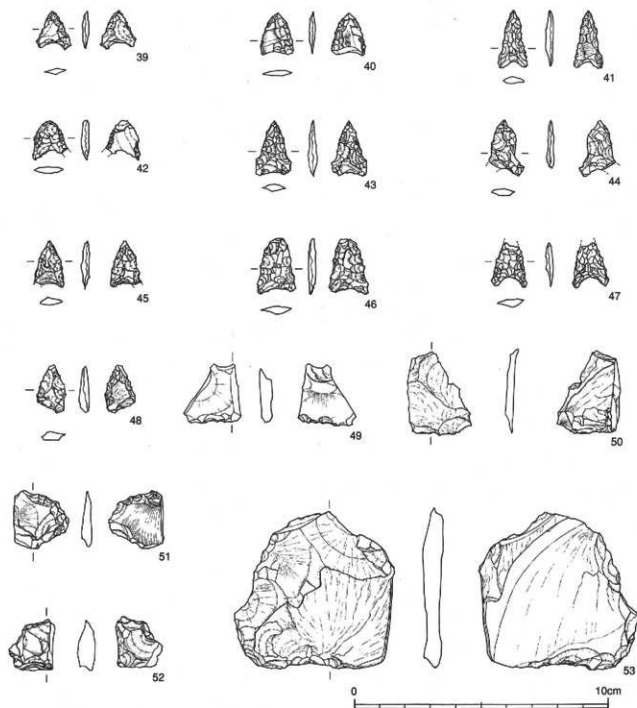


fig.23 遺構に伴わない遺物 (4)

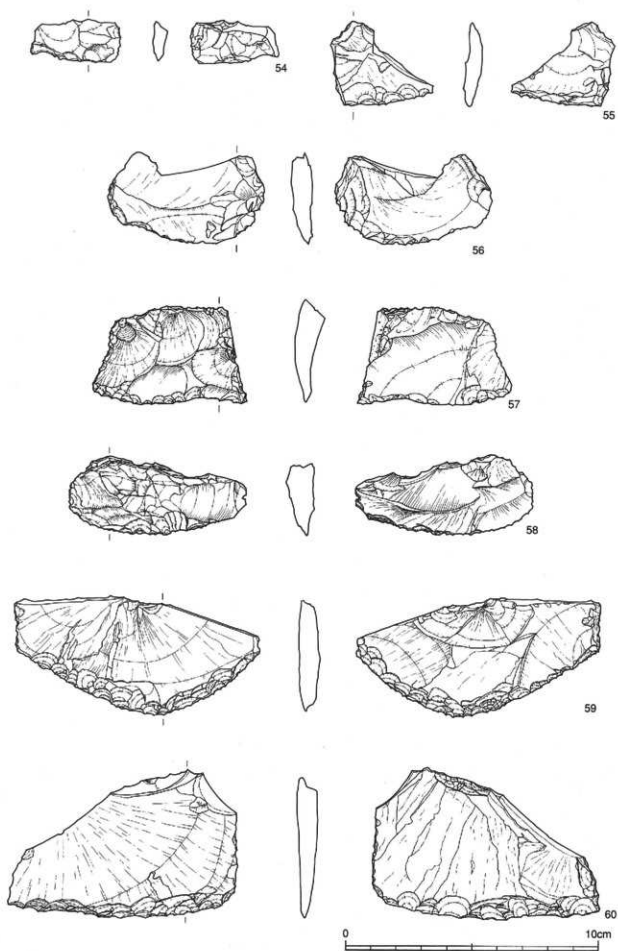


fig.24 遺構に伴わない遺物 (5)

第3節 第2遺構面の遺構と遺物

古墳時代後期を中心とする遺構面であるが、1区は後世の削平を強く受けており、本来、第1遺構面検出遺構として捉えるべき中世の遺構も、同一面で検出している。検出した遺構は、竪穴住居4棟、古墳2基、埋葬施設3基、溝、ピット、土坑等である。

(1) 竪穴住居

調査区の制約により、全容が判明せず、竪穴住居と確定できる遺構はないが、規模や平面形から、住居である可能性が高い遺構が4基検出された。

S B 201

1区の中央部南端部に検出された。東西3.4m前後、南北4.1m以上の長方形の竪穴住居と考えられる。北側をS K 201によって切られ、南側は調査区外へと続くため、全体の規模は不明である。床面の深さは検出面から15cm前後である。床土は、異なる土質が混在し、人為的に埋めて床としている。

壁際の北西側から北側にかけて、幅17cm前後、検出面からの深さ5cm前後の周壁溝の一部と考えられる溝が巡る。ピットは2基検出したが、北側の1基(P1)は柱穴である可能性が考えられるが、南側の1基(P2)は、位置からも柱穴であるかは疑問が残る。その他の施設は確認されなかった。

埋土内からは土師器片が出土している。時期については、微細な破片のため特定は困難であるが、古墳時代のものと考えられる。

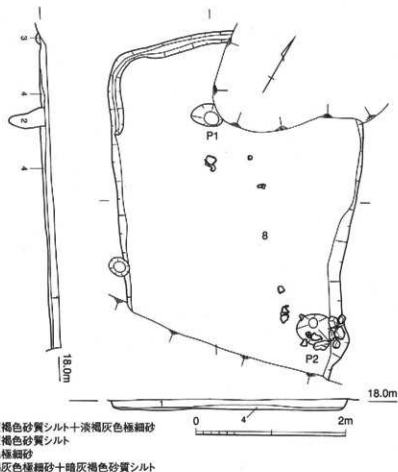


fig.25 SB201

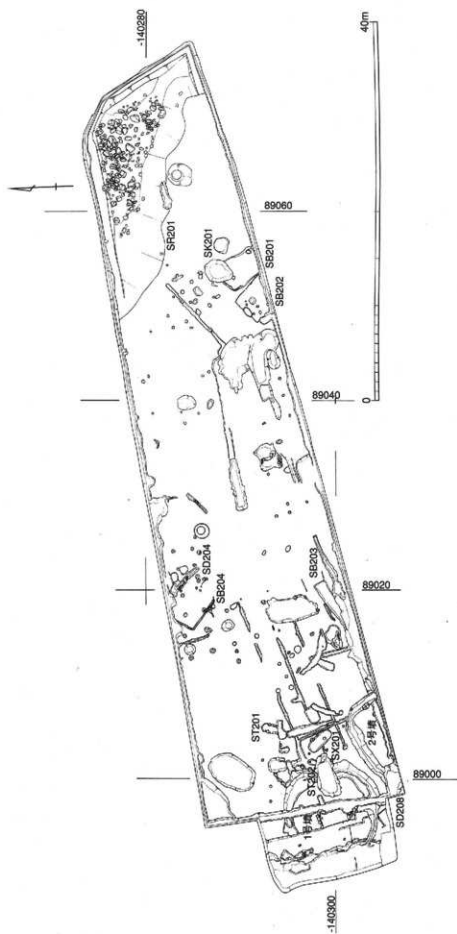


fig. 25 第2号溝断面

S B 202

S B 201の南西側で検出された遺構で、東西3.4m前後、南北3.8m以上の長方形の竪穴住居と考えられる。南側は調査区外へと続き、南東側の一部をS B 201に切られているため、全体の規模については不明である。

床面からは、周壁溝等は検出されなかった。埋土は暗灰色シルトのブロックを含む淡緑灰色砂質シルトであり、住居を廃棄した後、人為的な埋め戻しが行なわれたと考えられる。ピットは床面で4基を検出したが、位置、規模から柱穴であるかは不明である。

埋土より鉄釘が1点出土した。61は残存長41.2mm、断面形は1辺3.6mmの方形で、頭部はT字形である。他に出土遺物はないため、時期の特定については困難であるが切り合い関係からS B 201に先行するもので、古墳時代の遺物と考えられる。

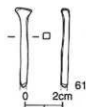


fig.27 SB202出土遺物

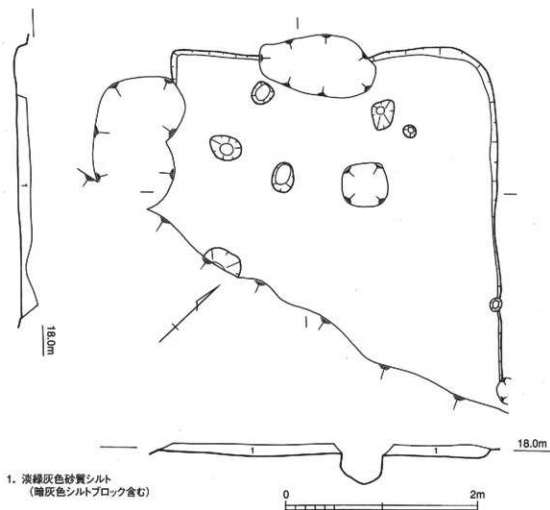


fig.28 SB202

S B 203

2区の中央部南端部で検出された。東西5.05m以上、南北2.1m以上の方形の遺構で、調査区外へと続くため、全体の規模については不明である。竪穴住居の可能性が高いが、周壁溝、柱穴等は検出されていない。古墳時代後期の遺物が少量出土した。

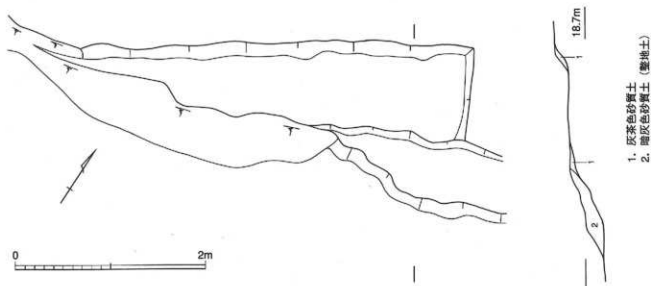


fig.29 SB203

S B 204

2区の中央部北端で検出された。全体の規模は不明であるが、南北3.9m以上、東西2.1m以上のL字形に曲がる溝を検出した。溝の内側と外側で土質の違いが見られ、方形の竪穴住居の可能性が高いが、柱穴等は検出されていない。遺物は出土しなかった。

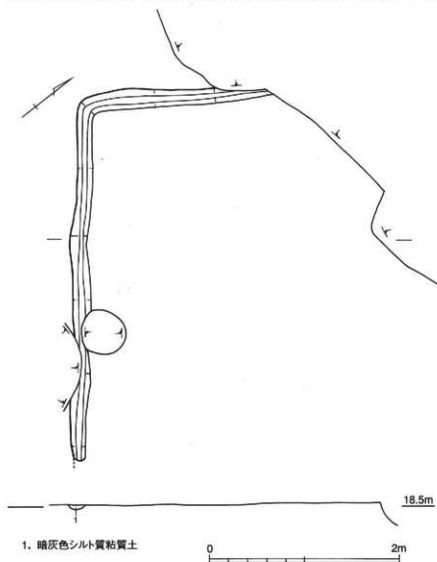


fig.30 SB204

(2) 古墳

2区の西半部から3区にかけて、円墳1基（葉平1号墳 以下1号墳と呼称）と方墳1基（葉平2号墳 以下2号墳と呼称）を検出した。両古墳共に、中世の耕作により墳丘はすべて失われている。2号墳は調査区の制約により、周溝の一部が検出されたに留まるが、1号墳は、古い形態の横穴式石室を主体部とする古墳であることを確認した。

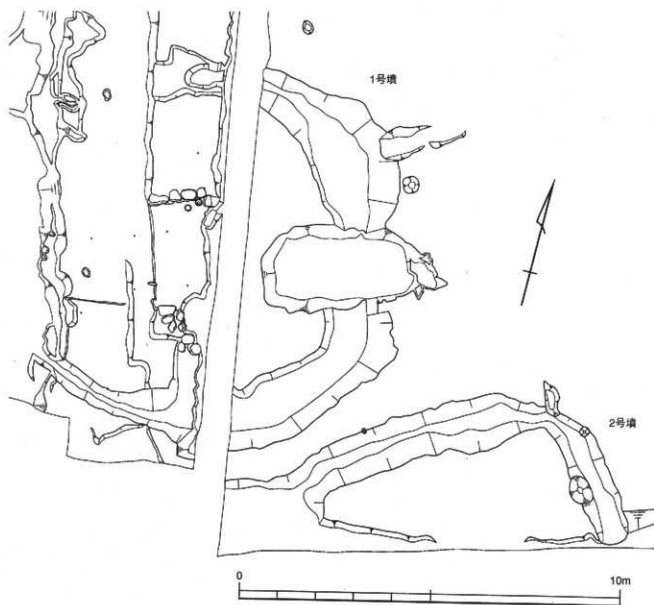


fig.31 1号墳・2号墳

1号墳

2区と3区の境界部分で検出した円墳である。中世の耕作や現代の洪水による影響を受け、遺存状況は悪い。周溝を巡らし、主体部は横穴式石室である。

周溝

西端部を除き、幅0.5～1mの周溝が全周する。周溝の外周径は、約10.5mである。埋土上層で須恵器と土師器の破片が出土した。周溝が埋没する過程で混入したと考えられ、出土状況に規則性はない。1号墳に伴う遺物である可能性はあるが、周囲の遺構から流入した可能性も否定できない。

62～64は須恵器の杯蓋である。62は口径13.2cmを測る。天井部と体部の屈曲は明瞭であるが、稜の張り出しは弱い。口縁端部内面に段を持つ。63は口径13.2cmを測る。天井部は高いが、体部との屈曲は明瞭ではなく、稜の張り出しは弱い。口縁端部内面にわずかな段を持つ。64は天井部の破片である。63の形状に類似すると考えられる。65は須恵器の杯身である。口径13.0cm、高さ5.3cmを測る。受部はほぼ水平に張り出し、立ち上がり部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。66は須恵器の甕の口縁部である。口径13.0cmを測る。頸部以下は、1号墳西側の現代流路の肩部から出土した資料である。口縁部との接点はないが、断面観察、復元頸部径、波状文の原体の相似から、同一個体として図化した。口縁部は強く外反し、口縁端部は面を持つ。断面三角形の突帯を2条巡らし、突帯下方及び口縁端部下方に接するように波状文を3条巡らす。内面はナデを施す。出土遺物の時期は、MT15型式に相当すると考えられる。

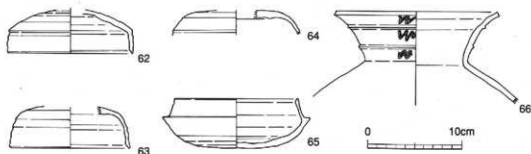


fig.32 1号墳周溝出土遺物

埋葬施設

石片袖の横穴式石室で、主軸はN20°Wである。中世の耕作および土留め工事の影響により、石室の残存状況は悪い。石室を構成する石材のうち、原位置を保つものは、奥壁の2段分、左側壁の奥壁側の一部、玄門部の基底石、羨道右側壁の基底石である。石室の全長は、5.35mである。

玄室

玄室の規模は、残存する基底石とその痕跡から、全長2.7m、奥壁側幅1.5m、玄門部幅1.4m以上の規模が復元できる。石材はいずれも花崗岩の自然石である。

奥壁の基底石は、上面が平坦に揃うように掘形の掘削によって調整し、4石を横手方向に据えている。2段目も石材を横手方向に据えている。

左側壁の基底石は、奥壁の東端に接する1石と2段目の1石は、わずかに攪乱の影響を受けているものの、ほぼ原位置を保っている。左側壁の基底石は奥壁の基底石と約30cm重なるように据えている。他に左側壁の基底石と考えられる2石を検出したが、攪乱の影響で原位置を保っていない。右側壁の基底石は残存していなかったが、抜き取り痕を7石分確認した。奥壁側の基底石の設置方法と同様、袖部の基底石と30cm程度重なるように据えられていた可能性が高い。

玄門部の基底石は1石で構成されており、直方体に近い石材を横手方向に据えている。南側に近接して、2段目に使用されていたと考えられる石材を検出した。

出土遺物は、須恵器の短頸壺1点、坏身1点、鉄釘10数点である。

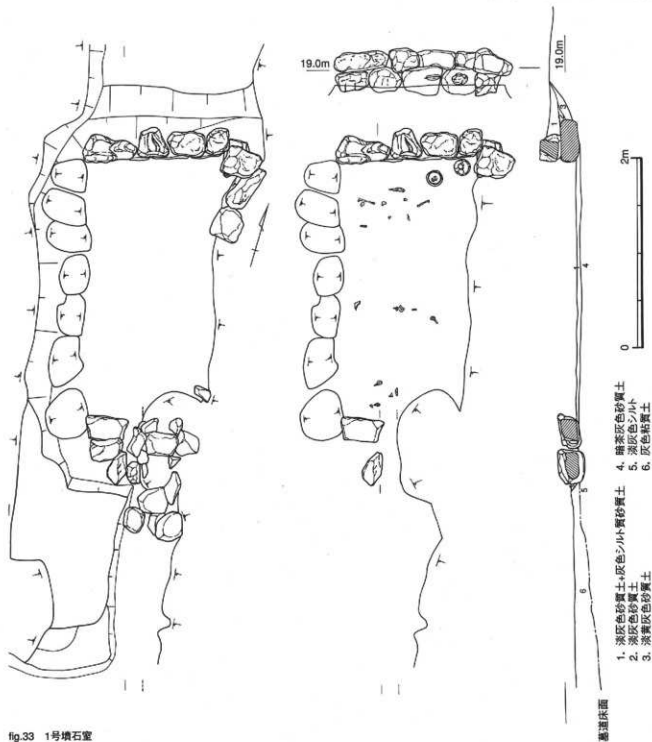


fig.33 1号墳石室

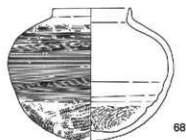
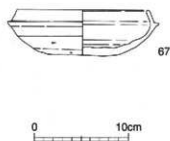


fig.34 1号墳玄室出土遺物

短頸壺を除く遺物は、遺物底の検出レベルがほぼ揃っているが、奥壁左角部で検出した短頸壺は5cm程度低い。堆積土の観察からは、明確な追葬の痕跡は確認できなかったが、遺物底面の検出レベル差は、複数回の埋葬行為が行われた可能性を示している。

67は須恵器の坏身である。口径13.9cm、高さ4.8cmを測る。口縁部はやや内傾して立ち上がり、端部は丸い。立ち上がり部と坏部の接合部内面に屈曲線は無く、杯部底の内面に同心円文の当て具の痕跡が残る。TK10型式に相当する。68は須恵器の短頸壺である。口径8.0cm、胴部径17.3cm、高さ14.1cmを測る。短い口頸部は垂直に立ち上がる。胴部はやや扁平で底部は丸い。底部内面は同心円文の当て具の痕跡残り、胴部外面は格子目タタキにより成形した後、カキメを施す。

69～88は鉄釘である。断面は方形で、鍛造品である。出土した頭部は、すべて折曲型と呼ばれる形態である。出土分布と木質が鈔着している事から、木棺に使用されていたと考えられる。

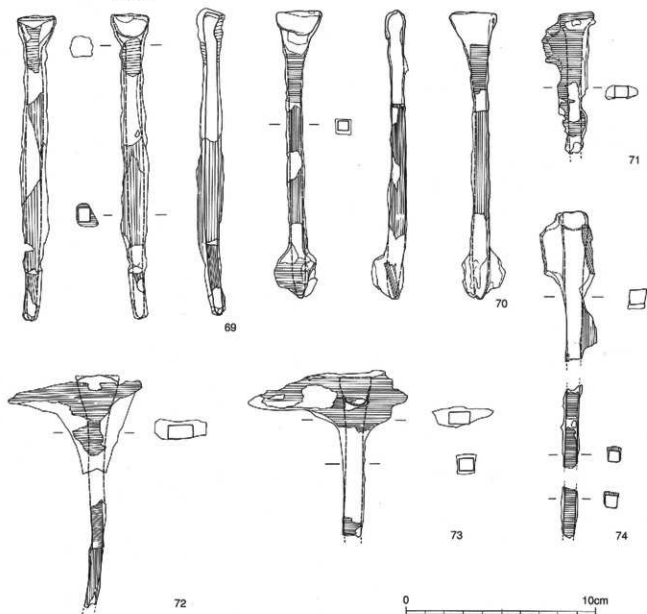


fig.35 1号墳玄室出土遺物 (2)

番号	遺物名	計測値 (mm)				材質の 組織方向
		断面幅	長さ	幅	厚さ	断材厚
69	鉄釘	19.94	161.25	5.97	—	40.64 a層
70	鉄釘	22.66	151.12	6.34	—	33.89 a層
71	鉄釘	18.18	74.69	5.90	5.51	— b層
72	鉄釘	18.41	105.39	7.75	5.58	32.00 a層
73	鉄釘	18.71	82.15	8.37	7.21	87.06 b層
74-1	鉄釘	12.05	79.54	9.03	7.83	—
74-2	鉄釘	—	71	5.35	6.15	—
75	鉄釘	15.19	107.76	6.58	5.63	— b層
76	鉄釘	17.14	72.83	7.29	6.34	—
77	鉄釘	14.00	56.43	6.28	5.71	— b層
78	鉄釘	12.66	81.88	6.17	5.10	— b層

番号	遺物名	計測値 (mm)				材質の 組織方向
		断面幅	長さ	幅	厚さ	断材厚
79	鉄釘	14.22	82.00	6.41	6.68	82.83 a層
80	鉄釘	22.68	82.83	7.56	6.11	— c層
81	鉄釘	15.06	14.19	10.12	6.11	—
82	鉄釘	—	95.81	5.72	5.78	—
83	鉄釘	—	34.27	5.99	5.57	—
84	鉄釘	—	69.75	7.05	5.78	— a層
85	鉄釘	—	11.65	6.09	—	—
86	鉄釘	10.01	24.55	6.47	4.89	—
87	鉄釘	—	21.87	6.49	6.51	—
88	鉄釘	—	50.83	5.48	3.93	— a層

表4 1号墳出土鉄製品計測値一覧

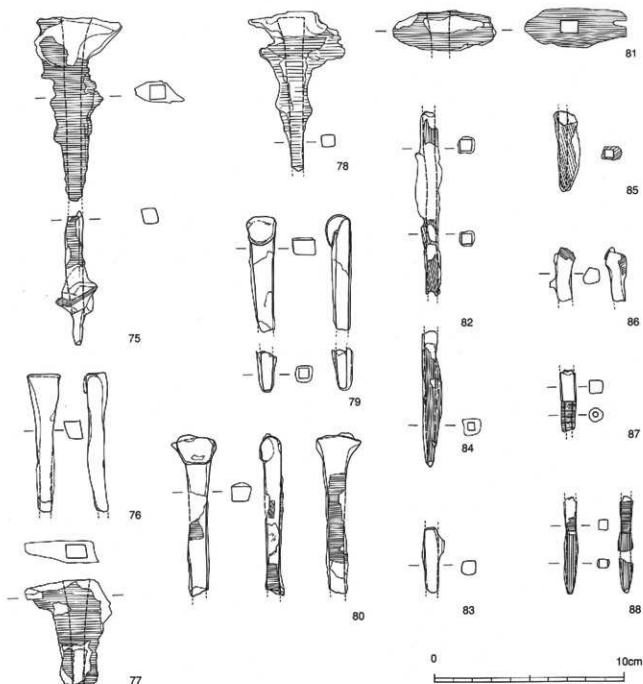


fig.36 1号墳玄室出土遺物(3)

木棺材



挿図写真13
コウヤマキ (木口150倍)



挿図写真14
コウヤマキ (柁目250倍)



挿図写真15
コウヤマキ (板目150倍)

〔樹種〕石室出土の鉄釘には木棺材が鋳着していたため、少量のサンプルから薄片検鏡資料を作成し、透過光による同定をおこなった。結果、サンプル全点 (69、71~73、74-2~76、78、81の付着材) がコウヤマキであることを確認した。(挿図写真7~9)

〔棺材部位の考察〕木質の繊維方向については金田氏による分類があり、これに準ずるものとする (fig.37-1)。これは棺材の構成を考察する上で重要な要素といえる。

a 類：釘上半の木質繊維が軸方向に対し横位、下半が縦位 (69、70、72、84、88)。

b 類：釘上下半の木質繊維が共に軸方向に対し横位 (71、73、75、77、78)。

c 類：上下半共に木質繊維方向は横位であるが、上下で残存する面が異なる (80)。

また上記以外にも、欠損等によって木取りの不明なものが存在する。

〔北側小口〕a 類の69、70の2本が棺の中心に先端を向けて出土しているため、ⅠとⅢ・Ⅳの接合に使用された釘であり、棺の形態はⅠ・ⅡをⅢ・Ⅳで挟み込むものであったことが推定される。これを前提として、釘がどの部位に使用されていたかを推測する。

69、70の頭部には、上半ア・ウ面に柁目材が横位に付着し、下半はア・ウ面に柁目、Ⅰ・Ⅱ面に板目が観察された。Ⅰ・Ⅲ・Ⅳは板目板であり、Ⅲの厚さ4cm、Ⅳの厚さ5.3cmを測る。また84もa 類の可能性が高く、ⅥとⅠの接合に使用されたものと考えられる。これらの釘は、ア・ウ面を水平にして打ち込まれていた。b 類の釘 (71、73、75) はⅤかⅥをⅠに打ちつけたものと考えられるが、これらは、の長側辺線上の、元位置に近い出土位置を保っているため、ⅤとⅠの接合に用いられた釘と考えるのが自然であろう。これらの釘はいずれもア・ウ面を棺長軸方向に打ち込まれていた。74の下半ア・ウ面には柁目材が横位に付着しているため、板目板の平面、または柁目板の長側面に打たれたものであるが、おそらく小径の原木から製材した板目板の端部付近であり、ⅤをⅢかⅣの長側面に打ち付けたものと推測される。86は頭部破片で、柁目材が横位に残存している。板目板の平面に打ち込まれたもので、部位は不明。76は木質が残存しない。

〔棺中央部〕棺の長軸中央部付近から出土した釘は4点である。内、79、83には木質が残存しない。77は棺西側から出土したもので、上半ア・ウ面に柁目材が横位に付着する板目板の平面に打ち込まれたものであり、ⅤをⅢに接合した釘と考えられる。78は上半のア・ウ面には柁目から板目への漸次的な組織が付着し、板目板平面端部に打ち込まれたもので、ⅤをⅣに接合した釘と考えられる。

〔南側木口〕南側小口からは4点出土している。80は今回出土中唯一のc 類であり、上半の

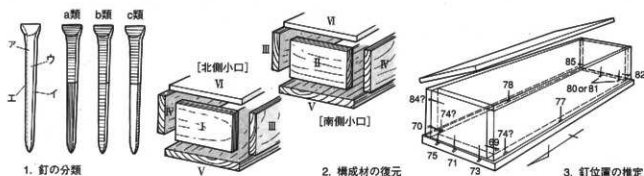


fig.37 鉄釘使用状態模式図

ア・ウ面、下半のイ・エ面に柾目材が横位に付着している。この状況から、V（厚さ6.8cm）の平面から柾目取りのⅡ長側面に打ち込まれたものと錯覚させられるが、Ⅱは一概に柾目板であるとは言い難く、板目板の端部である可能性が高い。81は頭部のみ残存する。イ面の観察では弧状に年輪が見えており、小径原木の板目板端部であることが分かる。おそらくVの平面端から打ち込まれた釘であると考えられる。82・85はa類の釘の身部である。Ⅲ・ⅣをⅡの小口面に接合したものと考えられる。

以上から推測される棺材の構成と釘の位置は、fig.37-2・3のようになる。Ⅵについては存在自体が不明ではあるが、その他についてはおおよそこのようになると考えられる。

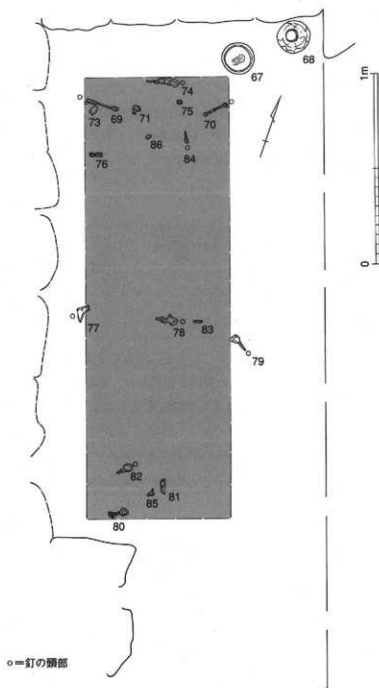


fig.38 玄室内遺物出土状況と木棺復元位置

羨道

玄門部の幅は、羨道部の左側壁の石材がすべて失われているため不明であるが、玄室が長方形と仮定した場合、奥壁の幅と、袖部基底石の幅の差から、約1.1m程度であると考えられる。右側壁の基底石は1石で、原位置を保っている。同一の掘形内に玄室と羨道は構築されており、墓道との境界は明瞭である。羨道長は0.7mと短く、古い形態の横穴式石室の特徴を持つ。

閉塞石

閉塞石の多くは擾乱の影響を受けている。閉塞時の原位置を保つものは、羨道の基底石に接する1石と、墓道で検出された4石程度である。閉塞に使用された石材は、石室に使用された石材より小さく、10～25cm大の花崗岩の自然石を使用している。

墓道

羨道から周溝に至る部分は、羨道側で約10cm、周溝側で約25cm掘削されている。検出位置と閉塞石の出土状況より、長さは1.95m、幅は羨道程度の墓道と判断した。

関連遺物

1号墳西側の擾乱や自然流路から、古墳時代後期の遺物が出土した。すべてが1号墳に伴う遺物と断定できないが、周溝出土遺物と同一個体の遺物が含まれている。

89～91は須恵器の甕の口頸部である。89は口径19.2cmを測る。口縁端部下方は肥厚し、接して波状文を巡らす。90は口径15.6cmを測る。口縁端部は面を持つ。外面に1条の稜を持ち、上下に波状文を巡らす。91は外面に1条の稜を持ち、上下に波状文を巡らした後、頸部下端に同一の原体で直線文を巡らす。



fig.39 1号墳付近出土遺物

2号墳

1号墳の南東に近接して、L字形に屈曲する溝を検出した。調査区の制約により、全体の形状は不明であるが、溝の規模と形状から、方墳の周溝であると考えられる。

墳形

東西8.2m、南北5m以上の方墳と考えられる。墳丘は1号墳同様、中世の耕作で削平されている。

周溝

幅1～1.2m、深さ約30cmの規模の溝であるが、コーナー部の幅は約50cmと狭い。埋土より古墳時代中期から後期の遺物が少量出土した。

92は土師器の小型壺である。口径9.5cm、高さ10.5cmを測る。球形の胴部で、底部は平底気味である。口縁部はやや内湾して上外方に伸び、胴部との屈曲線は、内外共に明瞭である。



fig.40 2号墳周溝出土遺物

(3) 埋葬施設

上記の古墳に伴わない埋葬施設を3基検出した。

S T 201

小石室状の遺構である。石室内法の規模は、残存する基底石と、基底石の痕跡から、長さ1.75m以上、内法幅1.05mである。石材は花崗岩で、加工痕はない。平坦面を内側に向けて据えている。時期を特定できる遺物の出土がなく、所属時期は不明である。

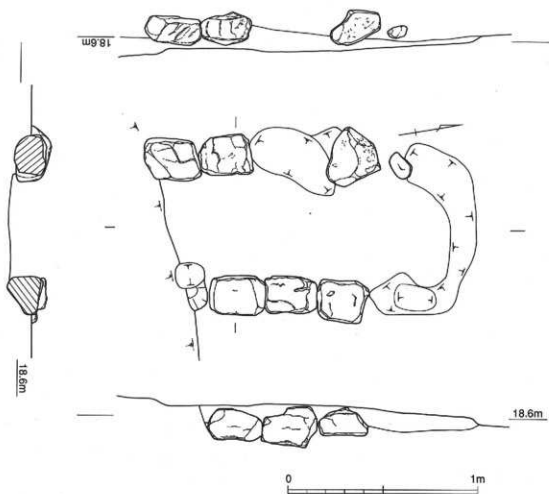


fig.41 ST201

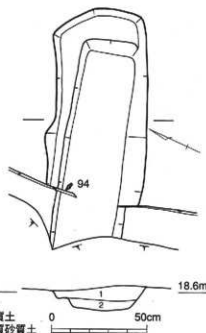
S T 202

検出状況から、1号墳築造以前の埋葬施設である。掘形は、長さ1.3m以上、幅50cmを測る。遺構の形状と、鉄釘と考えられる鉄製品が出土したことから、木棺が納められていたと考えられる。他に出土遺物はなく、所属時期は不明である。

93・94は鉄製品である。93の断面は菱形で釘以外の鉄製品の可能性がある。幅9.1mm、厚さ4.7mmを測る。94の断面は1辺5.6×6.7mmの方形で、鉄釘の一部と考えられる。



fig.42 ST202出土遺物



1. 暗茶灰色砂質土
2. 灰色シルト質砂質土

fig.43 ST202

S X 201

切り合い関係から、先述したS B 301より新しい時期の遺構である。掘形は全長2.9m、幅1.25mを測る。埋土より花崗岩が1石検出されたが、原位置を保っていない。しかし、石材の抜き取り痕が確認でき、S T 201と同様の遺構であると考えられる。出土遺物はなく、所属時期は不明である。

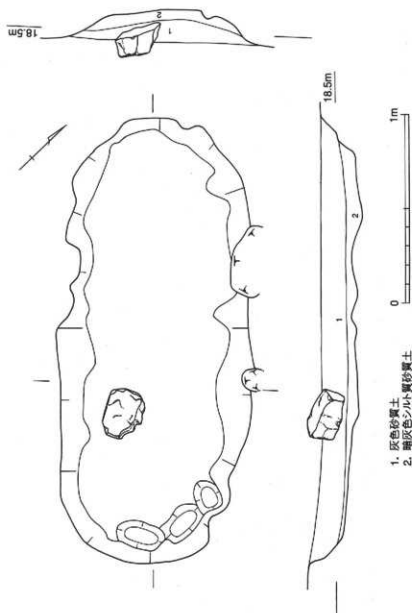


fig.44 SX201

(4) 土坑

S K 201

1区の中央部やや南寄りで検出した長径3.2m、短径2.4m、深さ40cmの不定形な土坑である。埋土は粘質土、細砂、シルト層の互層となっており、埋土内から完形の須恵器の碗2点が出土した。95と96は須恵器の碗である。共に底部外面は回転糸切りで、見込み部はわずかにくぼむ。95は口径15.5cm、器高5.4cm、96は口径15.5cm、器高5.3cmである。97は白磁の碗の底部である。体部に釉が施されるが、高台には施されない。復元による底径は6.7cmである。これら出土遺物から平安時代後半（12世紀前半）の時代の遺構と考えられる。

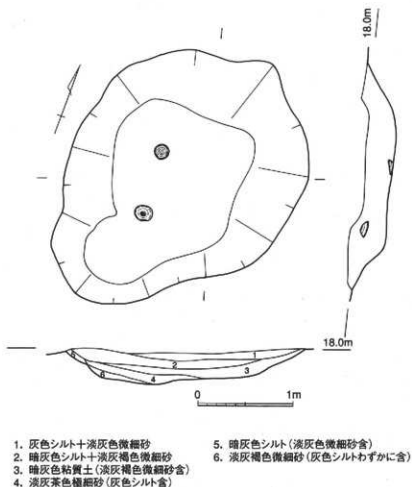


fig.45 SK201

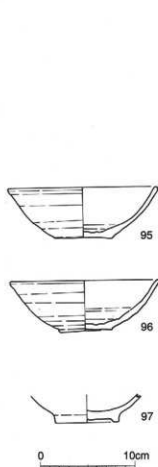


fig.46 SK201出土遺物

(5) 溝状遺構

S D 204

幅60cm、深さ20～35cmの溝状遺構である。両端部は遺物が出土せず、遺構の形状からも後世の攪乱を受けていると考えられるが、切り合い関係を確認することができなかった。埋土より古墳時代前期から中期の遺物が出土した。

98は土師器の甕である。口径26.8cmを測る大型品である。口縁部と胴部の屈曲線は内外ともに明瞭である。口縁部はわずかに外反して立ち上がり、口縁端部は丸い。外面はハケ、胴部内面は板ナデ、口縁部内面はナデを施す。

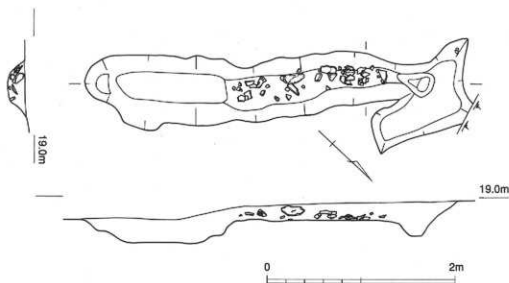


fig.47 SD204

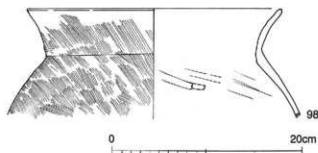


fig.48 SD204出土遺物

S D208

幅40cm、深さ15cm程度の溝状遺構である。埋土より古墳時代前期の遺物が少量出土した。

99は土師器の小型丸底壺である。口径10.2cm、高さ6.8cmを測る。半球状の体部から、口縁部が強く直線的に開く。底部は平坦面を持つ。口縁部の内面は横方向のハケ、体部内面はユビオサエ、他はナデを施す。調整は粗い。

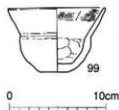


fig.49 SD208出土遺物

S R201

1区の東側で検出された自然河道で、北西から南東へ流れる。10～50cm大の自然礫が大量に出土した。遺物は出土せず、時期は不明である。S R101同様、本来は第1遺構面に属する河道の可能性が高い。

(7) その他の遺構

以上記述した遺構以外にも、土坑、ピット、溝状遺構等が散見されるが、検出状況から遺構の性格を明らかにすることはできなかった。

第4節 第1遺構面の遺構と遺物

平安時代後期から鎌倉時代前半の遺構面である。西から東へ向かって緩やかに傾斜し、1区の東半部は、北西から南東へ流れる自然河道である。3区の西半部は、現代の擾乱及び水害の影響を受け、文化財は残存しない。遺構は2区を中心に分布しており、掘立柱建物3棟、耕作に伴う溝7条、自然河道1条等を検出した。

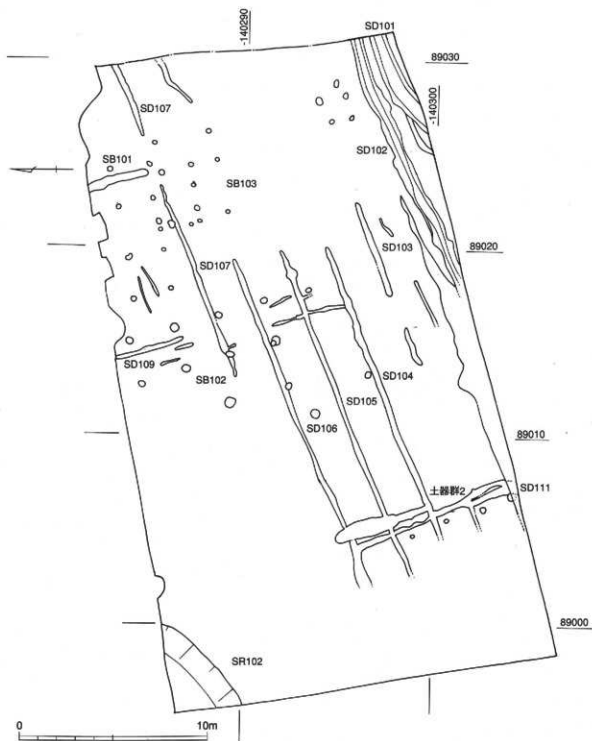


fig.50 第1遺構面

(1) 掘立柱建物

- S B 101 調査区西半部を中心に多くの柱穴を検出したが、建物としてまとまるものは3棟である。東西4間、南北1間以上の掘立柱建物である。棟方向はN75°Eである。
- S P 142 堀形の規模は、直径25cm、深さ25cmである。埋土より、黒色土器が出土した。100は内黒の黒色土器である。口径14.8cmを測る。体部内面は丁寧なヘラミガキを施す。101は阿黒の黒色土器碗の底部である。底径6.8cmを測る。貼付高台の断面形状は方形で、底部内面に、板状工具による十字状の暗文を施す。
- S B 102 東西3間、南北1間以上の掘立柱建物である。棟方向はS B 101と直交し、N18°W。3基の柱穴から礫や遺物が出土した。いずれも、柱痕から出土しており、建物廃絶後に埋められている。

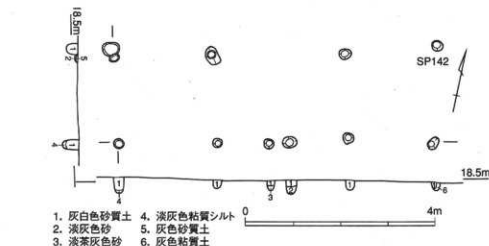


fig.51 SB101

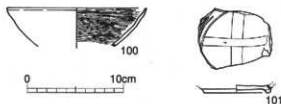


fig.52 SP142出土遺物

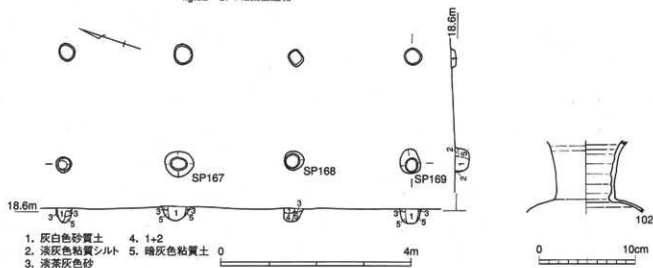


fig.53 SB102

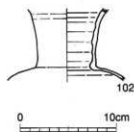


fig.54 SP169出土遺物

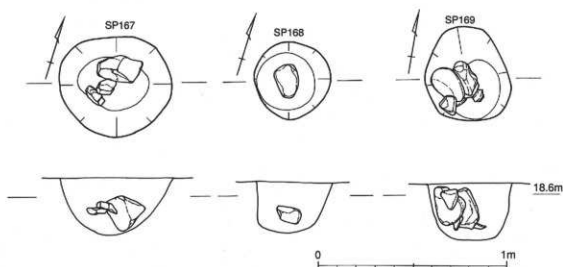


fig.55 SP167～169

S P 167 掘形の規模は、長径60cm、短径55cm、深さ30cmである。柱痕から10～25cm大の礫が3点出土した。遺物は出土しなかった。

S P 168 掘形の規模は、直径40cm、深さ25cmである。柱痕の底から約5cm上方で10×20cm大の礫が1点出土した。遺物は出土しなかった。

S P 169 掘形の規模は、長径50cm、短径45cm、深さ30cmである。柱痕から、灰釉陶器の破片と10～20cm大の礫が3点出土した。

102は灰釉陶器の壺の口頸部である。球形と考えられる肩部から、わずかに外反して上方に立ち上がる頸部を持つ。頸部内面は、成形時の凹凸が明瞭である。

S B 103 東西3間分、南北2間の掘立柱建物であるが、通常の掘立柱建物の柱配置と異なり、2間分の柱間にやや間隔を狭めて、2本の柱穴を立てている。棟方向はS B 101と同様N75°Eである。柱穴から遺物は出土しなかった。

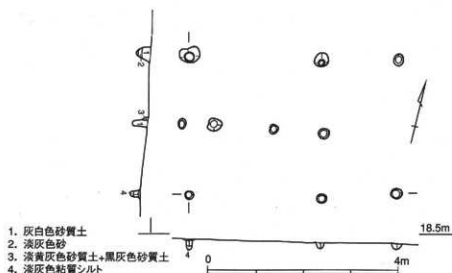


fig.56 SB103

(2) 溝状遺構

東西方向に平行する5条の溝と、直交する2条の溝を検出した。

溝底はいずれも凹凸があり、耕作に伴う溝と考えられる。平安時代後期から鎌倉時代前半の遺物が出土した。出土遺物は細片が多い。103はS D103出土の土鉢である。残存長3.5cm、直径1.0cm、重さ2.8gを測る。両端部を欠損している。S D111からは、図示可能な須恵器や瓦器の破片が数点出土した。

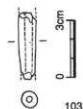


fig.57 SD103出土遺物

S D111

北西から南東方向に掘削された溝状遺構である。須恵器や瓦器の破片が、比較的纏まって出土した土器群1を除くと、散在して出土した。12世紀後半の遺物が多い。

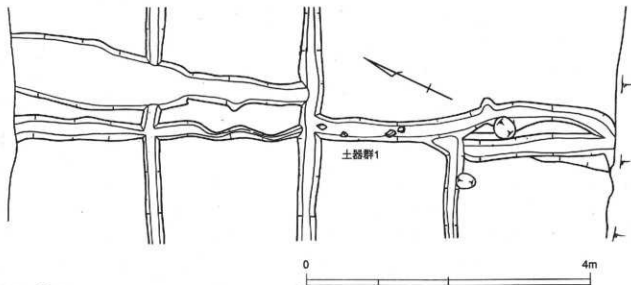


fig.58 SD111

土器群1

須恵器碗、土師器皿等の破片が纏まって出土した。図化できたのは5点である。

104・105は土師器皿である。104は口径9.3cm、器高1.8cmを測る。全面ナデを施す。105は口径14.4cm、器高2.2cmを測る。口縁部は強く屈曲して上方に立ち上がり、端部は丸い。底部は輪状に凹む。全面ナデを施す。106は瓦器碗である。口径15.0cmを測る。体部内面は丁寧なヘラミガキを施す。体部外面の残存状況は悪く、指頭圧痕以外の調整は不明である。107・108は須恵器碗の口縁部である。107は口径16.2cmを測る。口縁端部は丸い。108は口径14.8cmを測る。口縁端部は肥厚し丸い。

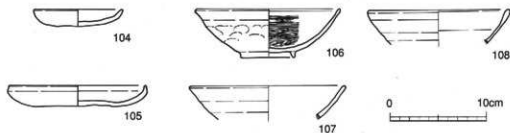


fig.59 土器群1出土遺物

土器群1以外の遺物 109・110は、和泉型の瓦器碗である。109は口径16.6cm、器高5.6cmを測る。貼付高台の立ち上がりは明瞭である。体部外面は指頭圧痕が残り、口縁部は強いナデにより外反している。内面は丁寧なヘラミガキを施す。110は口径15.6cmを測る。底部を欠損する。外面の最終調整に疎らなヘラミガキを施していること以外は、109と同様の形状、調整である。111は須恵器の碗である。口径16.4cmを測る。底部を欠損する。112は土師器の皿である。口径14.4cmを測る。底部を欠損する。体部は内彎して立ち上がり、口縁端部は上方につまみ上げる。

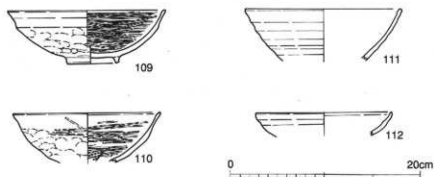


fig.60 SD111出土遺物

(3) 自然河道

3区の北端部で自然河道を1条検出した。

S R 102

調査区の制約により、全体の形状は不明であるが、深さ60cm以上の自然河道である。遺物は出土しなかった。

(4) 遺構に伴わない遺物

第1遺構面の大半は中世の耕作面であり、下層の遺構面や遺物包含層が影響を受け、第1遺構面検出時に、古墳時代から中世に至る遺物が出土した。図示したのは土師器1点、須恵器1点である。

113は土師器碗である。口径13.4cm、器高4.9cmを測る。高台は外方に強く張り出し、体部は直線的に外上方へ開く。114は須恵器碗である。口径16.4cmを測る。体部は、やや内湾気味に外上方に開き、口縁端部は丸い。全面にナデを施す。

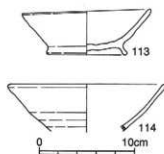


fig.61 遺構に伴わない遺物

第5節 小 結

今回の調査では、縄文時代晩期から中世に至る遺構面を検出した。1区は、遺構面の残存状況は悪く、遺構の検出密度は低かった。試掘調査の結果では、今回の調査区の東側は湿地状の地形が推定されている。1区は西側の微高地が東側の低地に落ち込む地点に相当し、集落の縁辺部に位置するものと考えられる。2・3区は微高地に位置し、3面の遺構面を検出した。特に縄文時代晩期中葉の土器棺と初期横穴式石室を採用する1号墳の検出は重要である。

2区で検出した縄文晩期中葉(篠原式)の土器棺は、芦屋市内では初めての検出例である。当時代の遺物は、2区を中心に面的に分布しており、遺構分布の広がりを予想させる。石器も相当数出土しており、土器棺以外の遺構も存在していた可能性が高い。

1号墳は、横穴式石室導入期の具体相を示す好資料である。築造時期については、玄室内出土遺物と周溝出土遺物間に明瞭な型式差があり、その解釈については検討を要する。玄室内出土遺物である須恵器と鉄釘の検出レベル差が、再葬を示している可能性がある。しかし、5cm以上の厚さの棺材が使用されており、鉄釘の検出位置は、初回に埋葬された木棺の位置をある程度保っている可能性がある。周溝出土遺物は、MT15型式期に相当し、玄室内出土遺物より古相であるが、周溝の最終埋土から出土していることと、1・2区で古墳時代の住居などの遺構が存在することから、近接する遺構から流入した可能性がある。以上のことから、1号墳の築造時期はTK10型式期にあたる6世紀ごろと考えられる。

芦屋市内では、横穴式石室を採用する古墳は、城山・三条古墳群など、山麓部の群集墳に集中し、阪神間においても平野部で確認される例は少ない。近隣では、1号墳とはほぼ同時期(MT15~TK10 型式期)の住吉宮町遺跡第32次調査9号墳⁽²⁾、時期不明であるが横穴式石室の可能性のある住吉宮町遺跡第18次調査⁽³⁾で検出された古墳、同じく東灘区の西岡本遺跡⁽⁴⁾で1例検出例があるに過ぎない。古墳の築造場所が、山麓部に移る前段階の横穴式石室として貴重な資料と言える。

古墳出土の鉄釘の形態変化は、木棺の構造や規模の復元、製作工人集団の想定などと密接に関係することから、木棺の小型化、渡来系氏族との関係などと連動して論じられている⁽⁵⁾。1号墳の玄室から出土した鉄釘は、最大15cmを越える大型品を含み、瀬川氏の分類⁽⁶⁾による1期後半に相当する。1期の鉄釘を採用する古墳の分布は、畿内地域の特定地に集中しており、初期横穴式石室の採用と共に、葬送における先進的な要素を示していると言える。

以上のように、山麓部の群集墳に先行する時期に、平野部において、短い羨道を持つ古いタイプの横穴式石室が確認されたことは、六甲南麓地域における、古墳立地の変遷、石室や木棺の形状の変化など横穴式石室導入期の具体相を考える上での好資料といえる。

(註)

(1) 家根祥多『篠原式の提唱—神戸市篠原町遺跡出土土器の検討』『縄文晩期前葉—中葉の広域編年』1994

(2) 菅本宏明他『住吉宮町遺跡 第24次・第32次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2001

(3) 小野田義和・森重二『住吉宮町遺跡(第17次・第18次調査)』神戸市教育委員会 1998

(4) 浅岡俊夫編『神戸市東灘区西岡本遺跡』六甲山麓遺跡調査会 2001

(5) 田中彩太『古墳時代木棺に用いられた繫結金具』『考古学研究』第25号第2巻1987

岡林孝作『木棺系統論—釘を使用した木棺の復元的検討と位置づけ—』『権原考古学研究所論集十一』吉川弘文館1994

和田晴吾『葬制の変遷』『古墳時代の王と民衆』古代史復元6 講談社 1989

(6) 瀬川貴文『釘結合式木棺の受容と展開』『待兼山考古学論集』2005

初期横穴式石室については、河内長野市教育委員会太田宏明氏にご教示いただいた。記して謝意を表します。

第3章 月若遺跡 第79地点の調査

第1節 調査の概要

当地点は芦屋川右岸低地に位置し、平成14年度に調査を実施した月若遺跡第68地点の西側、第69地点の南側に隣接する場所にあたる。月若遺跡第68地点では、近世の遺構面が1面確認されている。調査区の現標高は20.0m～20.4mで、西側が緩やかに高くなっている。盛土、旧耕土、洪水層を重機で掘削した後、灰色粘性砂質土層より人力掘削を実施し、遺構の検出および精査を実施した。

(1) 調査の方法

遺物包含層上面まで重機で掘削した後、近世の遺物包含層以下を人力掘削により掘削し、遺構の検出および精査を実施した。

(2) 基本層序

月若遺跡第68地点と同様の堆積であり、上層から盛土、旧耕土、淡灰黄色粗砂、洪水層、灰色粘性砂質土（遺物包含層）、淡黄褐色粗砂（遺構基盤層）を確認した。西側は、宅地造成時に削平されており、盛土、攪乱土直下で淡黄褐色粗砂を確認した。

遺構は、淡黄褐色粗砂上面で検出された。いずれも近世の耕作に伴う遺構と考えられる。東側の遺構基盤層一部に暗灰色粗砂層が検出されたが、断ち割り調査の結果、淡黄褐色粗砂の堆積以前の土層であり、遺物の出土は無く、基盤層と判断した。

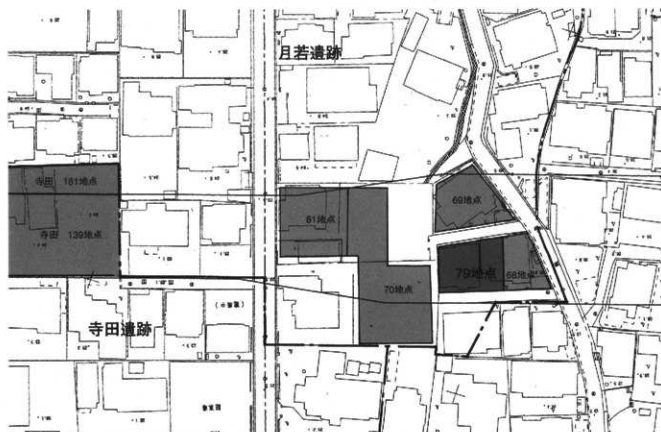
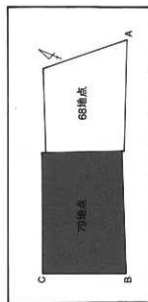
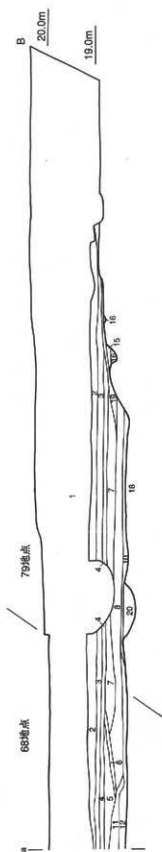


fig.62 月若遺跡第79地点調査地位図 (S=1/1000)



1. 盛土
2. 褐色砂質土 (近代耕作土)
3. 淡灰色粗砂 (近代洪水砂)
4. 灰色シルト
5. 淡黄色粗砂
6. 灰白色粗砂
7. 淡灰色粗砂 (埋没)
8. 淡黄色粗砂 (埋没)
9. 淡灰色粗砂 (埋没)
10. 灰白色砂質土 (粗砂混)
11. 淡灰色粗砂 (4層~11層 近代洪水砂)
12. 灰白色砂質土 (古墳時代~近世遺物包含層)
13. 灰白色中砂
14. 灰白色砂質土
15. 淡黄色砂質土
16. 淡黄色砂質土
17. 淡黄色砂質土 (13層~17層遺物埋土)
18. 淡黄色粗砂 (近世以降基盤層)
19. 淡灰色砂質土
20. 淡黄色粗砂
21. 淡黄色粗砂

*月形遺跡第68地点の土層名に準拠
fig. 53 月形遺跡第68・79地点土層

第2節 遺構と遺物

調査の結果、確認された遺構は、溝状遺構7条と、用途不明の土坑1基である。遺構面の比高差は東西で約60cmあり、高位の西側では、遺構は残存していなかった。

(1) 溝状遺構

月若遺跡第68地点で検出された溝状遺構と同様の形状で、掘削方向も一致する。幅0.3m前後、深さ5cm前後の直線的な溝である。埋土から古墳時代後期から近世の遺物が少量出土しているが、近世の陶磁器類が大半を占める。耕作に伴う溝と考えられる。

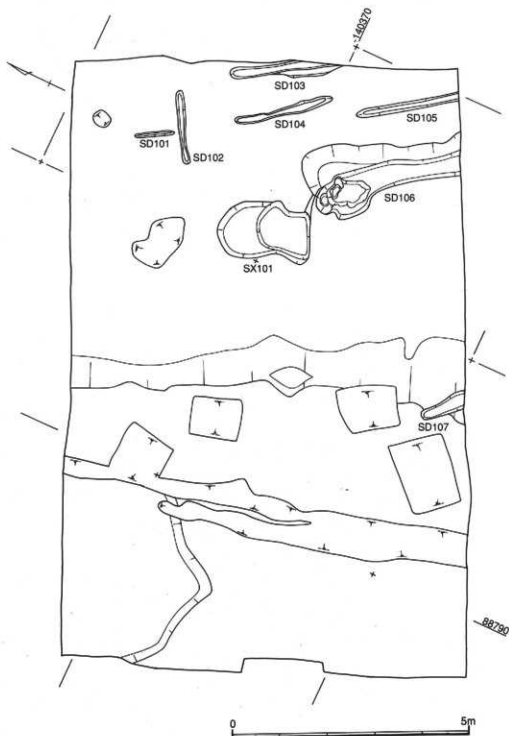


fig.64 調査区平面

(2) 用途不明土坑

長さ1.9m、幅1.2m、深さ35cmの不定形の土坑である。遺物の出土は無く、用途は不明である。

第3節 小 結

今回の調査では、近世以前の遺構は確認できなかった。西半部は宅地造成による削平を受け、本来の遺構面は完全に失われている。東半部は第68地点と同様、近世以降の耕作に伴う溝状遺構が検出されたに留まる。遺物は、古墳時代後期と近世の遺物が少量検出されたが、すべて近世以降の耕土や盛土から出土した。これらの遺物が、すべて西側の段丘上の第70地点等からの流入遺物とは考えがたく、第68地点の調査報告で指摘されているように、弥生時代以降の遺構が、本来は存在したと考えられる。

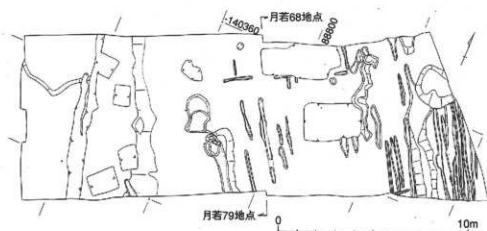


fig.65 月若第68・79地点平面合成図



挿図写真16 月若遺跡第79地点作業風景

第4章 月若遺跡 第81地点の調査

第1節 調査の概要

(1) 調査の方法

月若遺跡第81地点は、芦屋川右岸の扇状地上に立地し、平成14年度に調査をおこなった月若遺跡第70地点の西側隣接地にあたる調査地である。調査地の約30m東では比高差約3mの崖面になっており、この崖面は芦屋川の河岸段丘崖と考えられる。

第70地点の調査においては、合計5面に亘る遺構面の調査をおこなっている。そのうち第4・第5遺構面は縄文時代の遺構面と考えられたが、遺物は出土しておらず、また顕著な遺構も確認されなかった。このことから、今回の調査では、第3遺構面の調査完了後に、調査区中央部の南北方向に、幅2mのトレンチを設定して下層の遺構・遺物の確認をおこなった。その結果、第70地点の調査と同様に第4・第5遺構面に相当する層序は存在したが、遺構・遺物は確認されなかったため、今回の調査は第3遺構面までとした。

また、調査区の西壁は当初、西側道路の路肩保護や、調査区周囲の仮囲いフェンス設置のため、道路との境界から約2m控えたところから掘削をおこなっていたが、第2遺構面において、後述する弥生時代後期の土器が大量に出土したS D203が調査区西端で調査区の壁に

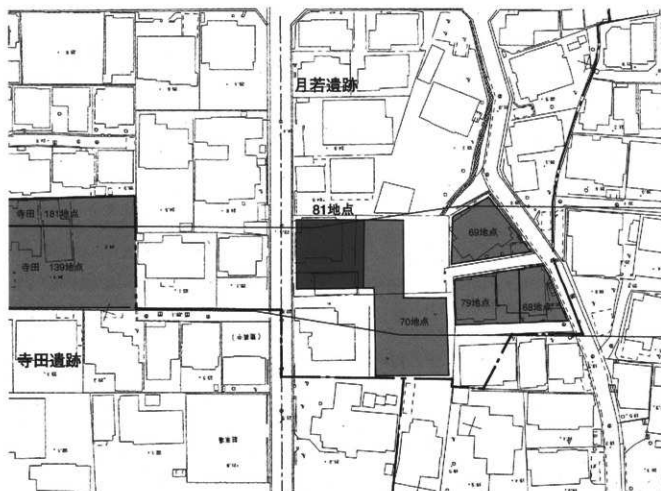


fig.66 月若遺跡第81地点調査区位置 (S=1/1000)

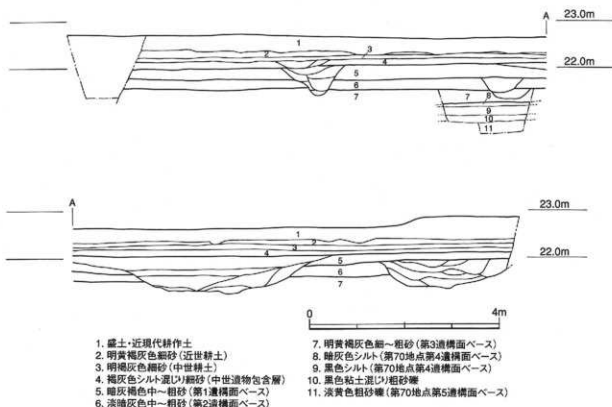


fig.67 調査区南壁土層

沿って検出されたため、第2遺構面調査時に仮囲いフェンスの仕様を変更して当初より約1m西まで調査区を拡張してS D203の調査を実施した。

調査は、現地表下30～60cmまでは近世から現代までの耕作土ならびに盛土層であるため、この層までをバックホーで除去した。以下の層については人力によって掘削を行った。そして遺構面ごとに、遺構検出、遺構掘削をおこない、図面作成・写真撮影・クレーンによる空中写真撮影等の記録を作成し、順次掘り下げていった。

（2）基本層序

調査地の基本層序は、現地表面から下に、盛土層・明淡灰色中砂（近・現代耕作土）・明黄褐色灰色細砂（近世耕作土）・明褐色細砂（中世耕作土）・褐灰色シルト混じり細砂（中世遺物包含層）・暗灰褐色中～粗砂（第1遺構面ベース・第2遺構面に伴う遺物包含層）・淡暗灰色中～粗砂（第2遺構面ベース・第3遺構面に伴う遺物包含層）・明黄褐色灰色細～粗砂（第3遺構面ベース）・暗灰色シルト～黒色シルト（第70地点での第4遺構面ベース）・黄褐色細～中砂（第70地点での第5遺構面ベース）となる。但し、先述したように、第70地点調査時においては、暗灰色シルト～黒色シルトを第4遺構面、黄褐色細～中砂を第5遺構面として調査しているが、断ち割り調査の結果、明黄褐色灰色細～粗砂以下の層中からは遺物が確認されてなかったことから、今回は第3遺構面までの調査とし、以下の層に関しては全面調査をおこなっていない。

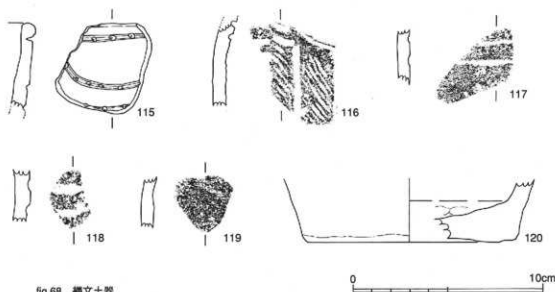


fig.68 縄文土器

第2節 縄文時代の遺物

第3遺構面以下では遺構・遺物は確認されなかったが、後述する第3遺構面までの遺構や遺物包含層から数点の縄文土器が出土した⁽¹⁾。

115は暗灰褐色砂層から出土した、深鉢口縁部の破片である。口縁部は若干内湾気味にほぼ直立し、口縁端部は丸く収める。口縁端部に沿って1条の直線を、その下に2条の沈線による弧線を巡らす。沈線内に7～10mm間隔で、細い串状工具による刺突が施されている。

116は暗灰褐色砂層から出土した、深鉢の頸部から体部にかけての破片である。直立する体部から頸部は緩やかに屈曲して外反する。屈曲部付近に2条の沈線による弧線を描く。頸部から数条の直線の沈線を垂下させ、その間は縦方向に原体を転がしたL熱りの無節縄文が施されている。

117は暗灰褐色砂層から、118は第1遺構面の柱穴から出土した土器である。小破片のため部位は不明であるが、やや太めの平行した、直線の沈線が2条施されている。

119は第1遺構面の柱穴から出土した土器である。若干外反することから、頸部の破片の可能性がある。外面には、LRの縄文が施されている。

120は暗灰褐色砂層から出土した、深鉢の底部である。底の器壁は厚く、底面はわずかに窪む。

以上の縄文土器は縄文時代中期末の、北白川C式に属するものと考えられる。これらの遺物に属する遺構は今回の調査地内では確認されなかったが、今回の調査地北側約200mに位置する月若遺跡第2地点でも同じ北白川C式の土器片が出土しており、当調査地の北側に縄文時代中期末の遺跡の中心が存在するものと考えられる。

第3節 第3遺構面の遺構

第3遺構面は標高21.7m前後の明黄褐色細～粗砂上面で検出された。この遺構面では、多数の土坑とピットが確認された。

土坑

土坑は33基が確認された。調査区全体で検出されたが、中央部に集中する傾向がある。形

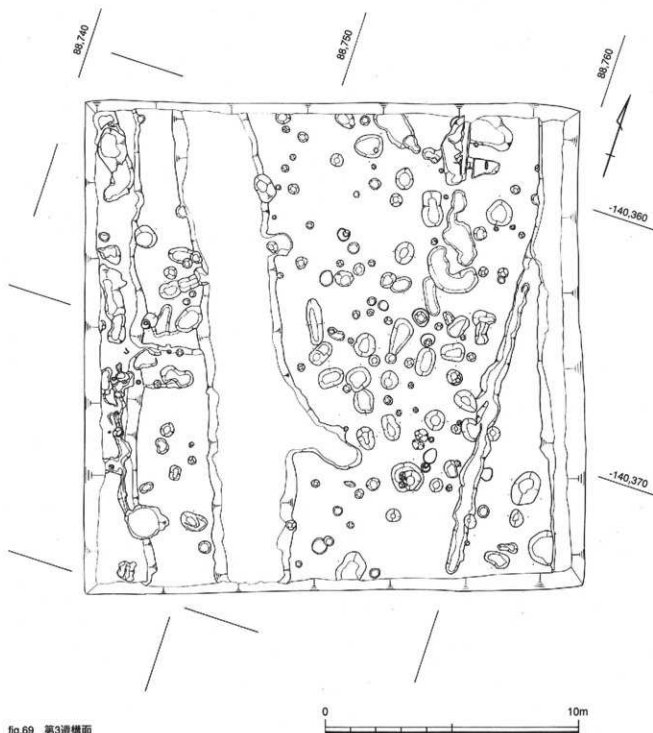


fig. 69 第3遺構面

状は円形ないしは楕円形で、断面はすり鉢状を呈するものが多い。直径・長径0.7～2.0m、深さ10～30cmと規模は様々であるが、直径・長径が1.0m前後、深さ20cm前後のものが最も多い。楕円形を呈するものは、長軸方向を南北に向ける傾向にある。

ピットも土坑と同様に調査区全体で検出されたが、中央部に集中する傾向がある。直径30cm前後、深さ20cm前後のものが最も多い。

これらの遺構からは遺物の出土がほとんど無く、時期については明確にできなかった。第70地点での調査においてもこの第3遺構面で検出された遺構からは遺物が出土しておらず、この遺構面の時期は確定できないが、月若遺跡の他地点の調査や隣接する寺田遺跡の状況から、弥生時代中期から後期にかけての遺構面の可能性がある。

第4節 第2遺構面の遺構と遺物

第2遺構面は標高22.0m前後の淡暗灰色中～粗砂上面で検出された。この遺構面では、23基の土坑と多数のピット及び溝3条が確認された。

(1) 土坑

検出された土坑23基は、調査区内北端から中央部にかけて集中する。平面の形状は円形ないしは楕円形で、すり鉢状を呈するものがほとんどである。大きさも様々で、直径・長径は0.8～1.8m、深さ10～50cmである。直径・長径1.2m前後、深さ25cm前後のものが最も多い。各遺物の出土はほとんど無く僅かに、SK201から弥生土器の小片が、SK205・SK213から須恵器の小片が出土しているにすぎず、時期の確定は難しいが、弥生時代後期の遺構がほとんどと考えられる。

(2) ピット

ピットも土坑と同様に調査区全体で検出されたが、調査区中央部に集中する傾向がある。直径25cm、深さ20cm前後のものが最も多い。

(3) 溝

SD201 S D201は北西から南東方向に走る溝で、調査区中央東端付近で検出された遺構である。幅60cm、深さ25cmで、調査区内で取まり、長さは4.5mである。遺物は弥生土器の小片が出土したのみで時期の確定は難しいが、弥生時代後期の遺構である可能性が高い。

SD202 S D202は調査区の南端付近で検出された溝である。幅50cm、深さ20cmで、北から南方向に走り、調査区の南端付近で弧を描いて、西方向に向きを変えている。東側に隣接する第70地点の調査で検出された、第2遺構面S D201と同一の溝である。今回の調査では遺物は出土していないが、第70地点S D201からは古墳時代中期の土師器甕・壺などが出土していることから、この時期の溝と考えられる。

SD203 S D203は調査区の西端で検出され、調査区西壁に沿って南北方向に走る溝である。上端の幅2.3m以上、下端幅0.8～1.2m、深さ50cmで、断面の形状は概ね逆台形を呈する。西側の肩は調査区外にあるため正確な上端幅は不明であるが、断面の形状より約2.5m程度の上端幅と推定される。底面は概ね平坦であるが、部分的には、激しい水流によって削られて形成されたと考えられる、大きな窪みが底面に数箇所存在する。

溝内の埋土は大きく2層に分けられ、下層は黄褐色粗砂層で、上層は黒褐色シルト層である。このことから、この溝は当初ある程度の流量があり、粗砂が堆積したのち、緩やかな流れになり、シルト層が堆積したものと考えられる。

両層中からは、後述する弥生時代後期後半の壺・甕・鉢・高坏等の多量の土器類と、鉄製品・砥石・鉄滓などが出土した。この溝より東に関しては、第70地点の調査において、住居址の可能性のある方形の落ち込みであるS X203から、S D203とほぼ同時期である弥生時代

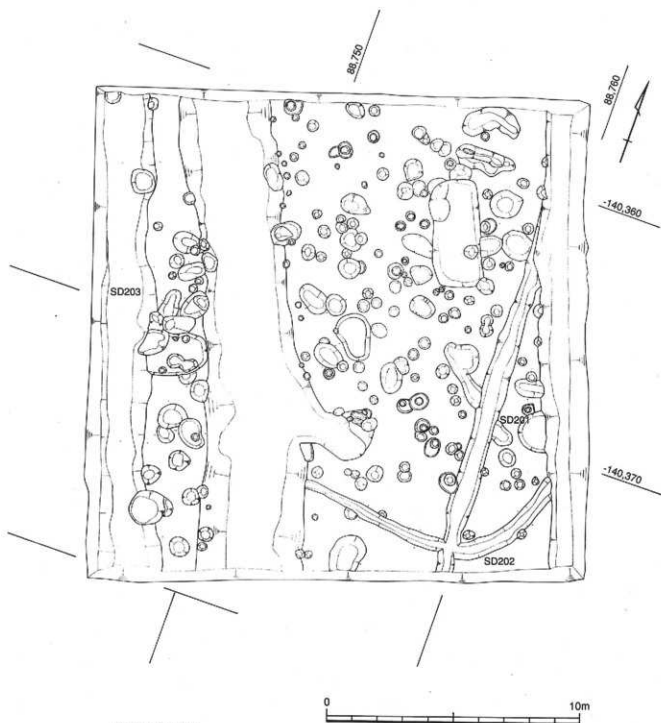


fig.70 第2遺構面

後期後半の遺物がまとまって出土しているが、それ以外では、今回の調査地内も含めて、先述した土坑・ピット等が存在する程度で、これらの遺構からは遺物はほとんど出土しない。以上のことから、このSD203は集落内の居住域を区画する溝の可能性があり、居住域の中心は、SD203より西側に広がるものと考えられる。

SD203出土遺物

土器 甕

121～133は甕である。121～123は器高が25cmを超え、体部最大径が口縁部径をはるか

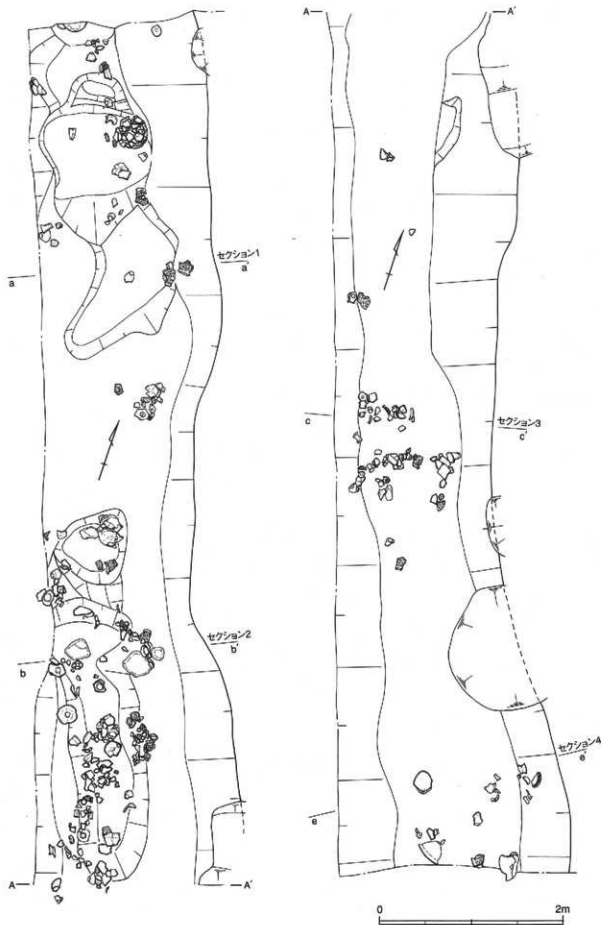


fig.71 SD203遺物出土状況

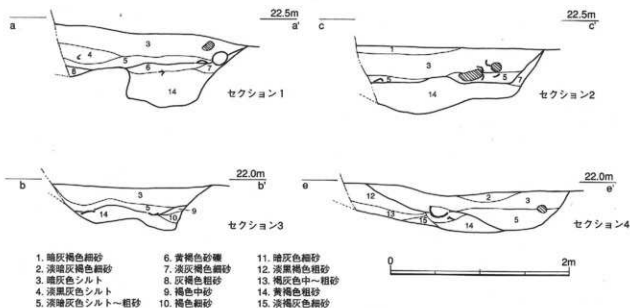


fig.72 SD203土層断面

にしのご、体部が球形に膨らむ大型の甕である。全形のわかる121では若干突出したドーナツ状の底部である。121・122は、頸部が「く」の字に屈曲し、外反する口縁部に至る。121の口縁端部は面をもち擬凹縁が施されている。122は口縁部端部を丸く収める。123は、頸部が屈曲して長めの口縁部と続く。口縁部下半は垂直気味に立ち上がり、上半は外反して口縁端部に至る。口縁端部は若干下方に拡張して端部は面を持ち、その面には擬凹縁が施されている。いずれも体部外面は右上がりのタタキが施されているが、121の体部外面には、タタキの後、下半部には縦方向のナデが、肩部には縦方向のヘラ状工具によるナデがまばらに施されている。内面はハケで調整されている。

124～125は器高25cm前後、口径20～25cmの中型の甕である。若干突出した底部を持ち、体部は上半に最大径をもつ倒卵形を呈する。頸部は「く」の字に屈曲したもの(125)と、緩やかに屈曲するもの(124・126・127)がある。口縁部は外反し、口縁端部は面を持つもの(124・125)と丸く収めるもの(126・127)が存在する。体部外面には右上がりのタタキが施されているが、124の下半部にはタタキの後に縦方向のハケで調整されている。内面の調整はハケないし板ナデのほかにナデのもの(126)もある。

128～132は器高20cm以下、口径20cm以下の小型の甕である。底部はほとんど突出しない平底のもの(128・129・130)と若干突出するドーナツ状のもの(131)がある。体部は上半に最大径をもつ倒卵形で、頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は直線的に広がるもの(128～130)と、若干内湾するもの(132)がある。口縁部下半はタタキ出し技法によって造り出され、端部は丸く収める。体部外面は右上がりの連続ラセンタタキが施されているもの(128・129)と分割形成により、体部下半と上半のタタキの方向が異なるもの(130～132)がある。体部内面はハケないしは板ナデで調整されている。

133は、頸部は緩やかに屈曲し、外反する口縁部に至る。口縁端部は面を持ち、タタキが

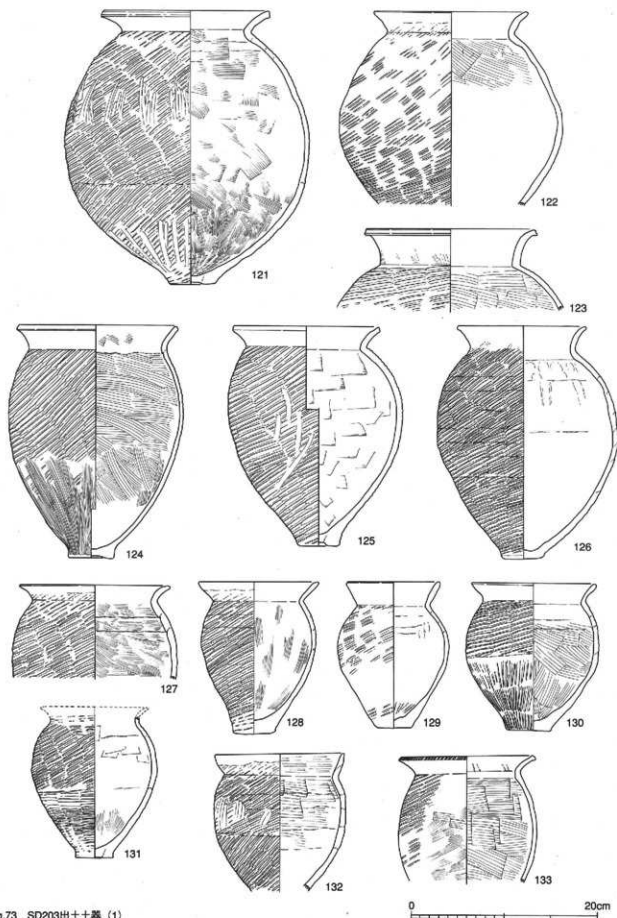


fig.73 SD203出土土器 (1)

施されている。いわゆる「淡路型甕」である。体部外面には右上がりのタタキが施され、その後に、上半部はナデ、下半部はハケが施されタタキの跡が消されている部分がある。

壺

134～145は壺である。134～141は広口壺で、体部は球形を呈し、体部と頸部の境は明瞭に屈曲するものが多い。頸部の形状は直立して筒状を呈し、屈曲して口縁部にいたるものと、短く開き気味に直立し、緩やかに開いて口縁部にいたるものが存在する。口縁端部はそのまま終わって端部に面を持つもの、つまみ上げて若干受け口状を呈するもの、端部下に粘土を貼り付け垂下口縁となるものがある。外面はヘラミガキが施されているものが多く、体部内面はハケで調整されている場合が多い。垂下口縁を持つ140は、端部には3条以上の沈線が、口縁部内面には3条の波状文が施され、また頸部にも3条の波状文が施された加飾壺である。141の頸部には上向きの断面三角形の突帯が貼り付けられ、突帯上にはヘラ状工具による連続キザミが施されている。

142は短頸壺である。無花果形の体部から頸部は緩やかに屈曲して明瞭な稜線を持たない。口縁部は直線的に若干開き、口縁端部は丸く収める。外面の調整は表面が剝離しているため明らかでないが、内面は板ナデの後、さらにナデで調整されている。

143は二重口縁壺である。頸部から斜め上方に開いた1次口縁に、大きく開き、若干外反する2次口縁が付加されている。口縁端部は若干拡張して面を持ち、端面にはヘラ状工具によって斜めの連続キザミが施されている。

144は長頸壺で、口縁部上半が緩やかに開き、口縁端部は若干下方に拡張して面を持つ。口縁部外面はハケの後縦方向にミガキが施され、内面の端部附近は横方向のヘラミガキが、それより下の部分にはハケが施された後にナデで調整されている。

145は脚付直口壺であるが、脚部は欠損してその形状は明らかでない。脚部と壺部の接合部には別個に作られた壺・脚を接合後に円盤状充填がなされている。壺部は偏球形の体部に直立して若干外反する口縁部が付く。口縁端部は丸く収め、外面口縁端部直下に擬門線が1条施されている。

ミニチュア土器

146～148はミニチュア土器である。146は広口壺で、口縁端部は内傾する垂下部を有する。端面には波状文が描かれた後に円形竹管浮文が貼り付けられている。147は直口壺で手づくねによって形成されている。148は口縁部が欠損しているため全体の形状は明らかでないが、細頸壺ないしは広口壺と考えられる。体部の頸部付近に細い半截竹管によって上から波状文・直線文・波状文・直線文の順に文様が施されている。

高坏

149～154は高坏である。149～151は坏部の体部から屈曲して口縁部が付き、体部と口縁部との境に稜を有するものである。口縁部は大きく外反して開き、口縁端部は丸く収める。体部高と口縁部高はほぼ等しい。脚部は屈曲して広がる。坏部のうち口縁部外面は縦方向のヘラミガキが、内面は横方向のヘラミガキが施され、体部内面には放射線状にヘラミガキが施されている。150の外面口縁端部直下には擬門線が1条施されている。口径30cm近い大型品、口径20cm前後の中型品、口径15cm前後の小型品がある。

152は坏部が深いタイプである。深い碗形の体部に若干屈曲して短く外反する口縁部が付く。口縁部内外面には横方向の、体部内外面には縦方向のヘラミガキが施されている。

153・154は坏部が浅い碗形の高坏である。坏部は内湾して大きく開き、口縁端部は丸く

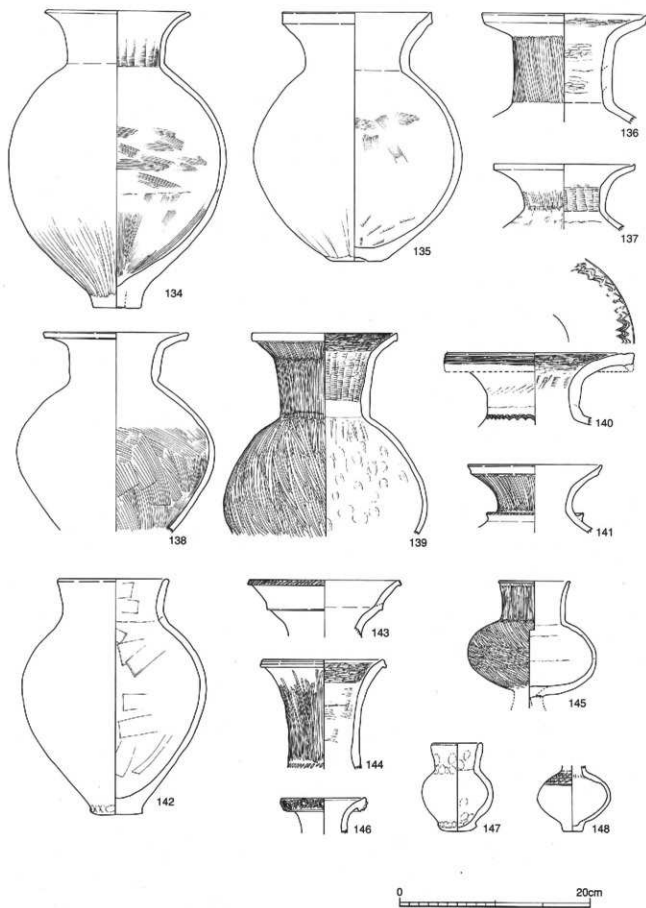


fig.74 SD203出土土器 (2)

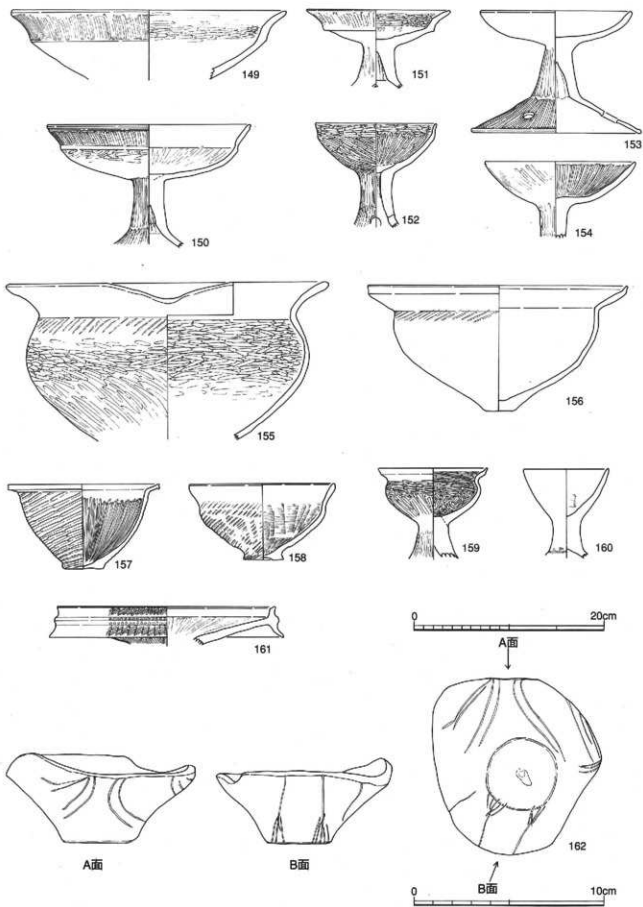


fig.75 SD203出土土器 (3)

取める。脚部の筒部は中実で、裾部は屈曲して大きく開く。154の坏部内外面は縦方向のヘラミガキが施されている。

鉢

155～158は鉢である。155・156は口径20cm以上的大型品であるが、155は口径33.4cmと特に大型のものである。半球形の体部から頸部はくびれる。この頸部から緩やかに屈曲して、外反する口縁部が付く。口縁端部を丸く収め、その一箇所を上から押さえて片口部が作られている。体部外面はタタキの後、上半は横方向、下半は斜め方向のヘラミガキで、内面は横方向のヘラミガキで調整されている。156は、半球形の体部から頸部は屈曲して直線的に外方に開く口縁部に至る。口縁端部は摘み上げて外面に面を持つ。体部外面はタタキの後、丁寧なナデが施され、内面は表面が剥離しているため観察は困難だがヘラミガキが施されているものと思われる。

157・158は口径15cm程度の小型品である。半球形の体部を持ち、157は頸部が屈曲し短い口縁部が付く。口縁端部は若干上下に拡張して面を持つ。158は体部と口縁部の境は不明瞭で、緩やかに屈曲してやや外方に開く口縁部が付く。口縁端部は丸く収める。体部外面はタタキが施され、内面は、157はヘラミガキで、158はハケで調整されている。

159・160は脚付鉢である。159の鉢部は、半球形の体部から屈曲して、外反する口縁部が付く。口縁端部は摘み上げる。表面は内外面共にヘラミガキが施されている。160は半球形の鉢部で、口縁端部は尖り気味に丸く収める。

器台

161は器台である。直線的に大きく開く口縁部から上方に屈曲して口縁端部にいたる。また、下方にも垂下させ端部に幅の広い面を持ち中央は突帯状に突出する。この突帯を挟んで上下には櫛描波状文が描かれ、突帯上には直径3mmの細い竹管による連続刺突文が上下2段施されている。口縁部の内外面には縦方向の丁寧なヘラミガキが施されている。筒部は欠損するが、直径7cm程度の細い円筒状の筒部がつくものと思われる。

絵画土器

162は絵画土器である⁽²⁾。壺の底部付近外面に細い針状の工具によって描かれている。絵画の上半は欠損しているため、全体像は明らかでない。図のA面には弧を描いて「ハ」の字状に開く2本線が描かれ、その向かって左側には左側の弧線から延びる2本の直線が描かれている。向かって右側には3本線の直線とそれに直交する3本線の弧線が描かれているが、同一の絵画か別のモチーフであるかは上部が欠損するため、明らかでない。上半部が欠損するためモチーフは明らかでないが、人面文の可能性もある。B面には鷲のような長足の鳥の2本足が描かれ、その右側には緩やかな「S」字を呈する曲線が描かれており、尾を表現しているものと思われる。

鉄製品

163・164はS D203出土の鉄製品である⁽³⁾。163はヤリガナノ先端部で、基部のほとんどは欠損する。残存長6.0cm、刃部長1.6cm、基部幅0.7cm、基部厚4mmを測る。刃部は反りがなく平坦であるが、刃部上面には三又鎧が認められる。残存する基部には木質は確認されない。164は欠損部が多く全体の形状が不明のため

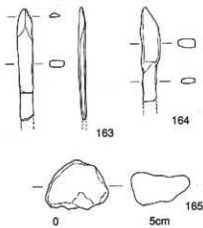


fig.76 SD203出土鉄製品・鉄洋

器種は明らかでない。厚さ5mmで残存長4.9cm、残存部最大幅1.0cmを測る。刀子ないしは鉄鎌の可能性はある。

鉾澤

165はSD203上層出土の鉾澤である。幅3.4cm、長さ2.6cm、厚さ1.8cm、を測る。形状は不定形で、表面は凹凸が多く、多孔質である。色調は黒褐色を呈する。着磁性は弱いが、鉄器生産に由来する滓である。

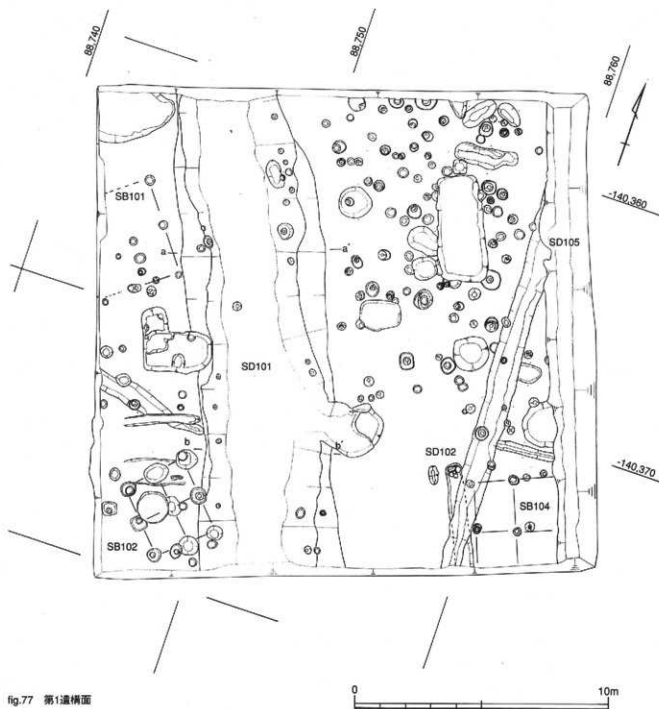


fig.77 第1遺構面

第5節 第1遺構面の遺構と遺物

第1遺構面は、標高22.2～23.5m前後の暗灰褐色中～粗砂上面で検出された。この遺構面では、掘立柱建物3棟と大溝1条・溝4条・土坑7基・柱穴多数が確認された。土坑、柱穴等の遺構は調査地南半より北半のほうが密度は高い。遺構から出土した遺物や遺構面の上層にある褐灰色シルト混じり細砂から出土した遺物により、飛鳥時代から中世にかけての遺構面と考えられる。

(1) 飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

S B 102

S B 102は調査地の南西隅で検出された、東西2間、南北2間の総柱の掘立柱建物である。建物の規模は東西2.8m、南北2.8mを測る。掘形の大きさは1辺60～80cm、検出面からの深さは25～30cmで、柱痕の残っているものでは、その直径は25cmを測る。柱間距離は東西1.5m、

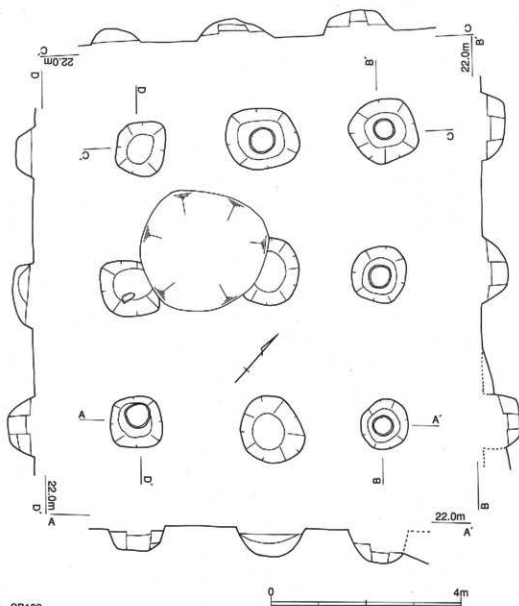


fig.78 SB102

南北1.6mを測る。建物の南北方向はN42°Wである。

柱掘形が大きく、総柱の建物であることから、倉庫であると考えられる。出土遺物は須恵器・土師器の小片のため時期の確定は難しいが、後述するSD101に切られていることから飛鳥時代の遺構と考えられる。

SD101

SD101は幅5.5m、深さ0.8mを測り、断面の形状が逆台形を呈する大溝で、現在の街路区画とはほぼ同様の方向に掘られている。埋土は大きく3層に分けられる。

埋土内からは多量の須恵器・土師器の土器類と瓦、埴が出土した。瓦には芦屋廃寺出土法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦と同範瓦が含まれる。土器類は飛鳥時代から平安時代までのものを含むが、飛鳥・奈良時代のものが中心である。この溝から東側ではこの時期の遺物は少なく、大型の遺構も見られないことから、なんらかの区画を示す溝と考えられる。

出土遺物 土器

166～168は須恵器の坏である。166はTK217型式に属し、7世紀初頭のものである。167・168は8世紀代のものと考えられる。

169・170は土師器の坏である。169は口縁端部が外反して終わる。内外面は丁寧なナデが施されている。170の内外面の調整は表面が剥離しているため、明らかでない。いずれも飛鳥ⅡないしⅢ期に属すると思われる。

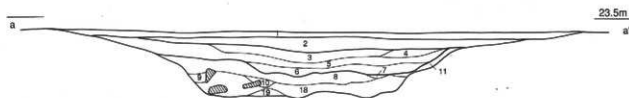
171・172は貼付け輪高台を持つ須恵器の坏である。高台の付けられる位置は底部と体部の境からやや内側に入る。7世紀末から8世紀中ごろのものと考えられる。

173は灰釉陶器の碗である。やや高めの貼付け輪高台を持つ。体部・底部の外面には薄く淡緑色の釉薬が掛る。

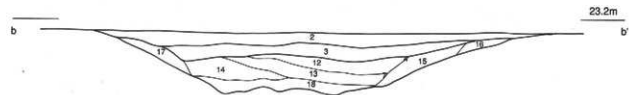
174は須恵器の坏である。体部から口縁部にかけては外反し、体部はやや深い。9世紀代のものと考えられる。

175～177は壺の底部である。175は小さな貼付け輪高台をもつ小型の壺である。176・

北セクション



南セクション



- | | | |
|-------------|--------------|-------------------|
| 1. 明灰褐色細～中砂 | 7. 黄白色砂 | 13. 黄白色細砂(灰色粘土塊付) |
| 2. 灰褐色細～中砂 | 8. 灰色砂混じりシルト | 14. 清灰褐色砂混じりシルト |
| 3. 暗灰褐色細～中砂 | 9. 灰色細～中砂 | 15. 暗灰褐色中～粗砂 |
| 4. 褐色中砂 | 10. 灰色中～粗砂 | 16. 暗褐色粗砂 |
| 5. 褐色中～粗砂 | 11. 黒褐色中～粗砂 | 17. 黒褐色粗砂 |
| 6. 黒褐色中～粗砂 | 12. 黄白色細砂 | 18. 黄褐色粗砂 |

0 2m

fig.79 SD101土層断面

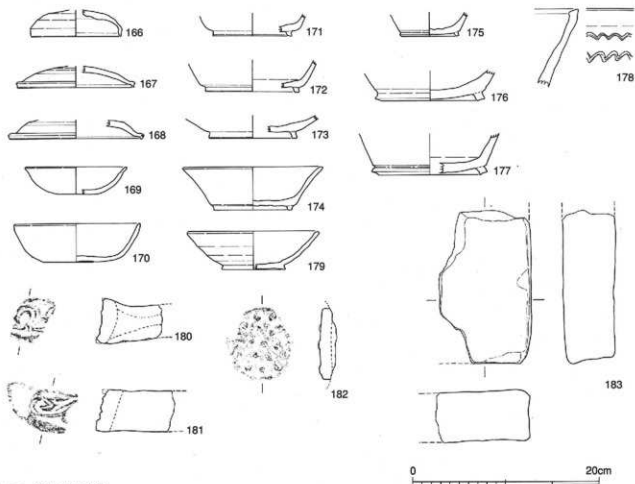


fig.80 SD101出土遺物

177は底部と体部の境付近に外側に踏ん張る貼付け輪高台が付く、7世紀後半から8世紀代の台付長頸壺の底部と思われる。

178は甕の口縁部である。口縁部は直線的に外方に広がり、口縁端部付近で若干内湾する。口縁端部は内傾した面を持ち、若干内側に拡張する。口縁部外面中央にはヘラ状工具により2本の波状文が描かれている。

179は東播系須恵器の椀で、円盤平高台から内湾する体部をもち、口縁端部は丸く収める。見込みは窪む。11世紀末のものと考えられる。この時期の遺物はこれ1点のみのため、上層からの混入の可能性が高い。

瓦

180・181は忍冬唐草文軒平瓦である。180は宝珠形の中心飾りの一部と、向かって左側の第一結節部が残存する。181は瓦当面左端付近の破片である。左端部の瓦当面は欠損している。額の形態は2点とも直線的である。芦屋廃寺遺跡第62地点から出土した芦屋廃寺創建時の瓦と考えられているものと同範と思われる⁽⁴⁾。また当遺跡の南約1kmに位置し、古代山陽道の「葦屋驛」関連遺跡と考えられている神戸市東灘区深江北町遺跡第9次調査でも同様の瓦が出土している。

182は軒丸瓦の中房部分で、この部分だけが瓦当面から剥離したものである。中房内の蓮子は、その頂部は欠損し基部のみが残っているものが多い。蓮子の配列は1+6+11である。

この蓮子の配列と中房の直径から、180・181と同様に、芦屋廃寺創建時の瓦と考えられている、法隆寺複弁八弁蓮華文軒丸瓦と同文の瓦と思われる。

埴

183は埴である。厚さ2.7cmを測る。表裏面はナデで、側面は板ナデで調整されている。一角部分の破片のため全体の形状は明らかでないが、厚さ、胎土、焼成などから、芦屋廃寺遺跡第62地点出土の埴と同様のものと考えられる。

鉄製品

184～191はS D101出土の鉄製品である。184は刃部の大部分と柄を欠損するが、片刃の刀子と考えられる。185は厚さ3.5mmの板状の不明鉄製品である。186は幅10mm、厚さ5mmの断面長方形で先端が尖る鉄製品の基部である。187～189・191は鉄釘で、何れも断面が正方形を呈する角釘である。187は断面が8mm角でやや太めである。他のものは断面5mm前後である。190は厚さ5mmで、断面が菱形の不明鉄製品である。

鉾滓

192～195は鉾滓である。192～194は不定形の鉾滓で、いずれも表面は凹凸があり、多孔質である。また、砂粒や小礫を多く付着ないしは包蔵する。195は碗形滓で底面は緩やかで整った碗形を呈する。上面は凹凸がある。多孔質で、砂粒や小礫を多く付着ないしは包蔵する。これらの滓はいずれも着磁性はないが、鉄器生産に由来する滓と考えられる。

S D105

S D105は真北に近い南北方向の溝である。調査区内ではほぼ直線的に走る。幅1.2m、深さ30cmを測り、断面の形状はU字形を呈する。第70地点では第2遺構面で検出されたS D202としていた溝である。遺物は弥生土器もしくは土師器の小破片が出土したのみで時期の確定は難しいが、今回の調査区内では第1遺構面で確認できたので、この面の遺構として扱うこととする。

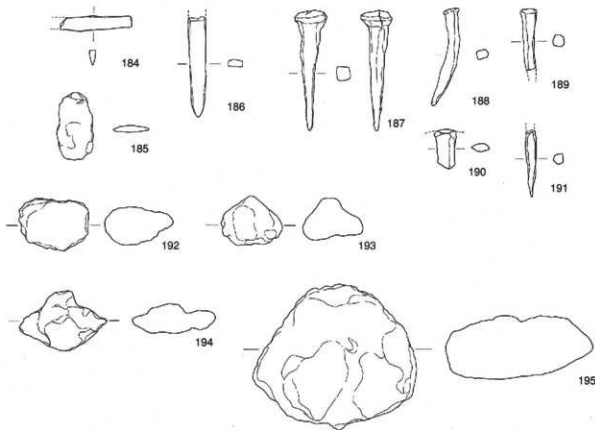


fig.81 SD101出土鉄製品・鉾滓

(2) 中世の遺構と遺物

SB101

SB101は調査区北東で確認された南北2間、東西2間以上の掘立柱建物である。調査区の西側に延びるため全体の規模は明らかでない。柱穴掘形は直径25cm、検出面からの深さは15~25cmで、柱痕の残っているものでは、直径15cmを測る。柱間距離は東西1.0~1.2m、南北1.8~2.0mを測る。建物の南北方向はN42°Wである。東端柱列の柱穴埋土上層には黄白色粘土が入っていた。柱痕は確認されなかったことから、柱の基部を抜いた後に粘土を置き、その上に礎石を置いて補修した可能性がある。

196はSP169出土の鉄滓で、形状は不定形を呈す。表面には凹凸があり、砂粒や小礫が多く付着する。他の柱穴内出土遺物は須恵器、土師器の小片のため、詳細な時期は明らかでないが中世に属する建物と考えられる。

SB104

SB104は調査地内では南北2間、東西2間分が確認された掘立柱建物である。第70地点のSB104と同一の建物で、全体の規模は南北3間、東西5間の総柱の掘立柱建物である。南側は今回の調査地外にあたり、また第70地点では南側に攪乱があったため、もう1間以上延びる可能性がある。柱穴掘形の大きさは直径30cm、検出面からの深さは30~35cmで、柱痕の残っているものでは、その直径は15cmを測る。柱間距離は東西1.8m、南北1.8mを測る。建物の南北方向はN23°Wである。柱穴内に礫が詰まっているものもあり、柱基部を補修したものと考えられる。

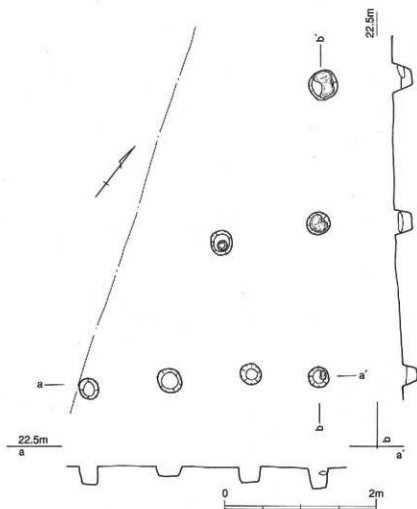


fig.82 SB101

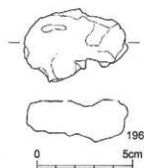


fig.83 SB101出土鉄滓



fig.84 SD102出土土器

S D 102はS B 104の西辺に接して造られた南北方向の溝で、S B 104の雨落ち溝と考えられる。幅0.8m、深さ18cmを測り、断面の形状は緩やかなU字形を呈する。溝の北端には傘以上の礫が数石据えてあった。

197はS D 102出土の土師器の小皿で、平らな底部から体部は外反して広がり、口縁端部は小さな玉縁状を呈してその内面には段を有する。「ての字口縁」のもっとも退化した形態である。外面の下半はユビオサエで、上半は1段のヨコナデで仕上げられている。12世紀初頭の遺物と考えられる。このS D 102内からは小皿の他、土師器大皿等が出土している。

以上の出土遺物から、S B 104は12世紀初頭の掘立柱建物と考えられる。

第6節 小 結

月若遺跡第81地点においては、3面の遺構面から4時期の遺構・遺物が確認された。

縄文時代

縄文時代のものとしては、中期末にあたる北白川C式の土器が出土した。この時期の遺構は確認されなかったが、約調査地の約150m北方の月若遺跡第2地点において、同時期の土器が出土しており⁽¹⁾、調査区の北側にこの時期の遺跡の中心があるものと思われる。

第3遺構面

第3遺構面においては、弥生時代後期以前の多数の土坑が確認されたが、遺物の出土はほとんど無く、弥生時代後期以前に関しては遺跡の周縁部と考えられる。

第2遺構面

第2遺構面では弥生時代後期後半の溝（S D 203）が確認された。この溝には多量の弥生土器が投棄された状態で検出された。この溝より東側では顕著な遺構が少なくまた地形的にも、この溝より東約50mには芦屋川の河岸段丘崖があることから、この溝は集落の居住域を画する溝と考えられ、西側に集落の中心があると思われる。この集落は、月若遺跡・寺田遺跡・芦屋廃寺遺跡にまたがる大規模な弥生時代後期の集落が想定される。

第1遺構面

第1遺構面では飛鳥時代から中世の遺構が確認された。特に飛鳥時代に掘削された大溝（S D 101）からは法隆寺式軒瓦を含む多量の瓦や埴が出土していることが注目される。この法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦は、芦屋廃寺第62地点出土のものと同范と考えられる。また埴も同じく芦屋廃寺第62地点から出土しており、金堂の基壇に使われていたと推定されている。しかし、この芦屋廃寺からは直線距離にして300m以上離れていることや、遺物があまりローリングを受けていないことから、直接芦屋廃寺から流れて来たとは考え難い。また溝の規模・形状からは、なんらかの区域を画する溝と考えられる。以上のことから、付近に芦屋廃寺の関連施設あるいは官衙的な施設が存在が想定される。

（註）

- (1) 第4章、第5章の縄文土器については立命館大学助教矢野健一氏にご教示いただいた。記して謝意を表します。
- (2) 絵画土器については芦屋市教育委員会森岡秀人氏にご教示いただいた。
- (3) 第4章、第5章の鉄製品・銅器については、神戸市教育委員会中村大介氏にご教示いただいた。
- (4) 『現地説明会ノート 芦屋廃寺跡（第62地点）発掘調査』芦屋市教育委員会2002 芦屋廃寺出土瓦・埴については芦屋市教育委員会森岡秀人・竹村忠洋氏にご教示いただいた。
- (5) 森岡秀人「月若遺跡（第2地点）」『兵庫県埋蔵文化財年報昭和60年度』1988兵庫県教育委員会

第5章 寺田遺跡 第181地点の調査

第1節 調査の概要

(1) 調査の方法

寺田遺跡第181地点は、芦屋川右岸の緩やかに南に向かって傾斜する扇状地上に立地し、現地表面では標高24m前後に位置する。平成14年度に調査を行った寺田遺跡第139地点の北側隣接地にあたり、西側隣接地では、平成11年度に実施した都市計画道路川西線街路築造工事に伴う発掘調査で、寺田遺跡第117・118地点として発掘調査が行われている。また先述した月若遺跡第81地点の50m東に位置する。

『芦屋市文化財調査報告 第40集 芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図』(平成13年3月31日現在 芦屋市教育委員会発行)によると、この調査地の北側と東側は、周知の埋蔵文化財包蔵地としての寺田遺跡と月若遺跡の境界となっている。しかし、地形的にも、また遺構のありかたもこの境界線で区切ることはできず、この境界線はあくまでも行政上の「周知の埋蔵文化財包蔵地」としての境界として考えるべきものである。

第139地点の調査結果により、現地表下40～60cmまでは近世から現代までの耕作土ならびに盛土層であるため、この層までを重機で掘削し、また地中に残存した以前の建物のコンクリート基礎についても重機によって除去した。以下の層については人力によって掘削を行い



fig.85 寺田遺跡第181地点調査地位置 (S=1/1000)

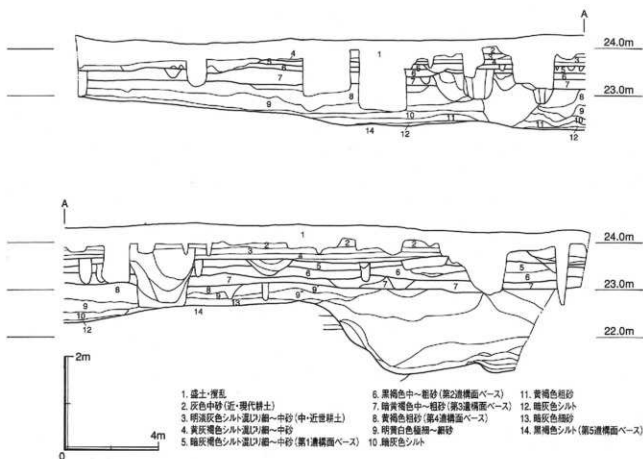


fig.86 調査区北壁土層

合計5面の遺構面の調査をおこなった。各遺構面ごとに、遺構検出・遺構掘削をおこない、図面作成・写真・クレーンによる空中写真撮影等の記録を作成した。

第5遺構面に関しては、残土置き場の関係上、平成16年度に調査区の東側約2/3の調査を行い、西半部を埋め戻した後、平成17年度に西側約1/3の調査を実施した。

(2) 基本層序

基本層序は、現地表面から下に、盛土層・明淡灰色中砂（近・現代耕作土）・明黄褐色中砂（酸化層）・灰色シルト混じり細～中砂（中世遺物包含層）・暗灰褐色中～粗砂（第1遺構面ベース）・黒褐色中～粗砂（第2遺構面ベース）・暗黄褐色中～粗砂（第3遺構面ベース）・明黄褐色粗砂（第4遺構面ベース）・明黄白色細砂・暗灰色シルト・黒灰色シルト（第5遺構面ベース）となる。

第2節 第5遺構面の遺構と遺物

第5遺構面は標高22.2～22.5m前後の暗灰色シルト・黒灰色シルト上面で検出された。この遺構面では、土坑7基、集石土坑1基、ピット5基、自然流路1条が確認された。第139地点の調査成果から縄文時代晩期中葉の遺構面と考えられるが、遺構に伴う遺物は少なく、以下主な遺構について報告する。

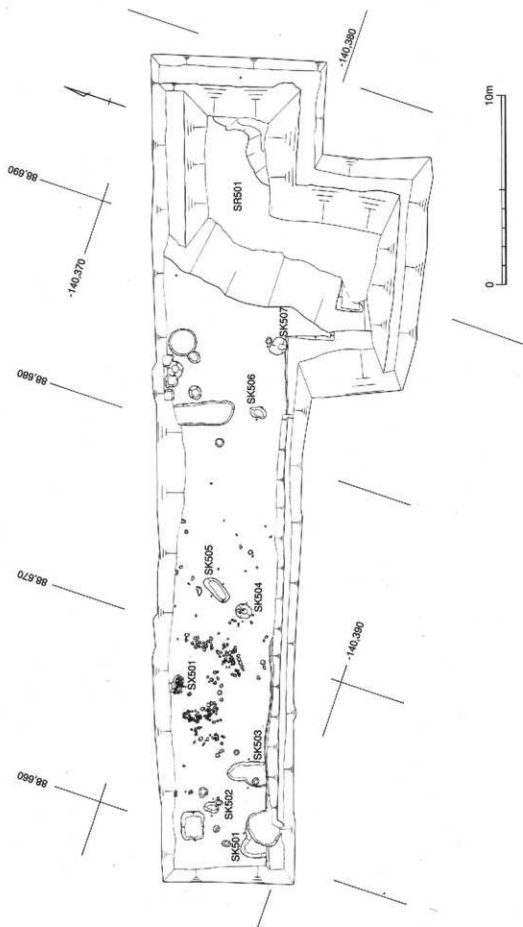


Fig. 87 第5遺構面

(1) 土坑

S K 504

S K 504は長径0.9m、短径0.75mの楕円形を呈する土坑である。深さ30cmで、すり鉢状を呈する。土坑内の北半には花崗岩の礫が3石置かれていた。そのうち1石は、長軸を底から立てて、またその北側には長軸を横位にして置かれていた。

(2) 集石土坑

S X 501

S X 501は長径0.9m、短径0.75m、深さ8cm程度の楕円形を呈する浅い土坑に計27石の拳大の花崗岩礫を集めて置いたものである。土坑は東西方向に長軸を向け、礫は中央から南に集中している。礫群は、重なりはあまりなく、ほぼ1層のみである。西端には、他のものより大きな直方体に近い石を横位に置いてある。

この集石土坑の周囲にも、拳大から人頭大の花崗岩の円礫が集中する所が数ヶ所存在し、それらの礫群が直径約5mで円形に巡るように見えるが、自然のものか、あるいは人工的なものかは明らかにできなかった。

(3) 自然流路

S R 501

S R 501は調査区の東端で検出された自然流路で、第139地点の調査における第5遺構面S R 501と同一の自然流路である。調査区内では流路の西肩部が検出されたのみで全幅は明らかでない。調査区内では幅12m以上、深さ2.0mを測る。流れは、ほぼ北から南に流れており、埋土はシルトから粗砂の互層になっている。この埋土の中位から後述する縄文時代晩期中葉の土器片が出土している。

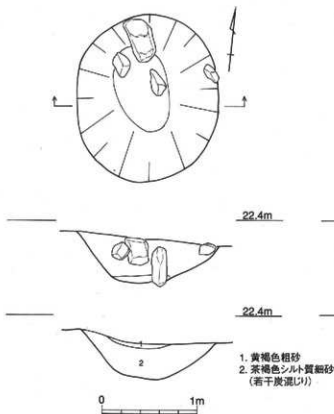


fig.88 SK504

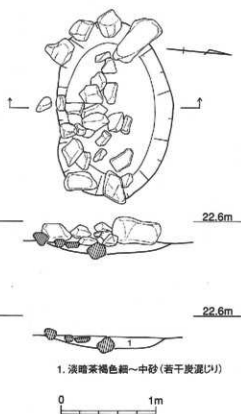


fig.89 SX501

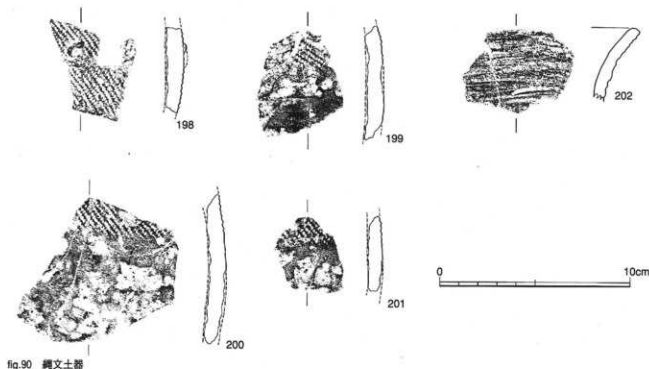


fig.90 縄文土器

(4) 縄文時代の遺物

198～201は後述する第3遺構面S D301から出土した縄文土器であるが、ここで報告する。198～201は同一個体の破片で、深鉢と思われる。体部上半には横位にR Lの縄文が施文され、下半は研磨が施されている。内面は表面がほとんど剥離しているため、詳細は明らかではないが、ナデで調整されている。198の縄文上には直径1cmの円形の粘土を貼り付けた浮文がはがれた痕跡がある。先述した月若遺跡第81地点出土の縄文時代中期末の土器に比して、胎土は細かく、焼成も非常に良好である。胎土には有機質が炭化したものと思われる炭化物が若干確認でき、繊維混入土器と考えられる。類例に乏しく時期の確定は困難であるが、繊維土器とすれば縄文時代早期末の土器である可能性がある。

202は自然流路S R501の中層から出土した口縁部の破片である。口縁部は外反し、口縁端部は若干面を持つ。外面は2枚貝の貝殻条痕が施され、内面はナデで調整されている。縄文晩期中葉の篠原式に属するものと考えられる。

第3節 第4遺構面の遺構と遺物

第4遺構面は標高23.0～23.3mの明黄褐色粗砂層上面で検出された。溝2条、土坑2基、落ち込み2基、柱穴約20基が確認された。これらの遺構や遺構面の上層からは小片の遺物の出土しかなく、今回の調査区だけでは時期の確定は難しいが、南に隣接する第139地点の調査では、同一面の土坑内から弥生時代中期前半（畿内第Ⅱ様式から第Ⅲ様式古段階）に属する広口壺や甕等の土器が出土していることから、この時期の遺構と考えられる。

(1) 土坑・ビット

S K 401

土坑は2基確認された。S K 401は調査区中央やや西寄りで検出された土坑で、後述する第1遺構面のS K 103に切られているため全体の形状は明らかでないが直径1.2m、深さ15cmの円形で浅いすり鉢状を呈する土坑である。

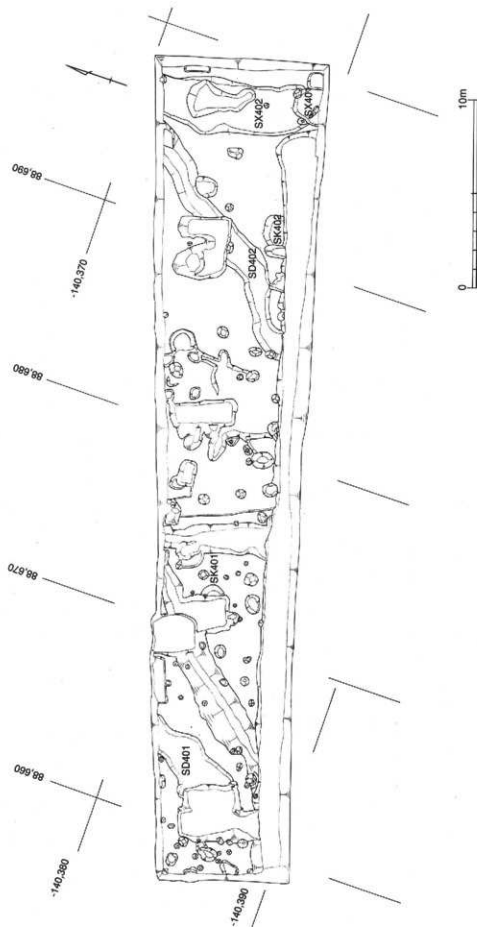


図 31 第 4 海壕遺跡

S K 402 S K 402は調査区西半で検出された土坑である。調査区の南に伸びるため全体の形状は明らかでないが、東西1.7m、南北1.1m以上の方形ないしは長方形を呈すると思われる土坑である。深さは20cmを測り、底は平坦である。

ピット ピットは調査区の東半部分で約20基検出された。直径15～40cmと大きさも様々で、また孤立柱建物などの柱穴としてまとまるものはない。

(2) 溝

S D 401 S D 401は北東から南西方向に走る幅約2m、深さ20cmを測る溝状の遺構である。遺物の出土も無く、その埋土は粗砂が中心であることから自然の流路の可能性はある。

S D 402 S D 402は北東から南西方向に走る幅約1.5m、深さ20～30cmを測る溝状の遺構である。断面の形状は緩やかなU字形を呈する。埋土は暗灰色砂が中心であるが遺物の出土はなかった。第139地点の調査においても、今回の調査区との境付近では途切れてはいるが同じく調査区の中央から南西方向に走る溝が確認されているので、同一の溝と考えられる。

(3) 落ち込み

S X 401 調査区の西端近くで2基の浅い落ち込みが確認された。S X 401は幅2.5m、深さ20cmで北側は調査区外に延びるため全体の形状は明らかでないが、南北方向に長い浅い落ち込みである。南端では後述するS X 402に切られている。

S X 402 S X 402は南側が調査区外に延びるため全体の形状は明らかでないが、調査区内では直径約2mの円形を呈する。底面はほぼ平らであるが、南に向かって若干下がる。

第4節 第3遺構面の遺構と遺物

第3遺構面は標高23.2～23.5m前後の暗黄褐色中～粗砂層上面で検出された。この遺構面では、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての土坑28基・柱穴多数・落ち込み2基・溝5条・土器溜り1基が確認された。

(1) 土坑

調査区の東半部分で、S D 304より南側で集中する傾向にある。直径0.5～1.0m前後、深さ20cm前後の円形ないしは楕円形で、すり鉢状を呈するものが多い。第139地点の調査でも、調査区東半部分で今回の調査区に近い所に同様の土坑が集中する傾向にある。これらの土坑群から、遺物の出土は無いためその性格等は明らかでない。

(2) 落ち込み

S X 302 S X 302は調査区の北東隅で検出された落ち込みである。調査区内では南北3.8m、東西1.0mの範囲のみが検出され、北側と東側は調査区外に延びるため、全体の規模や形状は明らかでない。検出面からの深さは15cmを測る。壁は立ち上がり、底面は平坦である。隅丸状のコーナーを持ち、またこのコーナー付近に直径45cmの柱穴と、南壁に接して深さ10cmの楕円形を呈する浅い土坑が存在する。全形が不明であり、遺物が出土していないことから、確実なことは明らかでないが、以上の特徴から堅穴住居の可能性はある。

(3) 溝

S D 301 S D 301は北東から南西に走り、断面の形状が逆台形の溝である。第117・118地点の調査では第4面S D 11として、第139地点の調査では第3遺構面S D 301として調査されたものと

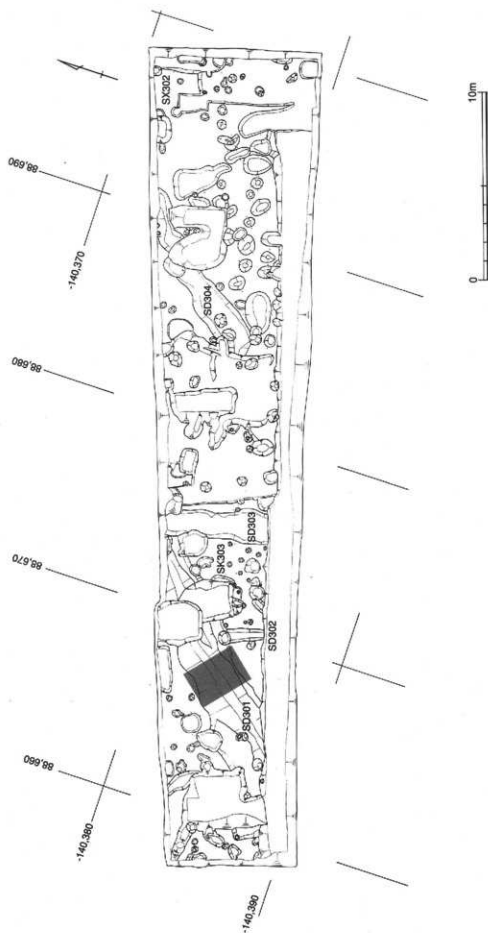


fig. 32 第3期構面（トーンはfig. 94の範囲）

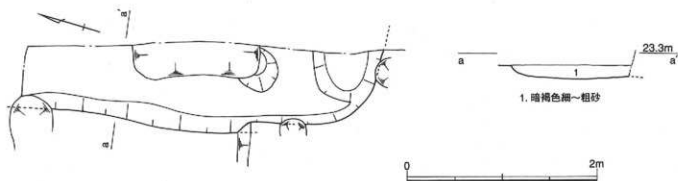


fig.93 SX302

同一の溝である。上端幅2.5～3.0m、下端幅0.5m、深さ60～70cmを測る。埋土は黄褐色粗砂が中心である。そのため、掘削中は層位的に遺物を取り上げることができず、機械的に約20cmごとに上層・中層・下層と分けて取り上げた。底面からは鉢と甕の下半部を2個伏せた状態で置かれているものも確認された。土層確認のためのセクションで観察した結果、大きくは3回の流れと堆積によって埋まっていったことが看取される。上層からは弥生時代後期末から古墳時代初頭の土器が、中層以下からは弥生時代後期末の土器が大量に出土した。よって、この溝は弥生時代後期後半に掘削され、古墳時代初頭に完全に埋まったものと思われる。

第117・118地点では、この溝より北側においてS D301と同時期の竪穴住居が4棟密集して確認されている。一方、この溝の南側にあたる第139地点においては主だった遺構は見られない。よってこの溝は集落内の居住域を区画する溝の可能性がある。

出土遺物

203～219はS D301上層～下層出土の弥生時代後期の土器である。203～208は甕である。

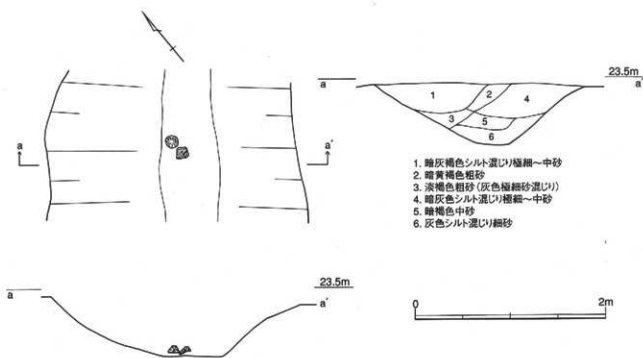


fig.94 SD301

203～206は口径15cm 前後の中型品で、体部上半に最大径を持ち、頸部は明瞭に屈曲して緩やかに口縁部に至る。口縁部は外反し、口縁端部は面を持つもの（203・204）と丸く収めるもの（206）がある。体部外面はタタキの後、上半をハケで調整しているもの（203・205）があり、内面はナデないしハケで調整されている。

207・208は小型の甕で207はくびれの弱い頸部から短く直線的に開く口縁部が付く。口縁端部は丸く収める。208は屈曲度の弱い頸部から外反して長い口縁部が付く。口縁端部は摘み上げる。205の外面上半は右下がりのタタキが施されている。

209・210は広口壺である。209の頸部から口縁部は、緩やかに外反して広がり、口縁端部付近はほぼ水平に開く。口縁端部は若干上下に拡張し垂直の面を持つ。その面に斜めのキザミが施されている。口縁部外面には縦方向の、内面には横方向のミガキが施されている。

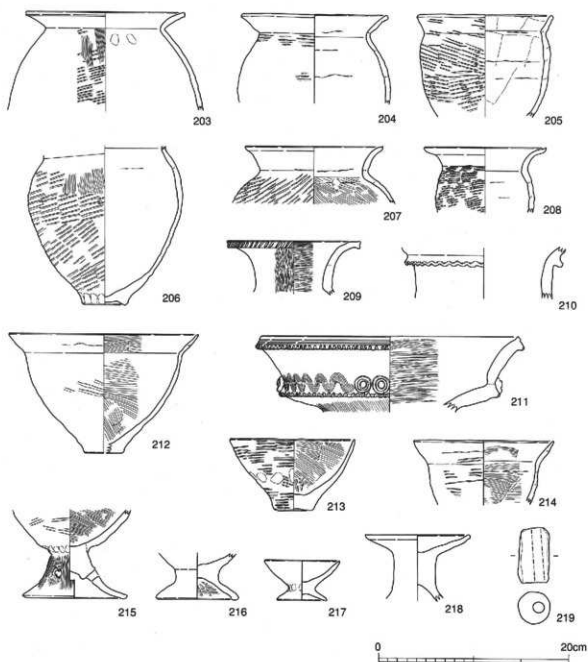


fig.95 SD301出土土器 (1)

210は垂直に立ち上がる頸部から緩やかに口縁部に移行する。その口縁部の頸部付近の外面には斜め下方に下がる断面三角形の突帯が貼り付けられ、その突帯の先端は上下から交互に押さえられて波状を呈する。

211は二重口縁壺で、直線的に広く外方に広がる1次口縁の上方に、外反する2次口縁が付く。口縁端部は上下に拡張する。端面には1条の擬凹線を巡らしている。その下端にはキザミが施されている。外面の屈曲部にも同様のキザミが施されている。2次口縁の外面下半には櫛をコンパス状に、交互に反転を繰り返して描かれた波状文が巡らされ、その上から2個1組竹管円形浮文が4方に貼り付けられている。

212~214は鉢である。212は内湾して開く体部に、緩やかに屈曲して外方に広がる口縁部が付く。口縁端部は尖る。213は内湾する体部からそのまま口縁端部となる形態のものである。214は緩やかに屈曲して口縁部が付くもので、失り気味の口縁端部となる。

215~217は脚付鉢で、碗形の体部を持つ。215の脚部は中実の筒部から緩やかにハの字状に開いて端部は丸く収める。中位の3方向にヘラ状工具によって分銅形のスカシが穿かれている。216・217は短くハの字に開く短い脚部を持つ。

218は小型の器台である。中実の筒部から直線的に外方に広がる受け部が付く。口縁端部は丸く収める。内外面はナデで調整されている。

219は土鍾である。直径3.3cmの円筒形を呈し、孔は直径1.2cmである。

220~229はS D301上層出土のうちに古墳時代初頭の土器である。220~225は甕の口縁部で、220は内湾気味の口縁部に端部は丸く収める。221・222は外反する口縁部を持ち、端部は若干面を持つ。223は強く屈曲する頸部に外反する口縁部を持ち、端部は摘み上げる。体部外面には細かいタタキが施されている。河内産の庄内甕である。224・225は直線的ないしは内湾する口縁部に端部は若干内側に肥厚する布留式甕である。

226は壺の体部である。球形の体部を持ち、屈曲した頸部から口縁部に至る。227は二重口縁壺である。垂直に立ち上がる頸部から外反して1次口縁となり、この1次口縁上に若干外

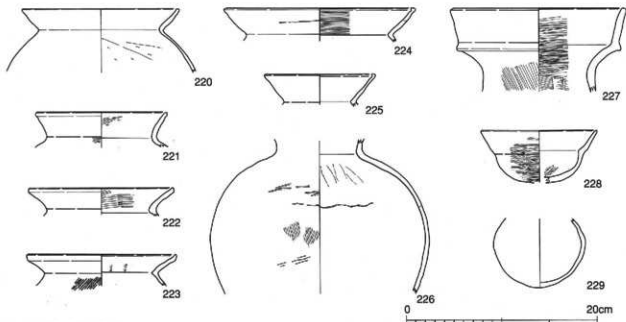


fig.96 SD301出土土器(2)

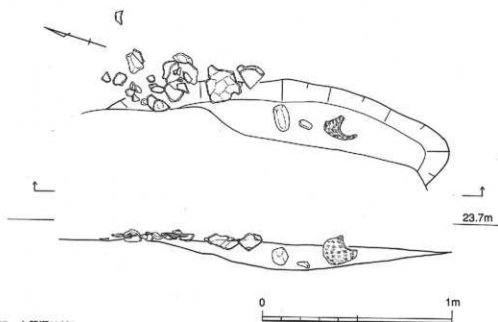


fig.97 土器溜り301

方に直線的に広がる2次口縁がつく口縁端部は面をもつ。頸部外面はハケで、口縁部外面はナデ、内面はヘラミガキが施されている。

228は小型丸底鉢で、半球形の体部から直線的に外方に大きく開く口縁部がつく。229は、口縁部は欠損するが小型丸底壺の体部である。球形の体部を持ち、斜め上方に広がる口縁部を持つものと考えられる。

(4) 土器溜り

土器溜り301

土器溜り301 (S K 303) は調査区中央で検出さ

れた。第1遺構面の土坑S K 103に切られているため、全体の形状・規模は明らかでない。南北1.5m、東西0.5mの範囲で、弥生後期に属する甕等が平面的に集中していた。土器を取り上げた下には、南北1.9m、東西0.4m以上、深さ15cmの浅い土坑 (S K 303) が存在する。S D 301の直ぐ南に位置することから、S D 301に流れ込む浅い溝状の窪みの可能性もある。

230は土器溜り301出土の甕である。体部下半が欠損するため全体の形状は明らかではないが、球形の体部から、頸部の屈曲は明瞭ではなく口縁部が付く。口縁部は外反し、口縁端部は面を持つ。体部上半の外面はタタキの後にハケが施されている。

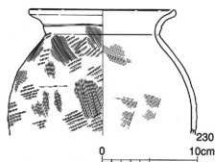


fig.98 土器溜り301出土土器

第5節 第2遺構面の遺構と遺物

第2遺構面は標高23.3～23.5mの黒褐色中～粗砂層上面で検出された。この遺構面では方形竪穴住居1棟と掘立柱建物1棟・土坑・溝・柱穴等が確認された。古墳時代後期～飛鳥時代にかけての遺構面である。

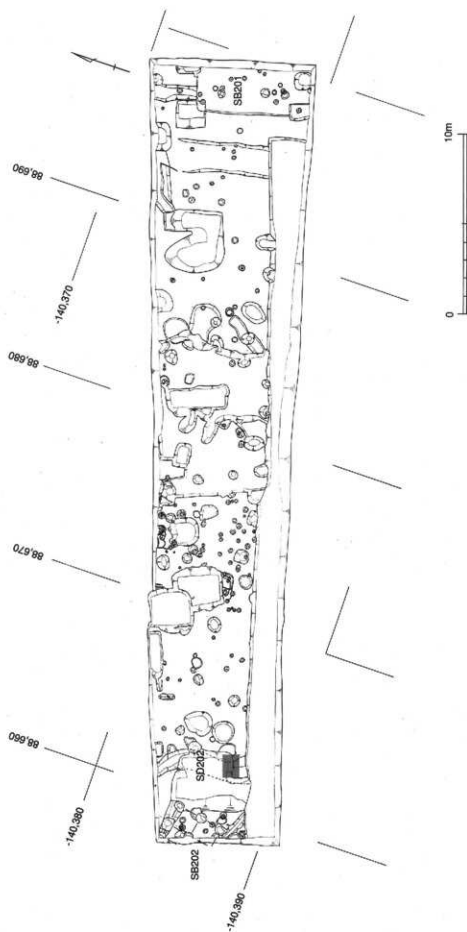


fig.99 第2期横断面（トーンはfig.103の範囲）

(1) 古墳時代後期末の竪穴住居

S B201

S B201は調査区の東端で確認された方形の竪穴住居である。調査区内では、東西2.5m、南北6.2mが確認された。南側と東側は調査区外に広がるため、全体の規模は明らかでないが、一辺6.5m前後の規模と考えられる。床面全面に炭化材と炭・焼土が広がっており、焼失住居である。炭化材は放射状に広がっていることからほとんどが垂木材と考えられ、梁材や主柱材と思われる太い炭化材は確認されなかった。また細い垂木材以外に垂木材の間に板状の炭化材も確認され、一部板が葺かれていた可能性がある。また、炭化材の上に焼けた粘土が乗っている部分も確認され、屋根に粘土が置かれていた可能性がある。

この炭化材を取り外した床面で直径25cm、深さ25cmの主柱穴が2基確認され、主柱穴は4本と考えられる。柱間距離は3mを測る。調査区の南端の住居内南西コーナー付近と思わ

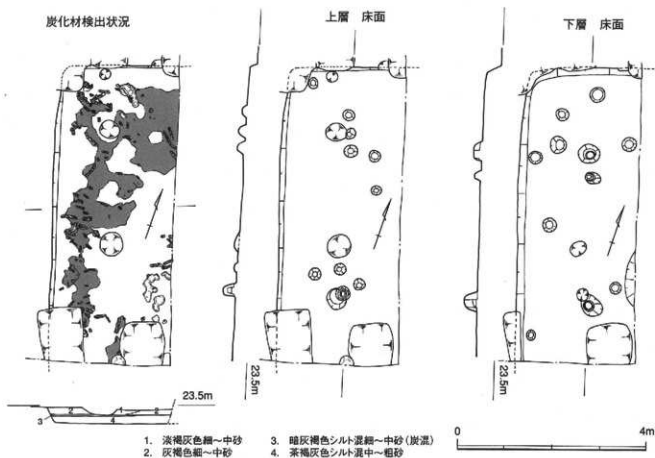


fig.100 SB201

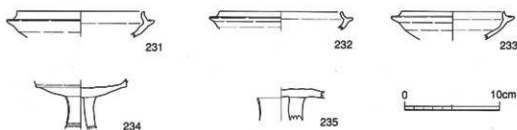


fig.101 SB201出土土器

れる位置には、人頭大の花崗岩の白石が置かれていた。

この床面となっている茶褐色灰色砂を約10cm掘り下げるとさらに床面（下層床面）が確認された。よってこの竪穴住居址は、一度床面に土を入れ、新たに床面を造っていることが判明した。この下層床面でも直径40cm、深さ30cmの支柱穴が2基確認された。柱間距離は3.2mを測る。

出土遺物

遺物は主に上層の埋土から出土している。231～233は坏身で、受け部に内傾する短い立ち上がりが付く。234は長脚無蓋高坏である。脚部の2方向に細いスカシが空けられている。235も高坏の坏底部から脚部上半の破片であるが、無蓋か有蓋かは明らかでない。234と同じく2方向に細いスカシが空けられている。これらの遺物はTK209型式⁽¹⁾に属し、6世紀末の時期が与えられる。

(2) 古墳時代中期末～後期の溝

S D 202

S D 202は幅約1m、深さ40cmの南北方向の溝である。第139地点のS D 203の北に続く溝である。そのほとんどは後世の遺構や攪乱で切られているため、僅かに検出されたのみである。埋土は灰黄白色砂である。調査区南端付近の溝東肩から完形に近い古墳時代中期後半の土師器甕が出土している。また、第139地点の調査においても完形の須恵器の大甕がこの溝内から出土しており、何らかの祭祀に関わる溝の可能性はある。

236は上記した、溝の東肩から出土した土師器の甕である。球形の体部から外反して広がる口縁部が付く。口縁端部は内側に若干肥厚し、上方に面を持つ。体部外面はハケが、内面はケズリの後にハケが施されている。

(3) 掘立柱建物

S B 202

S B 202は調査区の北西で確認された2間以上×3間以上の総柱の掘立柱建物である。調査区の西に伸びる可能性があるため、全体の規模は明らかでない。北辺の柱穴列は溝を掘つ

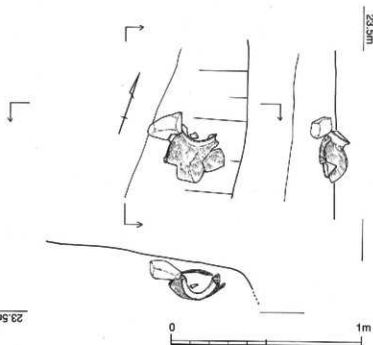


fig.102 SD202遺物出土状況

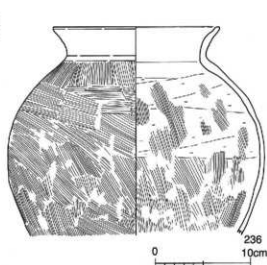


fig.103 SD202出土遺物

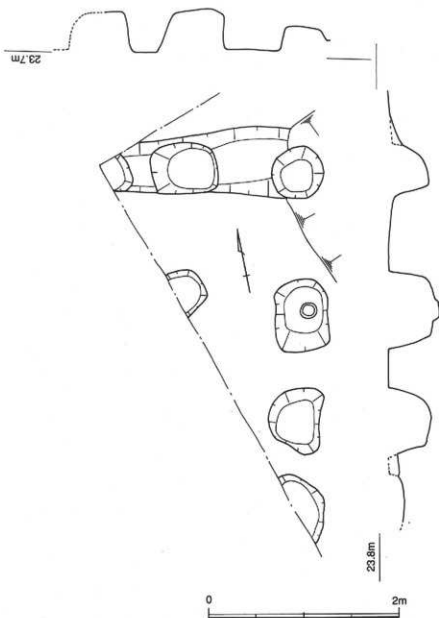


fig.104 SB202

た後に柱穴を掘る布堀状になっている。柱穴掘形の大きさは1辺60～70cm、検出面からの深さは40～50cmであるが東辺の柱列のうち最も南の柱穴掘形は他のものより浅く、深さ20cmである。掘形底の柱の痕跡が残っているものでは、その直径は20cmを測る。柱間距離は東西1.2m、南北1.2～1.5mを測る。建物の南北方向はN11° Eである。柱穴内から出土した遺物は須恵器・土師器の小片のため時期の確定は困難であるが、第139地点や周囲の状況を勘案すれば飛鳥時代の掘立柱建物の可能性が高い。

第6節 第1遺構面の遺構と遺物

第1遺構面は標高23.5～23.6mの暗灰褐色中～粗砂上面で検出された。この遺構面では、飛鳥時代から中世にかけての土坑・溝・柱穴等の遺構が確認された。

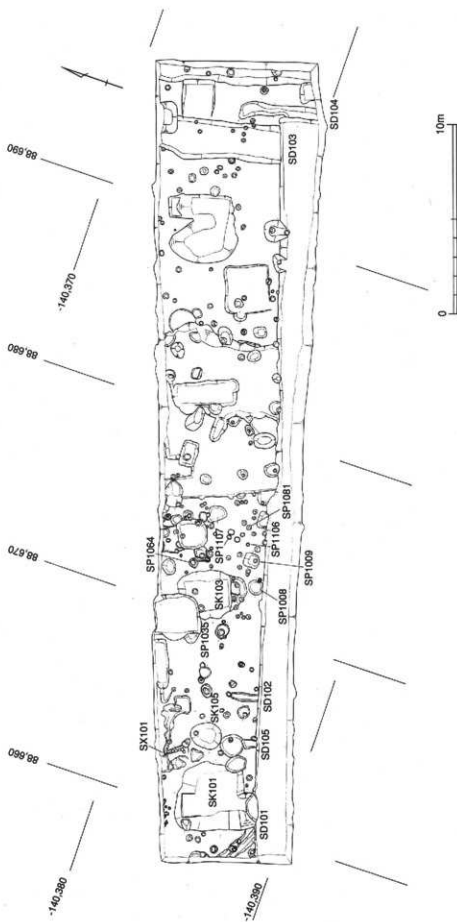


fig.105 第1透視面

(1) 飛鳥時代の柱穴

S P 1009

S P 1009は調査区中央で検出された、1辺70～80cmの大型の方形掘形を持つ柱穴である。検出面からの深さは、40cmを測る。断面では柱痕は確認されなかったが、底面に直径25cmの柱の痕跡があり、柱は抜き取られたものと考えられる。この柱穴と組みとなって掘立柱建物としてまとまる柱穴は確認できなかった。掘形の底から、芦屋廃寺遺跡から出土し、芦屋廃寺の創建瓦と考えられる法隆寺式の忍冬唐草文軒平瓦と同范と考えられる瓦片が出土している。

S P 1064

S P 1064は直径55cmの大型の円形掘形を持つ柱穴である。検出面からの深さは、30cmを測る。柱痕は確認されなかった。検出面では人頭大の石がおかれていたが、この石を外した掘形内には瓦・蛸壺・礫が入っていた。瓦は後述する芦屋廃寺遺跡第62地点で出土している高句麗系の陰刻単弁八弁蓮華文軒丸瓦と同范と考えられる瓦片が含まれる。

この2基の柱穴のほかにも、調査区中央で数基の大型掘形の柱穴が確認されており、この付近に飛鳥時代の掘立柱建物があったものと考えられる。

(2) 飛鳥時代の遺物

237・238はS P 1064出土の遺物である。237は軒丸瓦で、瓦当面の蓮弁の一部と弁間の珠文および周縁部のみの破片である。周縁部は1段低くなっており、蓮弁が陰刻になっている。また、蓮弁間に珠文が置かれている。胎土は砂粒が少なく、白っぽい。焼成も甘くやや軟質である。このような非常に特徴的な持つ瓦として、芦屋廃寺遺跡第62地点で出土した単弁八弁蓮華文軒丸高句麗様式瓦²³⁾があり、諸特徴からこの瓦と同范であると考えられる。芦屋廃寺遺跡出土の瓦を参考にすれば、面径は18.4cmで、単弁八弁蓮華文が陰刻で表現され、蓮弁

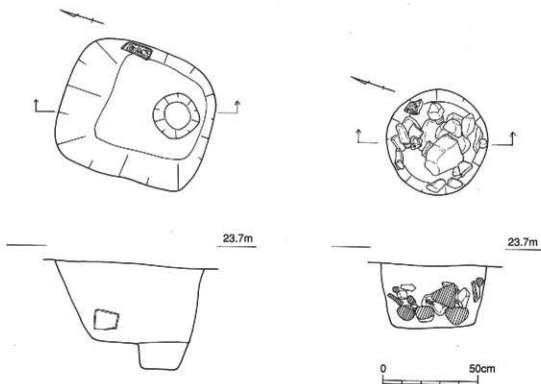


fig.106 飛鳥時代柱穴

の子葉は突線で表現される。また、弁間には2個の珠文が配される。中房の蓮子の配置は1+4で、周縁部は1段低くなる。238は釣鐘形蜻蛉壺の釣手部分である。上記の瓦と一緒に出土した。

239はS P 1009出土の法隆寺式の忍冬唐草文軒平瓦で、瓦当面の左端部分の破片である。額の形態は直線的である。先述した月若遺跡第81地点第1遺構面S D 101出土の忍冬唐草文軒平瓦(180・181)と同様に、芦屋廃寺遺跡第62地点から出土した芦屋廃寺創建時の瓦と考えられているものと同範と思われる。

240はS P 1009の横で検出されたS P 1009と同様に、大型の堀形を持つ柱穴S P 1008から出土した須恵器の坏身である。立ち上がり部は内傾して短く立ち上がる。T K 209型式に属する。

242は調査区東端で検出されたS D 105出土の須恵器坏身である。立ちあがりは非常に短く、受け部端より上に出ない。T K 217型式に属する。

241・243・244は調査区東半の遺物包含層から出土した遺物である。241は須恵器の坏蓋であるが、坏身の可能性もある。243・244は平瓶である。243は丸みを帯びた体部を持ち、口縁部は広い。肩部には1条の沈線が巡らされている。244は243に比して細い口縁部をもつもので、肩部から体部にかけて自然釉が掛る。

調査区東半の遺物包含層からは図化できなかったがこれ以外にも飛鳥時代の土器片が割合多く出土していることから、調査区の北側にこの時期の遺構が存在する可能性がある。

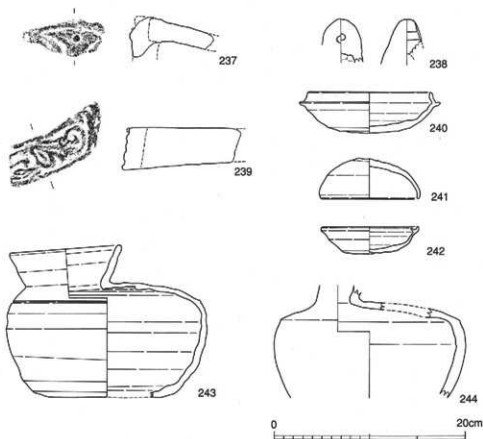


fig.107 飛鳥時代遺物

(3) 中世の遺構と遺物

S K 101

S K 101は調査区の東端で検出された、3.5×3.4m、深さ約90cmの方形の土坑である。底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土のほとんどは灰色砂であるが、埋土中には焼土塊や炭が含まれる。この土坑の最終埋土に2.5×2.5mの範囲で、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、多量の土器類と共に刀子・釘等の鉄製品が投棄されていた。

出土遺物

245～257は土師器の小皿である。口径は9cm前後、器高は1.5cm前後のものである。平らな底部から内湾して立ち上がり口縁部は尖り気味に取める。257は口縁部外面に面取りがなされている。外面の底部から体部下半は手づくねの後ナデで、口縁部直下には1段のヨコナデで調整され、内面の体部はヨコナデで、見込みはナデで調整されている。

258・259は土師器の大皿である。平坦な底部から体部は直線的に広がる。口縁部は尖り気味に取める。外面の口縁部直下には1段のヨコナデが施されている。

260・261は和泉型の瓦器碗である。やや浅い体部に台形の低い高台が付く。体部外面は口縁直下に1段のヨコナデが施され、それ以下については指頭圧痕が顕著である。内面の暗文はまばらで、見込みの暗文は平行線状である。261は全体に焼成があまく、瓦質化が弱い。そのため表面の調整が不明瞭であるとともに、高台も摩滅している。

263・264は白磁碗である。263は高い高台に内湾する体部を持ち、口縁部は若干水平に折れて尖る。264は低い高台に内湾する体部を持ち、口縁部は短く外側に折れる。共に体部外面下部と高台を除いて、乳白色の釉は薄く掛る。

265は同安窯系青磁皿である。窪み底から屈曲して上半が外反する体部となる。見込みには櫛によるジグザグ文が描かれ、底部外面を除いて濃緑色の釉が掛る。

262は青白磁の合子の身である。浅い体部に短い受け部の立ち上がりが付く。内面全体と、下端付近・受け部・底部を除いた外面全体に青白色の釉が薄く掛る。

266・267は東播系須恵器鉢である。266は底部付近から口縁部にかけての破片で、体部は直線的に広がり、口縁部は若干拡張し、体部に直交する面を持つ。回転ナデで整形されている。267は底部片で断面台形の低い輪高台が付く。高台内には糸切り痕が残る。共に内面の使用による摩滅は顕著である。

268・269は土師器の鉢である。268は大きく膨らんだ体部から頸部は屈曲して口縁部に至る。口縁部は垂直に立ち上がり、端部は水平な面を持つ。外面の頸部屈曲直下に強いヨコナデが1段施されている。外面はナデで、内面はハケで調整されている。269はやや膨らんだ体部から頸部は屈曲して口縁部に至る。口縁部は直線的に広がり、端部は若干面を持つ。外面はナデで、内面はハケで調整されている。

270は瓦質の三足釜である。偏球形の体部に口縁部は内傾する面を持つ。外面の口縁部からやや下がった位置に上方を向いた短い鐙が付く。体部の中位から3方に足が貼り付けられている。外面の鐙より上位はヨコナデで整形され、体部には指頭圧痕が残る。

271・272は瓦質の羽釜である。271は偏球形の体部に口縁部は内傾する面を持つ。外面の口縁部からやや下がった位置に水平方向にやや厚い鐙が付く。外面の鐙より上位はヨコナデで整形され、体部には指頭圧痕が残る。内面はハケが施されている。272は大型の羽釜で、丸みを帯びた平らな底部から若干内湾気味であるが直線的な体部に至る。口縁部は大き

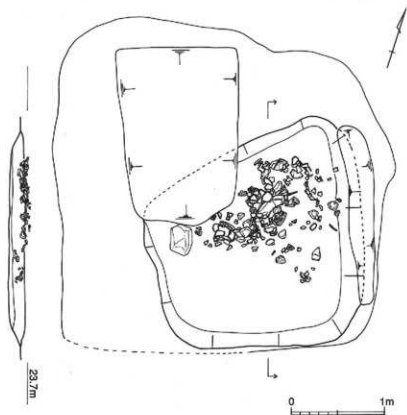


fig.108 SK101遺物出土状況

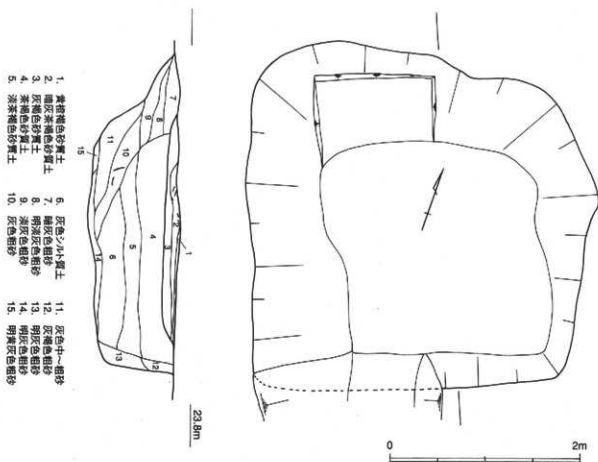


fig.109 SK101

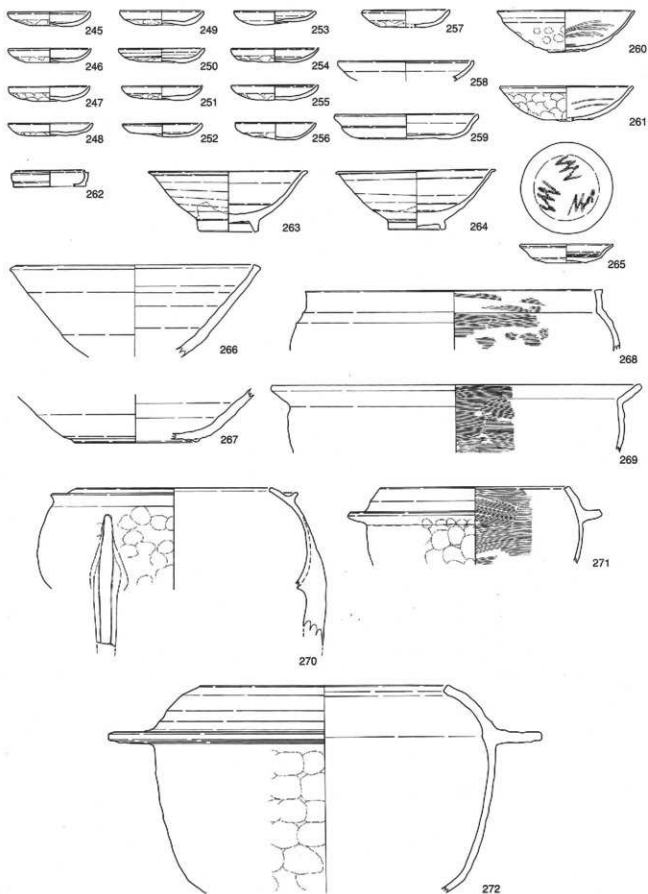


fig.110 SK101出土土器 (1)

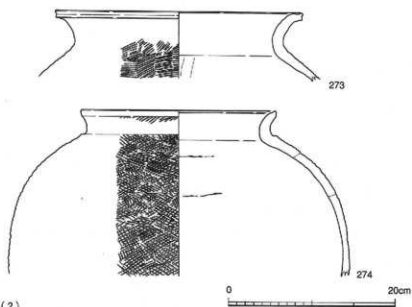


fig.111 SK101出土土器 (2)

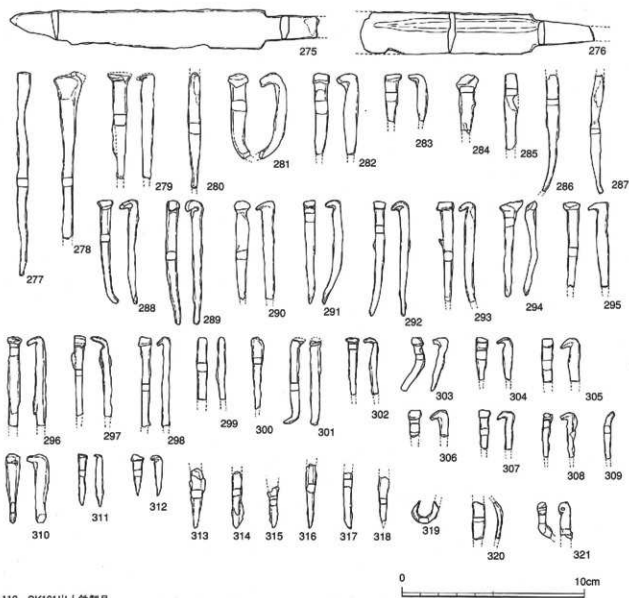


fig.112 SK101出土鉄製品

く内湾して内傾し、端部は内傾する面を持つ。外面の体部と口縁部の境に水平方向に大きな罫が付く。口縁部外面は強いヨコナデで成形され、体部には指頭圧痕が残る。

273・274は須恵器の甕である。273は体部から緩やかに屈曲して外反する口縁部が付く。端面は強いヨコナデが施され、若干摘み上げたようになっている。端部の上面も強いナデによって窪む。体部外面は平行タタキによって成形されている。274は球形の体部から緩やかに屈曲して外反する短い口縁部が付く。口縁端部は外面をナデによって面を作り、若干上方に尖る。体部外面は格子タタキによって成形されている。

以上の土器類から見れば、須恵器鉢のみは古い形態ではあるが、他の土器からこの土坑の時期は12世紀後半に位置づけられる。

275・276は刀子である。275は茎の一部を欠損し残存長17.0cmを測る。刀身は長さ10.5cm、区付近の幅2.1cm、棟部での厚さ4mmを測る。茎の残存する部分では目釘穴は無く、木質も残存しない。276は切先と茎の一部を欠損し残存長12.9cmで、刀身の区付近の幅は2.3cm、棟部での厚さ3mmを測る。刀身の片面にのみ鎬地に、幅8mmの樋がつけられている。茎の残存する部分では目釘穴は無く、木質も残存しない。

277～321は鉄釘である。全て頭端部を薄く打ち延ばし、基部側に端部を折り曲げる頭巻釘と考えられる。断面の形状が正方形に近く厚さ5mm以上の厚みのあるもの(277～283)と、断面の形状が正方形に近く厚さ5mm未満のもの(288～309)、断面の形状が長方形のもの(284～287)、長さが4cm未満と短いもの(310～312)に大きく分類できる。先端部のみの破片では木質が残存するものが見られる。

320・321は不明鉄製品である。320は厚さ2.5mm、幅7mmで断面の形状が長方形を呈するものである。なんらかの基部の可能性がある。321は端部が環状に曲げられて直径2mmの孔が開いている。何らかの金具の一部と思われるが、頭巻釘の可能性もある。

S K 103

S K 103は調査区の中央で検出された2.5×2.8m、深さ75cmの方形の土坑である。底部は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は大きく2層に分けられ、その上層には土師器・須恵器の土器類の他に、焼土・炭と共に建物ないしは何等かの構造物の壁材と考えられる植物繊維を混入した土塊が大量に入っていた(写真図版75右下)。底面には人頭大以下の礫が数個囲むように置かれていた。

322～329は土師器の小皿である。口径9cm前後、器高1.5cm前後のものが多い。平らな底部から内湾して立ち上がり口縁端部は尖り気味に収める。口縁端部外面に強いナデによる面取りがなされているものもある。外面の底部から体部下半は手づくねの後、ナデで、口縁端部直下には1段のヨコナデで調整されている。

330～332はコースター形の土師器小皿である。円盤状の底部から口縁部は内側に短く折り曲げる。外面のヨコナデは折り曲げられている口縁部上面にのみ施されている。

333・334は土師器の大皿である。平坦な底部から内湾して立ち上がる体部を持つ。口縁部外面をナデ、端部は尖り気味である。体部外面の調整は、下半には指頭圧痕が残り、上半の端部下には1段のヨコナデが施されている。

335・336は和泉型瓦器碗である。335はやや浅い体部に断面台形の低い高台が付く。体部外面は口縁直下に1段のヨコナデが施され、それ以下については指頭圧痕が顕著である。内

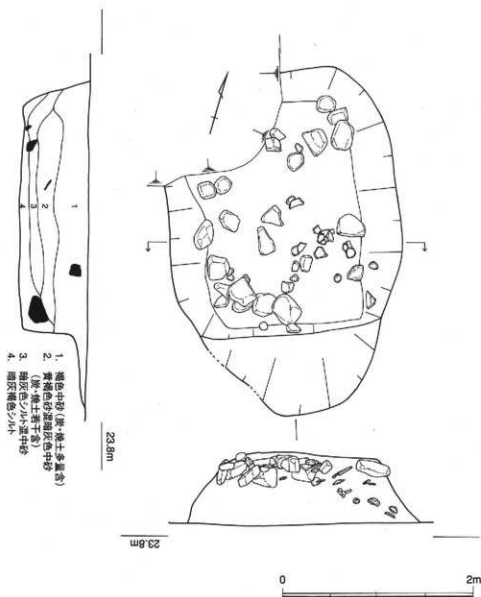


fig.113 SK103

面の暗文はまばらで、見込みの暗文は平行線状である。336は還元焼成されていない瓦器碗の素地で、土師器と同色の淡黄橙色を呈す。外面の調整は335と同様であるが、内面はヨコナデで仕上げられ、暗文は施されていない。

337～340は白磁碗である。337・338は口縁端部に大きい玉縁を有し、底部は低く幅の広い高台が削り出されている。内面下半には1条の沈線状の段をもつ。内面全体と外面中位より上には灰白色の釉が掛る。339・340は細く直立した高台を有するものである。内湾する体部に、口縁端部は外水平方向に尖る。灰白色の釉は外面の体部下半の高台付近まで掛る。図示した他に、白磁皿、同安系青磁碗の破片が出土している（写真図版74左下）。

341～343は東播系須恵器の鉢である。片口部は欠損するが、片口を有する鉢と考えられる。体部は直線的に広がり、口縁端部は内面を強くナデで上方に摘み上げ、外面には垂直の面を持つ。体部は回転ナデで整形されている。内面の下半は使用による摩滅が顕著である。342は底部に断面台形の低い輪高台が付く。

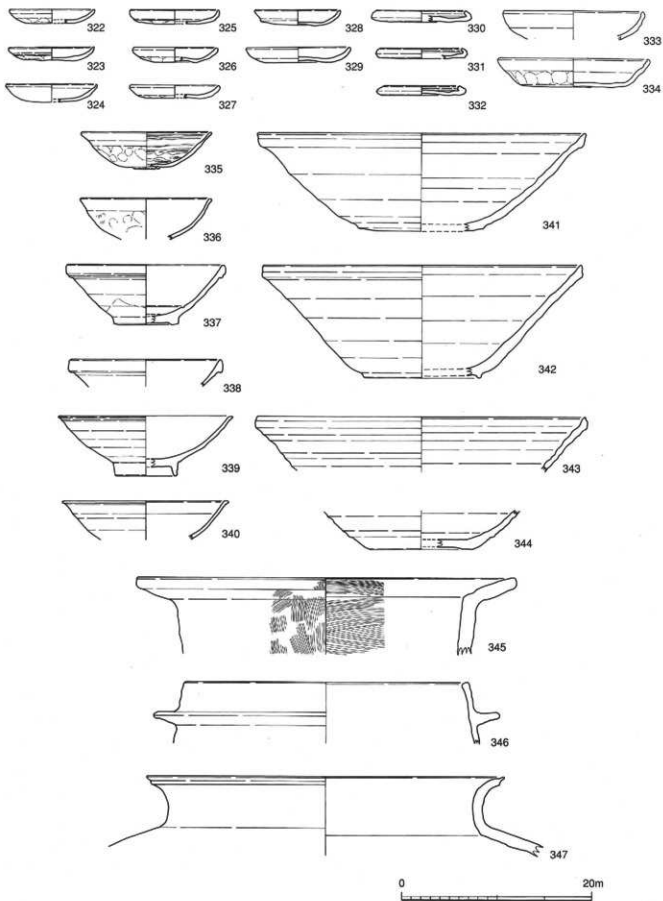


fig.114 SK103出土土器

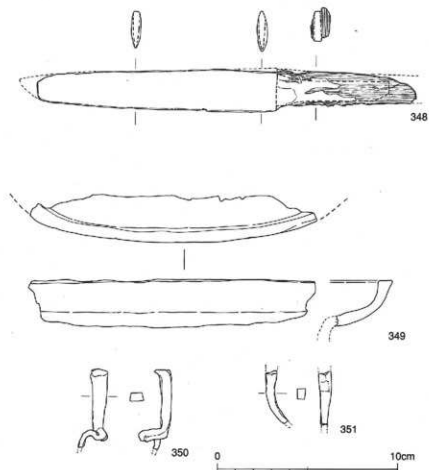


fig.115 SK103出土鉄製品

345は土師器の鍋である。器壁の厚い直立する体部上半から、頸部は屈曲して水平に近い斜め上方に開く口縁部が付く。体部内外面はハケで調整されており、口縁部内面はハケ、外面はヨコナデで調整されている。外面全体と内面の一部にススが付着している。

346は土師器の羽釜である。やや内傾して立ち上がる口縁部を持ち、外面に水平に伸びる鈎が付く。内外面はヨコナデで調整されている。また外面の一部にススが付着している。

347は渥美窯産の甕である。肩の張った体部から外反する口縁部が付く。口縁端部は端部内外面を強いナデによって水平方向に引き出されて尖る。端部上面は浅く窪む。口縁部・体部共に内外面はヨコナデで仕上げられている。色調は黄橙色を呈する。

写真図版75左下は滑石製の石鍋片である。底部と体部片が出土している。体部片の外面にはケズリの痕跡が残る、一部ススが付着している。写真最上段の破片は3側面と内面が研磨されており、内面全体と側面および外面の一部が焼成を受けて黒色化している。温石として再利用されたものと思われる。

以上の土器類から、SK103は12世紀後半の土坑と考えられる。

348は刀子である。切先と茎の一部を欠損する。残存長21.1cm、刀身長13.2cm、区付近の幅2.2cm、棟部での厚さ4mmを測る。茎に目釘穴は無く、柄の木質が残存する。

349は鉄鍋の口縁部である。体部から屈曲して水平に広がり、内湾して口縁部上半は直立する。口縁端部は水平な面を持ち、若干内外に拡張する。直径30～40cmと考えられる。

350は頭巻釘である。断面は 7×5 mmの長方形を呈する。先端は打ち込みの際に大きく曲がっている。351は断面が 5×4 mmの正方形に近い形状を呈する角釘である。

S K 105

S K 105は長径1.7m、短径1.4m、深さ35cmを測り、平面は卵形を呈する土坑である。土坑内からは瓦器碗3点と土師器小皿片、土師器甕片が出土した。埋土の底には灰色粘土が約8 cm 堆積しており、当初、土坑内には水が溜まっていたものと考えられる。

352～354は和泉型の瓦器碗である。若干内湾する浅い体部を持ち、器高は3 cm 程度である。内面には見込みから体部上半まで螺旋状に暗文が施されている。見込みの暗文は平行線状である。352・353には退化した断面が半円形の高台が付き、354は高台がない。外面は口縁端部下に1段のヨコナデが施され、体部下半は指頭圧痕が残る。焼成は甘く、瓦質化せず淡橙色を呈する部分もある。以上の瓦器碗は13世紀後半に位置づけられる。

S X 101

S X 101は調査区の東半で検出された配石遺構である。北辺と西辺は後世の擾乱により削られ、全体の形状は明らかでないが、長方形ないしは方形を呈する遺構と考えられる。残存する範囲は、南北2.3m、東西1.3mを測る。底面の平坦な深さ約10cmの浅い窪みの底の縁辺に沿って、逆L字形に扁平な花崗岩を配列したものが6石残存する。石材は長軸が $20 \sim 30$ cm 前後、厚さ $10 \sim 15$ cm 程度の長方体ないしは不定形を呈し、石の長側面を石列の内側で直線的に揃えて配列している。遺物は出土せず、遺構の性格や時期は明らかでないが、12～13世紀の遺構と考えられる。

調査区中央付近では、多くの柱穴が検出された。その多くは中世の柱穴と考えられるが、掘立柱建物の柱穴としてまとまるものは確認できなかった。これらの柱穴には直径50cm以上の大型のものと、直径25cm以下の小型のものがある。小型のものでも深さ30cm以上の深

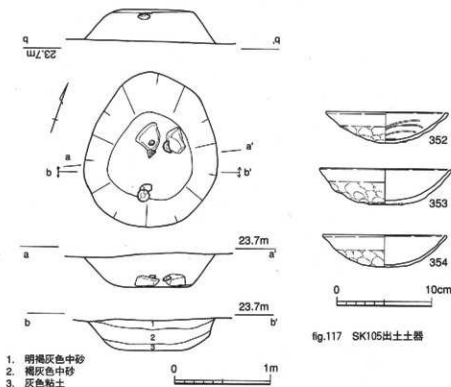


fig.116 SK105

fig.117 SK105出土土器

いものも多数存在した。小型のものには、埋土に炭が多数混じるものが多い。

355は東播系須恵器の椀である。平らな底部から内湾する体部が付き、膨らんで丸みを帯びた口縁端部に至る。内面の見込みは望まない。内外面はロクロナデで成形され、底部の切り離しは糸切りである。12世紀中葉から後半に位置づけられる。

356・361は瓦器小皿である。356はやや丸みを帯びた底部から外方に広がる口縁部を持つ。口縁外面に1段ナデが施され、口縁部は外反する。361は丸みを帯びた底部から内湾して立ち上がる口縁部となる。口縁外面には1段ナデが施されている。

357～360・362～365は土師器の小皿である。口径9cm前後、器高1.5cm前後のものである。平らな底部から内湾して立ち上がり口縁端部は尖り気味に収める。外面の底部から体部下半は手づくねの後、ナデで、口縁端部直下には1段のヨコナデで調整されている。

366は調査区中央の遺物包含層出土の輪羽口である。残存長13.5cm、最大外径7.4cm、最大内径2.6cmを測る。基部側現存端から1～2cmの位置の外周に、浅い凹部がある。この凹部より先は、表面が焼けて還元しており、炉内の部分と考えられる。よってこの凹部は炉壁との接合部分と考えられ、凹部を垂直にすると、約15°の傾斜で下がっていたものと思われる。先端は黒色のガラス質化し、先端の上部には鉾澤が付着している。

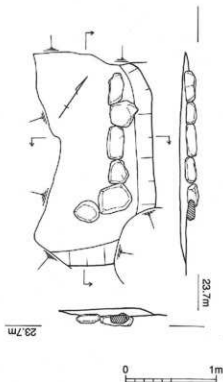


fig.118 SX101

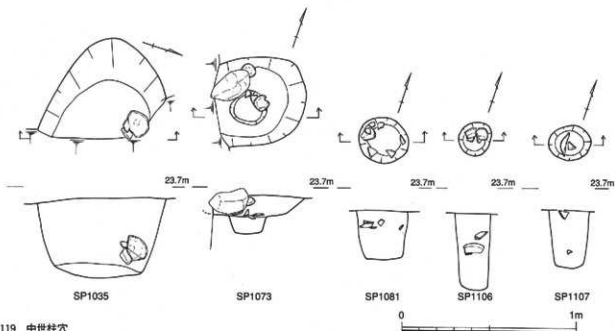


fig.119 中世柱穴

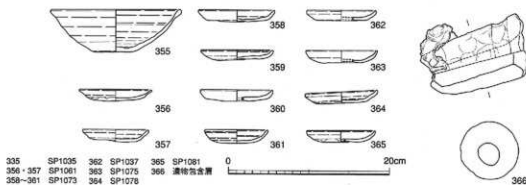


fig.120 中世柱穴出土遺物

第7節 小 結

今回の調査では第139地点と同様に5面の遺構面が確認された。

第5遺構面

第5遺構面では、縄文時代晩期中葉の遺構が確認された。遺構や土器等の出土遺物は少ないが、縄文時代晩期中葉の篠原式の縄文土器が出土している。調査区南の第139地点や西の第120地点においても、同様の遺物が出土していることから、周辺にこの時期の生活面が広がっていることが改めて確認された。

第4遺構面

第4遺構面は弥生時代中期前葉の遺構面であるが、遺構は散漫で、遺物の出土量も少ないことから、今回の調査地付近が、この時期の集落の周縁部にあたると考えられる。

第3遺構面

第3遺構面では弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器を大量に含む溝（S D301）が確認された。この時期、寺田・月若遺跡においては集落が拡大することがわかっており、集落内を流れる溝の機能を考える資料となる。

第2遺構面

第2遺構面では古墳時代後期後半の堅穴住居が確認された。同時期の住居址は第139地点でもみつかり、この時期の集落構成を考えるうえで重要である。また飛鳥時代の掘立柱建物も確認された。

第1遺構面

第1遺構面では飛鳥時代的大型掘形を持つ柱穴が確認された。柱穴の中には芦屋廃寺で出土している高句麗系軒丸瓦が入ったものや、法隆寺系均正忍冬唐草文軒平瓦が入っていたものがあつた。建物としての復元はできていないがこの付近に芦屋廃寺ないしは官衙に関連する建物が存在した可能性が高い。

また鎌倉から室町時代にかけての遺構では、鍛冶に関連すると思われる遺構が確認された。これまでの調査でも鉾澤などが見つかり、中世においてこの付近で鍛冶がおこなわれていたと推定される。

(註)

- (1) 田辺昭三『須恵邑古窯址群』1平安学考古クラブ1966 以下須恵器の型式は同書による。
- (2) 芦屋市教育委員会「古代瓦説明資料 芦屋廃寺と月若・寺田遺跡から出土した法隆寺式軒丸・軒平瓦と高句麗式瓦」2005
芦屋廃寺出土瓦については芦屋市教育委員会森岡秀人氏・竹村忠洋氏にご教示いただいた。

(参考文献)

- 中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社1995
尾上実『南河内の瓦器概観』『古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会1983
横田賢次郎・森田勉『大宰府出土の輸入中国陶磁器について』『九州歴史資料館論集』4九州歴史資料館1978
五十川伸矢『古代・中世の鉄器遺物』『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集国立歴史民俗博物館1992
古代の土器研究会編『古代の土器 3 古代の土器集成Ⅲ』古代の土器研究会1994

第6章 寺田遺跡 第178地点の調査

第1節 調査の概要

(1) 調査の方法

寺田遺跡第178地点は、芦屋川右岸の緩やかに南に向かって傾斜する扇状地上に立地し、現地表面では標高24m前後に位置する。平成12・13年度に調査を行った寺田遺跡第132地点の北側、平成15年度に実施した寺田遺跡第160地点の東側の隣接地にあたる。また、道路を挟んだ東側は平成12年度に調査を実施した寺田遺跡第127地点である。

第132・160地点の調査結果により、現地表下60～100cmまでは近世から現代までの耕作土ならびに盛土層であるため、この層までを重機で掘削し、以下の層については人力によって掘削を行った。そして遺構面ごとに、遺構検出、遺構掘削をおこない、図面作成・写真撮影・クレーンによる空中写真撮影等の記録を作成し、順次掘り下げていった。

但し、南に隣接する第132地点とは南北に傾斜する地形のため若干遺構面の差異がある。また第132地点調査時においては、第178地点の第4遺構面のベースとなる淡黄褐色細～粗砂層の下層に存在する暗灰褐色粗砂混じり砂質土を第4遺構面として調査しているが、今回の調査では淡黄褐色細～粗砂層中では遺物は確認されず、第132地点第4遺構面の「遺構」も自然地形であることから、今回は調査をおこなっていない。

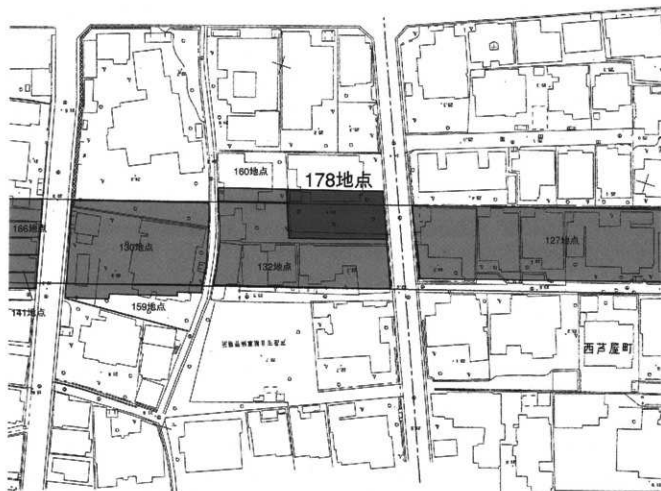


fig.121 寺田遺跡第178地点調査区位置 (S=1/1000)

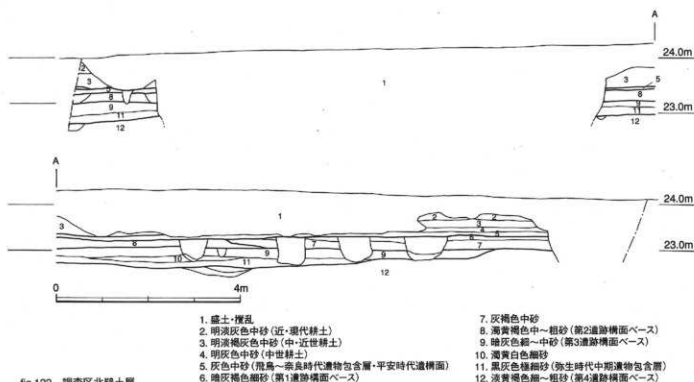


fig.122 調査区北壁土層

(2) 基本層序

調査区内の基本層序は、現地表面から下に、近現代盛土層・明淡灰色中砂（近・現代耕作土）・明淡褐色灰色中砂（中世後期～近世耕作土）・明灰色中砂（中世前期耕作土）・灰色中砂（平安時代遺構面ベース・飛鳥～奈良時代遺物包含層）・暗灰褐色細砂（第1遺構面ベース・古墳時代遺物包含層）・灰褐色中砂（古墳時代遺物包含層）・黄褐色中～粗砂（第2遺構面ベース・弥生時代後期遺物包含層）・暗灰色中～粗砂（第3遺構面ベース・弥生時代中期遺物包含層）・黒灰色極細砂（弥生時代中期遺物包含層）・淡黄褐色細～粗砂（第4遺構面ベース）・暗灰褐色粗砂混じり砂質土（第132地点・第160地点調査時における第4遺構面）となる。

但し、調査区は扇状地形のため北から南に向かって傾斜しており、また西の旧東川に向かって若干下がつているため、各層や遺構面の欠落する箇所も存在し、複数の遺構面が同一面で検出される場合がある。特に調査区の北西コーナーが最も高いため、この付近ではその傾向が顕著である。

第2節 第4遺構面の遺構と遺物

第4遺構面は、標高22.3～22.8mの淡黄褐色細～粗砂層上面で検出された。遺構面は若干南西に向かって傾斜している。この遺構面では、土坑12基、落ち込み3基、溝5条、ビット約10基が確認された。弥生時代中期の遺構面であり、寺田遺跡第132地点および第160地点における第3遺構面に相当する。

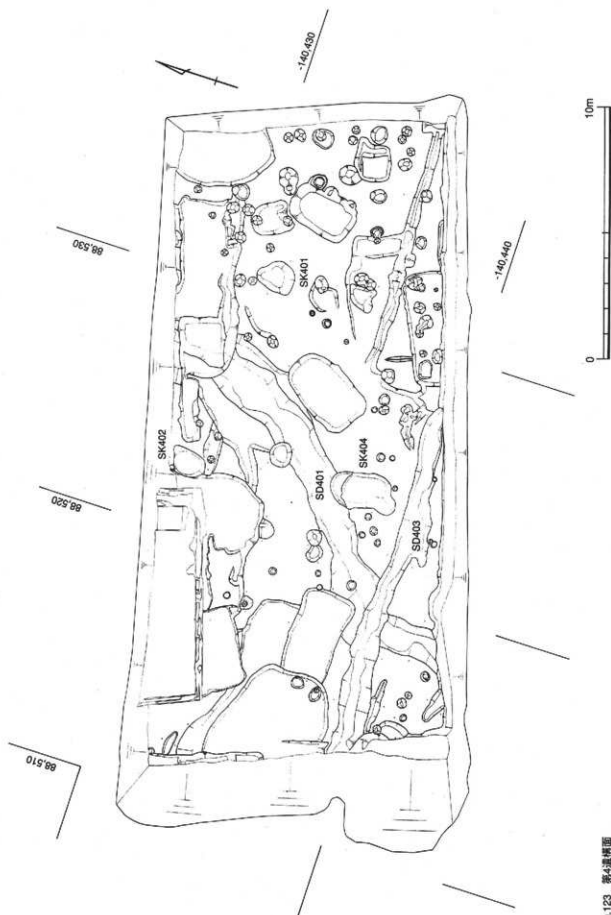


fig.123 第4遺構面

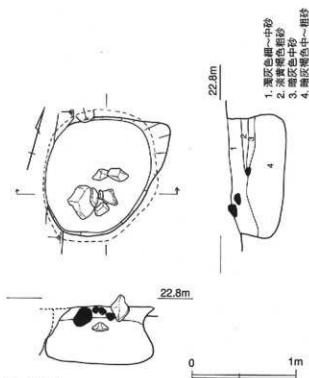


fig.124 SK404

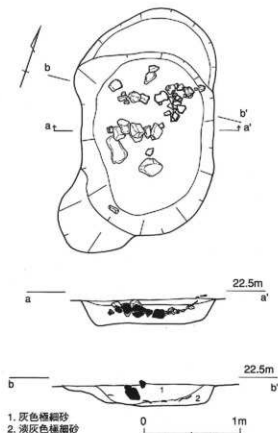


fig.125 SK402

(1) 土坑

土坑は12基が確認されたが、そのほとんどが調査区中央から西半にかけて検出された。大半のものは、直径1.0m以下、深さ20cm以下で、すり鉢形を呈する小型のものである。

S K 402

S K 402は調査区中央の北端で確認された土坑で、直径1.1m、深さ60cmを測る円形の土坑である。断面の形状は、底面が平坦で、壁面が直立したほぼ円筒形を呈するが、土坑壁は上半がオーバーハングする、いわゆる袋状を呈している。埋土の上層に人頭大から拳大の礫が数個置かれていた。土坑内からは、弥生土器の小片しか出土せず、所属時期は確定できないが、周辺の状況から弥生時代中期初頭の畿内第Ⅱ様式に属すると思われる。

土坑の大きさ、形状などから、貯蔵穴と考えられる。同様の袋状を呈する貯蔵穴は、寺田遺跡第142地点で弥生時代前期から中期初頭のものが確認されている。

S K 404

S K 404は長径2.4m、短径1.4m、深さ30mの変形した楕円形を呈する土坑である。断面の形状は底面が平坦な逆台形を呈する。土坑の北の部分は検出面から浅く平坦な部分があり、南東には内側に向かって傾斜した突出部分がある。土坑内からは、拳大から人頭大の礫と共に、甕などの弥生後期の土器と砥石が出土した。

367・368はS K 404出土の甕である。底部は窪み底で、膨らんだ体部を持つ。367は体部最大径が口縁部径をしのぎ、屈曲してわずかに外反する口縁部が付く。体部外面は縦方向ないしは斜め方向にヘラミガキが施され体部内面にはハケが施されている。368は体部最大径より若干口縁部径が大きい。如意形の口縁が付く。体部外面には下から上方向に丁寧な板ナデが施されている。

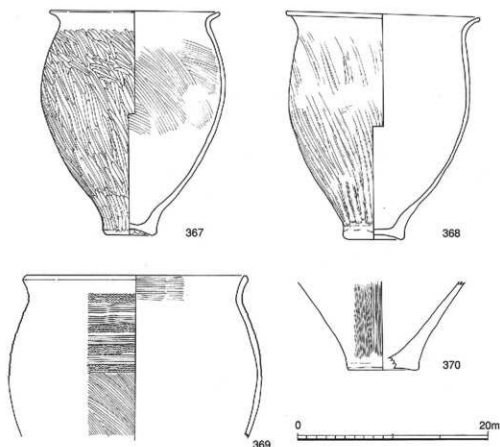


fig.126 第4遺構面出土土器

(2) 溝

S D 401 S D 401は北東から南西方向に流れる溝である。断面が緩やかなU字形を呈する。埋土は礫泥じりの細砂から粗砂層で、自然の流路の可能性が高い。埋土内からは少量の弥生土器片が出土したのみである。

S D 403 S D 403は調査区の南西部で検出された、西から東に流れる溝である。幅1.2m、深さ20～30cmを測る。埋土は黄褐色礫泥じり粗砂～中砂である。上記のS D 401を切っており、第132地点のS D 301、第160地点第3遺構面小河道と同じ溝である。埋土内からは弥生土器の小片しか出土しておらず時期の確定は難しいが、第132地点S D 301からは弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）の鉢が出土していることからこの時期に属する溝と考えられる。

(3) 遺物包含層出土の遺物

369・370は弥生時代中期の遺物包含層である黒灰色細砂層出土の土器である。369は甕の体部から口縁部の破片で、膨らんだ体部から如意形の口縁部が付く。口縁端部は面を持つ。体部上半には5条1単位の間隔状工具によって上から波状文・直線文・直線文・波状文・直線文・波状文・直線文・波状文の順に文様が施されている。波状文は回転速度の遅いものである。体部下半には斜め方向のハケが施されている。370は甕の底部である。外面に縦方向のハケが施されている。胎土は369と類似しており、369と同様の上半部が付くものと思われる。

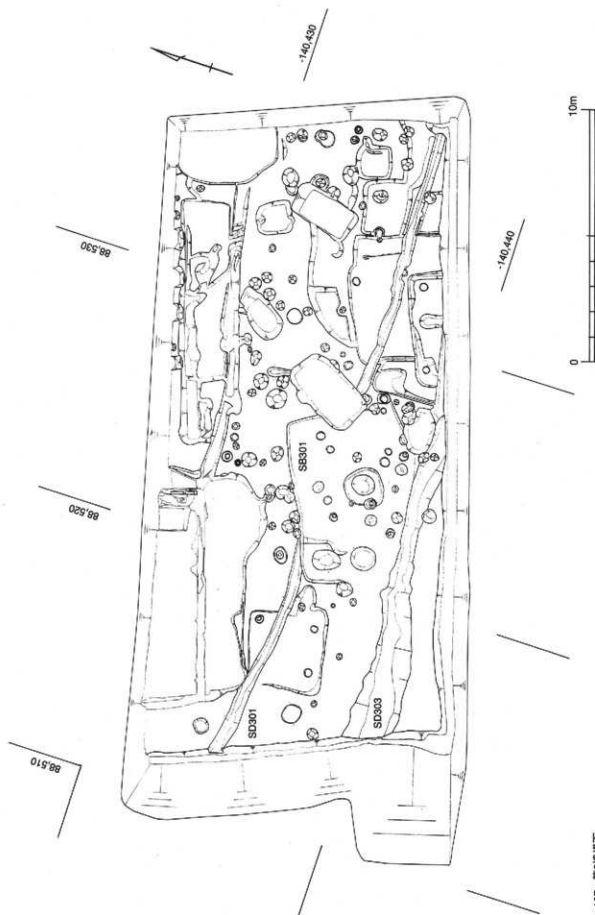


fig.127 第3遺構面

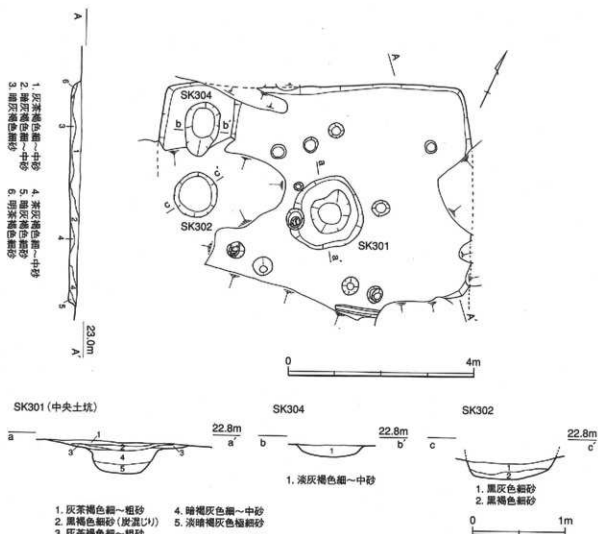


fig.128 SB301

第3節 第3遺構面の遺構と遺物

第3遺構面は標高22.8～23.0mで検出され、竪穴住居1棟、土坑2基・溝3条・柱穴等が確認された。寺田遺跡第132地点の第2遺構面のほとんど、第3遺構面の一部に相当する遺構面である。出土遺物から、弥生時代後期後半から末にかけての遺構面である。

(1) 竪穴住居

S B301

S B301は東西6.5m×南北4.5m以上の方形ないしは長方形の竪穴住居である。この住居址が確認された第3遺構面は南に向かって緩やかに傾斜しており、この住居址が廃絶されたのちに地表面が流出したと考えられ、住居址の南辺は残存せず、また西辺と東辺の一部も残存しない。西辺には幅1.5mのベッド状遺構が存在するが、北辺と東辺には存在しない。南辺については消失しているため明らかではない。

住居のほぼ中央には、直径0.8m、深さ35cmのですり鉢形を呈する円形の中央土坑(SK301)が存在する。この中央土坑の周囲には直径1.5mの範囲で住居址の床面から1段約5cm掘り下げた部分がある。中央土坑内の埋土の最上層には炭の混じる層が存在した。

住居の北西コーナー付近のベッド状遺構上には長径1.2m、短径0.7m、深さ22cmの楕円形の土坑(SK304)とその南に直径1.0m、深さ35cmの土坑(SK302)が存在する。これら

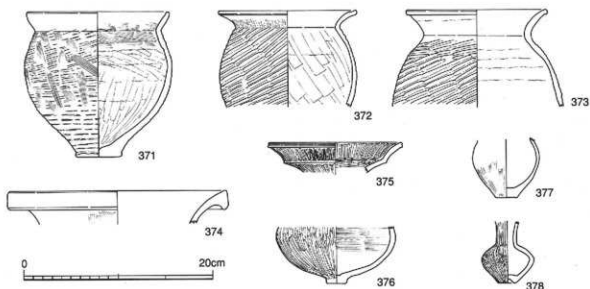


fig.129 SB301出土土器

の土坑はいずれも屋内貯蔵穴と思われる。

371～373は甕である。371・372は口径が15cm以下、器高20cm以下の小型の甕である。371は若干突出した底部に、大きく膨らんだ体部を持つ。頸部は屈曲し、やや内湾気味の口縁部が付く。口縁端部は丸く収める。体部外面の上半にはタタキの後、ハケが施され、内面の頸部付近は横方向のハケで、体部中位以下は板ナデで調整されている。372は丸みを帯びた体部から頸部は屈曲し、外反する口縁部が付く。口縁端部は面を持つ。口縁部外面は縦方向のハケの後、ヨコナデが施されている。体部外面はタタキが、内面は板ナデが施されている。373は口径15cm前後、器高25cm前後の中型の甕である。丸みを帯びた体部から頸部は屈曲し、外反するやや長めの口縁部に至る。口縁端部には面を持つ。体部外面はタタキが、内面には板ナデが施されている。

374は広口壺である。外反する口縁部に、端部下に粘土を貼り付けて垂下させている。口縁部外面はハケが施されている。胎土には角セン石が含まれ、河内地方からの搬入土器と考えられる。375は小型の二重口縁壺の口縁部である。外反して水平近くまで開く1次口縁部に外反して開く2次口縁部が付く。口縁端部には面をもち、その端面には擬凹線が施されている。内外面には細かいヘラミガキが施されている。376は壺の底部から体部の破片である。小さく突出した底部に扁球形の体部を持つ。体部外面には細かいヘラミガキが施されている。375・376は共に非常に丁寧な作りであり、胎土も類似していることから、同一個体の可能性がある。

377・378はミニチュア土器である。377は甕のミニチュアで、体部から頸部である。口縁部は欠損するが頸部の屈曲が残存する。手づくねで成形され、外面にはハケが施されている。378は細頸壺のミニチュアである。口縁端部は欠損するが、それ以外はほぼ完形である。底部は窪み底になっており、体部は算盤玉形を呈す。口縁部は上半部で外反する。手づくねで成形されているが、外面は全体にヘラミガキが施されている。

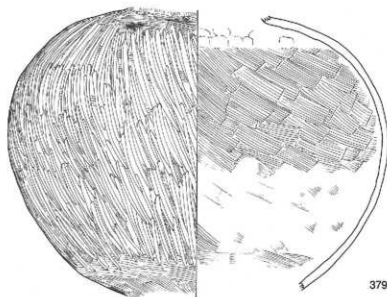


fig.130 SD301出土土器



(2) 溝

S D 301 S D 301は北西から南東方向に走る、幅0.4m、深さ25cmを測り、断面の形状が方形の溝である。埋土は粗砂が中心で、遺物はほとんど出土しなかった。

S D 303 S D 303はS D 301の南側でS D 301にほぼ並行して北西から南西方向に走る溝である。断面は緩やかなU字形の形状を呈し、埋土は細砂～粗砂が中心であることから、自然の流路の可能性が高い。第4遺構面で検出されたS D 403のほぼ同位置の上層にあり、同方向に流れる溝であることから、S D 403の埋没後に同位置に流れたものと考えられる。最終埋土である粗砂層は、この溝を埋める土のみならず調査区内の第3遺構面南西部全体を覆っており、この土が第2遺構面のベースとなっている。

379は第2遺構面検出中に第2遺構面のベースである黄褐色粗砂から出土した土器である。調査時は第2遺構面に属する遺物として取り上げたが、出土位置はS D 301の直上にあたり、層位的にはS D 301の最終埋土から出土したものと考えられる。

頭部より上位と底部は欠損するが、扁球形の体部を持つ広口壺と考えられる。体部外面は粗いハケの後、細かいハケで調整され、その後に縦ないし斜め方向に細かいミガキが施されている。内面はハケで調整されている。

第4節 第2遺構面の遺構と遺物

第2遺構面は標高22.9～23.1m付近の、黄褐色中～粗砂上面で検出され、遺構面は南西に向かって若干下がっている。竪穴住居8棟・掘立柱建物1棟・土坑4基・溝2条・柱穴多数、自然の落ち込み・不明土坑3基等が確認された。この面で検出された遺構は古墳時代中期から後期にかけてのものが中心である。第132地点・第160地点における第1遺構面に相当する遺構面である。

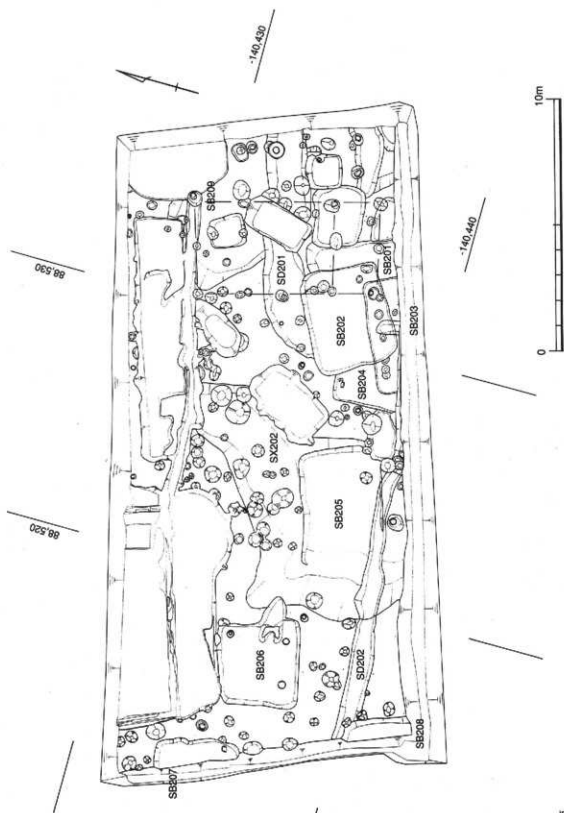


fig. 131 第2遺構面

(1) 竪穴住居

S B 201・S B 202・S B 203・S B 204は調査区東半で検出された方形の竪穴住居である。以上4棟の竪穴住居は互いに重複しており、またS B 201・S B 203・S B 204の南辺にあたる部分は、今回の調査区外の第132地点調査区側に伸びるが、第132地点では耕作に伴うと考えられる段差のため第2遺構面が削平されていたため、これらの竪穴住居が検出されていない。そのため全体の規模は明らかなものは少ない。

S B 201

S B 201は東西1.6m以上、南北3.5m以上、検出面からの深さ20cmを測る、方形の竪穴住居である。西側の大半がS B 202・S B 203と重複しており、北東コーナー付近から東辺付近のみが検出された。北東コーナー付近には浅い土坑が存在し、その土坑付近には床面に貼りついた状態で黄色粘土が確認された。主柱穴は確認されず、周壁溝も残存部分では確認されなかった。

380は上記の粘土付近から出土した土師器の高坏である。脚部は欠損する。平坦な坏底部の擬口縁端上に、外反する長い口縁部が付く。口縁は細まりながら、端部は丸く収める。坏部外面はヨコナデが施され、口縁部内面は横方向のハケの後にナデで、坏底部内面はナデで調整されている。

S B 202

S B 202は東西4.0m、南北3.3m、検出面からの深さ20cmを測る、長方形の竪穴住居である。東側のS B 201と西側のS B 204を切っているが、南側でS B 203に切られている。北東コーナー付近に直径80cmの浅い柱穴が存在するが、他に柱穴が見られず、主柱穴であるのかは明らかでない。西辺の一部には周壁溝が存在する。床面の北東部にやや焼けた粘土と長さ約25cmの方柱状の石を立てたものが検出された。竈の支柱石状を呈しており、周囲も若干焼けているようであるが、造り付けの竈は存在しなかった。しかし、何らかの煮炊設備かその痕跡の可能性がある。

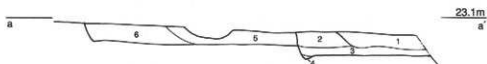
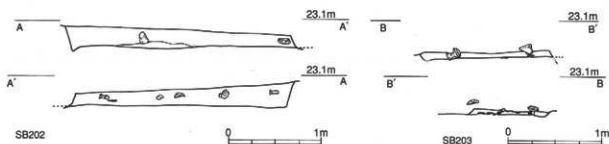
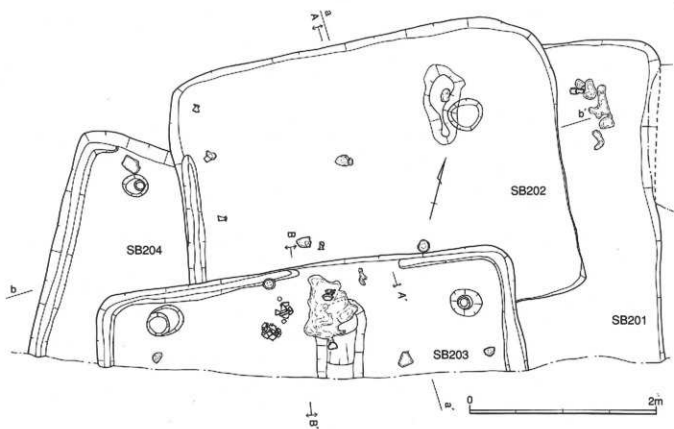
381はS B 202内の南半床面から出土した土師器の椀である。外面が若干窪んだ平坦な底部に内湾する体部を持つ。口縁端部はやや尖り気味である。全体は手づくねで成形されているが、外面の調整は表面が剥離しているため明らかでない。

この他、図示できなかったが土師器の脚部と甕の体部片が数個体、床面から出土しており、埋土内からはT K 23型式～T K 47型式の須恵器坏身・坏蓋が出土している。

S B 203

S B 203は東西4.6m、南北1.5m以上、検出面からの深さ2.5mを測る、方形の竪穴住居である。S B 201・S B 202・S B 204のいずれも切っており、この4棟の竪穴住居のなかでは最後に造られたものである。

主柱穴はコーナー付近に2基確認され、4本柱と考えられる。柱穴の直径は30～40cm、深さ約20cmを測る。周壁溝は残存する東・西・北壁際に存在するが、北周壁溝は中央のやや東に寄った部分で途切れている。この周壁溝の途切れた部分に対応するように北壁に直交する、南北方向に長い土坑が存在する。この土坑は北端部分で深くなっている。この土坑の上と、その付近の床面には焼土と炭の混じった黄白色の粘土が見られた。またこの土坑のすぐ東側では砥石が、西側では土師器の甕の体部片が床面から出土した。この竪穴住居には造り付けの竈は存在しないが、この土坑と粘土は、S B 202と同様に何らかの煮炊設備かその痕跡の可能性がある。



- | | | |
|------------|------------|------------|
| 1. 暗褐色細～中砂 | 4. 褐灰色細～中砂 | 7. 暗灰色細～中砂 |
| 2. 暗褐色細～中砂 | 5. 暗灰色細砂 | 8. 暗褐色細～粗砂 |
| 3. 暗褐色細～中砂 | 6. 暗褐色細～中砂 | 9. 暗灰色細～中砂 |

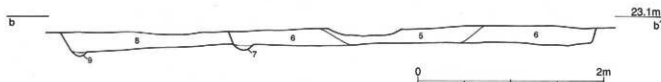


fig.132 SB201・SB202・SB203・SB204

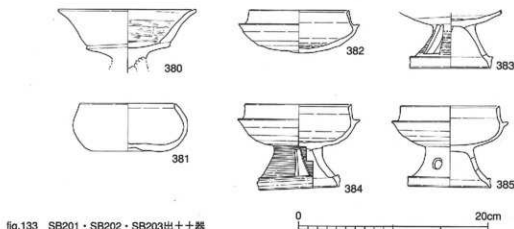


fig.133 SB201・SB202・SB203出土土器

382～385はS B203床面から出土した須恵器である。382は坏身で、立ち上がりはやや内傾し、口縁端部は内傾して若干窪む。受け部は直線的に外方に伸び鋭い。外面の回転ヘラケズリは全体の約1/2強、施されている。383～385は有蓋高坏で、立ち上がりはやや内傾気味に立ち上がる。口縁端部は内傾してやや窪む。坏部底部外面の回転ヘラケズリは全体の約1/2強、施されている。383・384の脚部外面にはカキメが施され、3方に長方形のスカシが穿たれている。385の脚部外面は回転ナデで、3方に円形のスカシが穿たれている。TK23型式～TK47型式に属するものである。

S B204

S B204は東西1.8m以上、南北2.6m以上、検出面からの深さ20cmを測る、方形の竪穴住居である。東側はS B202とS B203に切られており、北西コーナーから西辺の一部が検出されたのみである。北西コーナー付近に、直径30cm、深さ20cmを測る柱穴が存在することから、主柱穴は4本柱と考えられる。この柱穴の横からは台石が出土した。西壁際には周壁溝が存在する。出土遺物としては埋土内から、古墳時代の須恵器、土師器の小片が出土したのみである。

以上の4棟の竪穴住居は、その切り合い関係から、S B201・S B204→S B202→S B203の順に造られたものであると見られるが、出土遺物からは、いずれも5世紀後半に属する時期のものと考えられる。

S B205

S B205は調査区中央で検出された、東西4.5m、南北3.2m、検出面からの深さ25cmを測る長方形の竪穴住居である。この住居址は廃絶後に形成された、自然の浅い谷状地形(S X202)によって削られており、西壁の大部分は残存しない。主柱は北西コーナー付近では柱穴が確認されなかったが、その他のコーナー付近では、直径30～35cm、深さ10～20cmの柱穴が確認されたことから、4本柱と考えられる。南壁のコーナー付近に短い壁溝が存在するが他には廻らない。住居内の中央から北壁付近において黄白色の粘土が床面に見られた。その南には台石が置かれていた。

386～388は埋土内から出土した須恵器である。386は坏蓋である。口縁部と天井部の境の稜はやや丸みを帯び、端部は内傾して窪む。天井部は丸みを持っており、外面の回転ヘラケズリは約1/2である。387は坏身で、立ち上がりは内傾し、口縁端部は内傾して若干窪む。

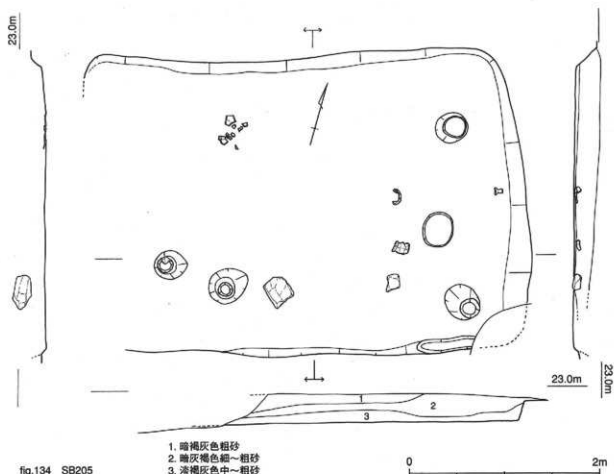


fig.134 SB205

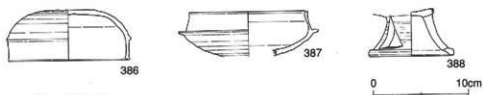


fig.135 SB205出土土器

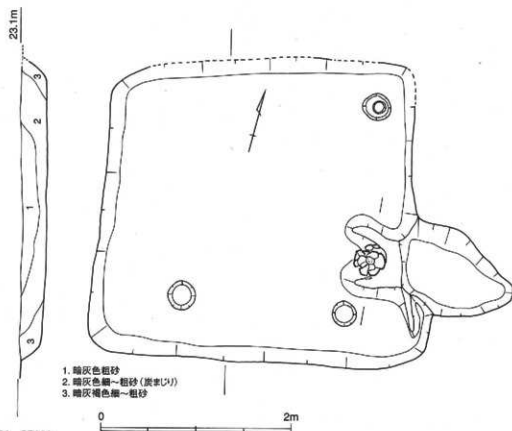
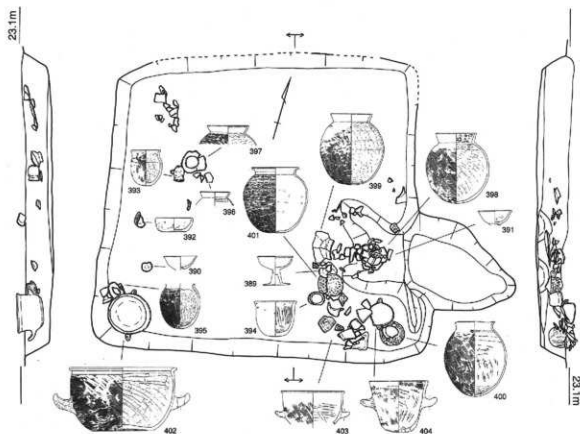
受け部は直線的に外方に伸び鋭い。外面の回転ヘラケズリは全体の約1/3施されている。388は有蓋高坏の脚部である。外面にはカキメの後、回転ナデが施され、三方に三角形のスカシが穿たれている。

S B 206

S B 206は調査区の北西部で検出された、東西3.5m、南北3.3m、検出面からの深さ25cmを測る方形の竪穴住居である。東壁の中央やや南寄りの位置に竈が造り付けられている。この竈のある壁から東に長さ約1.0mの煙道が延びる。竈は幅0.9m、長さ0.7m、高さ0.2mを測る。竈袖部は砂質土を積み上げて造られている。燃烧部の中央には支脚として、長さ約20cmの方柱状の花崗岩が据えられていた。

北西のコーナーを除く3方のコーナー付近に直径約30cmの柱穴が存在することから主柱は4本と考えられる。柱穴の深さは10~20cmと浅い。周壁溝は存在しない。

南西コーナー付近と南東コーナーから竈にかけての位置に須恵器甕・土師器甕・瓶・把手付



1. 暗灰色粗砂
2. 暗灰色粗～細砂 (黄土シ)
3. 暗灰褐色粗～細砂

0 2m

fig.136 SB206

鍋等の多量の土器類が元位置を保った状態で出土した。また竈内からも土師器の甕が支脚にささえられた状態のままで出土した。これらの土器には、後に詳説するが、韓式系土器ないしは韓式系土器の系譜を引くものが多く含まれる。

389～391は土師器の高杯である。椀形の坏部を持つものである。平坦な坏底部に、坏体部は内湾して立ち上がり、端部付近で若干外反する。端部は尖り気味に収める。390・391は389に比して坏体部上半の外反度が大きい。脚部は円錐形の筒部から、L字形に屈折して水平に開く脚端部となる。内外面はナデで調整されているが、390・391の坏部内面にはハケの痕跡が若干残っている。

392は土師器の椀である。平底の底部に体部は内湾して立ち上がりそのまま口縁端部となる。端部は尖り気味に収める。全体に器壁は厚い。体部は手づくねで成形されており体部下半に指頭圧痕跡が残る。体部外面はハケで調整されている。

393・394は土師器の平底鉢である。393はほとんど丸底ぎみの底部にやや膨らんだ体部をもつ。頸部は緩やかに若干くびれ、口縁部は短く外反する。口縁端部は丸く収める。器壁はやや厚い。外面はハケの後にナデが施され、内面はナデが施されているが、頸部付近にはハケの痕跡が残る。形としては、体部の最大径が口縁部径を若干しのぎ、甕に近い形態である。394はやや丸みを帯びた底部から緩やかに立ち上がって、体部は直立する。口縁部は短く外反し、端部は丸く収める。器壁は非常に厚い。体部外面にはナデが施されているが、わずかにハケの痕跡が残る。内面は板ナデが施されている。

395は土師器の長胴甕である。口縁部は欠損するが、口径14cm、器高21cm程度の小型の長胴甕である。わずかに平らな面を持つ丸底の底部から、やや長い体部に繋がる。頸部は緩やかに屈曲する。体部内面は指頭圧痕が顕著であり、体部外面はハケで調整されている。器壁は厚い。

396～400は土師器の甕である。396は口径12cmの小型の甕で、頸部は屈曲し、口縁部は内湾して立ち上がる。口縁端部は僅かに内側に拡張し、ほぼ水平な面を持つ。体部外面は表面が剥離しているため明らかではないが、ハケが施されていると思われる。口縁部内外面と体部内面はナデで調整されている。397～400は大型の甕である。いずれも体部外面はハケで調整されているが、細部の形態はそれぞれ若干異なる。397は、頸部は屈曲し、口縁部は内湾して立ち上がる。端部は拡張し、やや内傾した面を持つ。398は丸底で球形の体部に、頸部は屈曲し、口縁部は直線的に外方に広がる。口縁端部はそのまま終わり、水平な面を持つ。体部内面はヘラケズリが施されている。399は平底ぎみで球形の体部に、頸部は屈曲し、口縁部は直線的に外方に広がる。口縁端部はそのまま終わり、尖りぎみに丸く収める。体部内面は指頭圧痕が残る。400は丸底でやや長胴形の体部を持つ。頸部は緩やかにくびれ、口縁部は短く外反し、口縁端部は丸く収める。内面の底部には指頭圧痕が残り、体部内面は板ナデで調整されている。

401は須恵器の甕で、平底の底部に最大径が上半にあるややいびつな球形の体部を持つ。口縁部は外反し、口縁端部は端面には強いナデが施されて、上下に若干拡張する。体部外面の上半は縦方向に平行タタキによって成形され、その上からカキメが施されている。下半はその上から斜め方向に平行タタキが施されている。体部内面は同心円文がナデによってほと

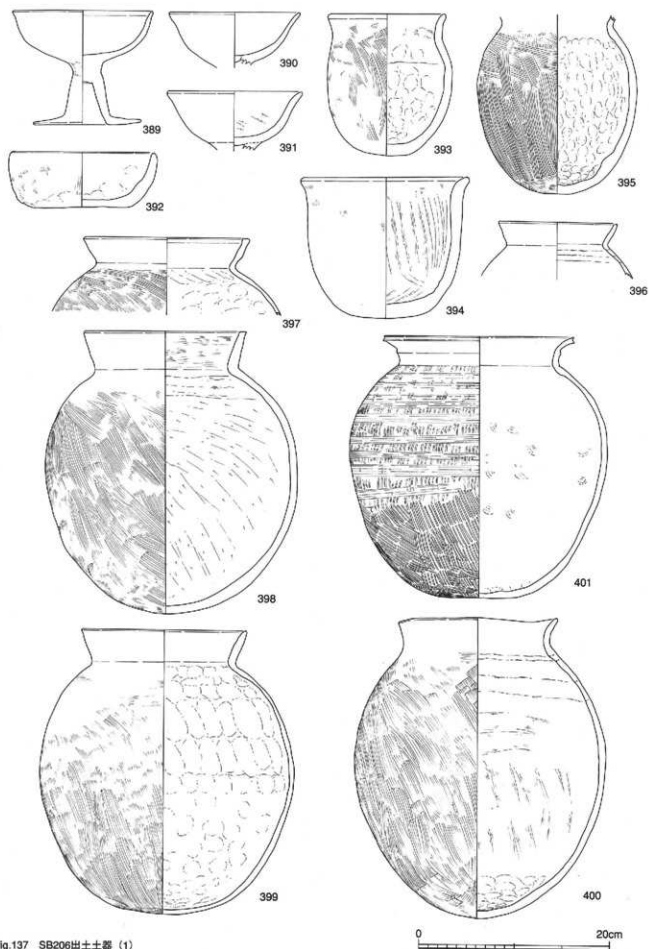


fig.137 SB206出土土器 (1)

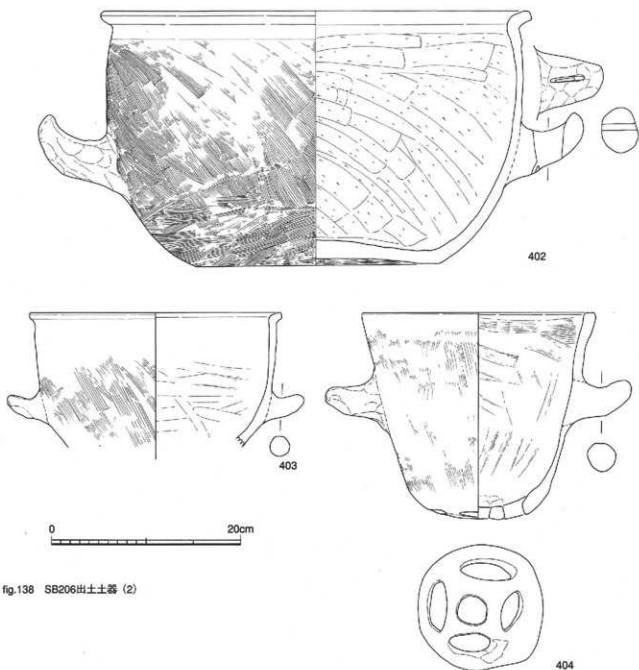
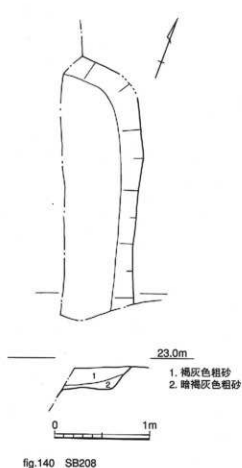
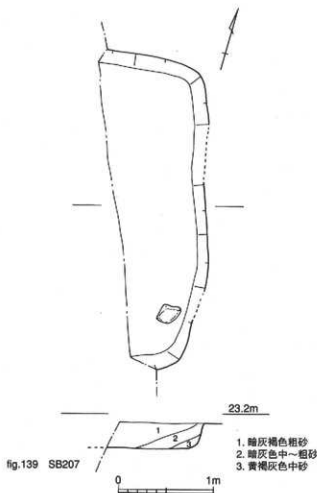


fig.138 SB206出土土器 (2)

んど消されている。口縁部は内外面共に回転ナデが施され、外面は2段の強い回転ナデによって中位に稜を持つ。

402・403は土師器の把手付鍋で、402は口径44cmと特に大型のものである。やや上げ底ぎみの平底から、屈曲して体部が立ち上がる。やや胴の張った体部に屈曲して外方に広がる短く厚い口縁部が付く。端部は面を持つ。体部中位には牛角状の把手が付き、把手に施されているヘラによる切れ目は、下まで貫通する。口縁部から頸部外面にはヨコナデが施され、体部外面にはハケが、内面にはヘラケズリが施されている。403は中型のもので、内湾して上広がりの体部をもち、屈曲して外方に短く広がる口縁部が付く。端部は面を持つ。体部中位には棒状の把手が付き、把手には切れ目は施されていない。口縁部から頸部外面にはヨコナデが施され、体部外面にはハケが、内面にはナデが施されている。

404は甌で、丸みをもった平底から緩やかに屈曲して体部に至る。体部は直線的にやや開



き、口縁部はそのまま終わる。端部は若干内傾した面を持つ。底部の孔は1+4の形で開けられ、体部中位には棒状の把手が付く。体部外面はハケで調整され、内面の口縁部はハケが体部は板ナデが施されている。

S B 207 S B 207は調査区の北西端で検出された竪穴住居である。今回の調査地内では東西1.1m、南北3.5mの範囲が確認されたが、第160地点の調査では第1遺構面の不明遺構 S X 101として検出されたものである。全体の規模は東西4.5m、南北4.2mになる。検出面からの深さは約30cmを測る。主柱穴と周壁溝は確認されなかった。南東コーナー付近には台石が置かれていた。埋土からは、6世紀後半の須恵器坏蓋片・土師器甕片が出土したのみである。但し、先年度の報告では、第160地点 S X 101から黒色土器が出土していることから平安時代の遺構として扱っていたが、これは後述する平安時代の土器溜りに伴うものと考えられるため、ここで訂正する。

S B 208 S B 208は調査区の南西端で検出された東西0.8m以上、南北2.7m以上、検出面からの深さ20cmの方形竪穴住居である。調査区外に伸びるため全体の規模は明らかでない。遺物は埋土から6世紀後半の須恵器の坏身片・甕片・土師器の小片が出土したのみである。

(2) 掘立柱建物

S B 209 S B 209は調査区の東半で検出された、東西2間、南北3間の掘立柱建物の南に1間の庇がついた掘立柱建物である。建物の規模は南北5.7m、東西3.9mで庇を含めた規模は南北7.5m

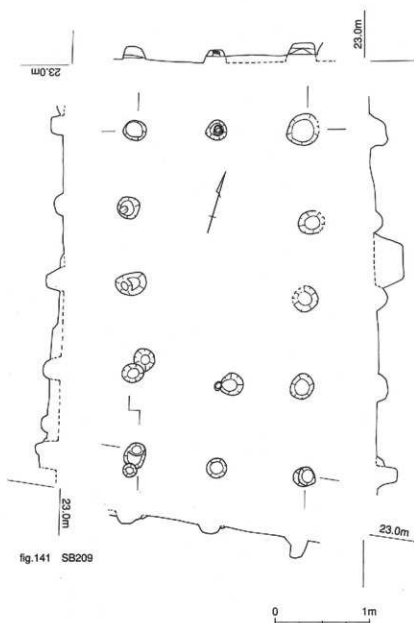


fig.141 SB209

である。柱穴の形状は円形で、直径30～60cm、深さ25～35cmを測る。南北の桁方向はN 14° Wである。北列の中央柱穴の底には石の礎盤が置かれていた。柱穴内からは、須恵器・土師器の小片のみが出土しているため時期は確定できないが、古墳時代後期に属すると思われる。

第5節 第1遺構面の遺構と遺物

第1遺構面は暗灰褐色細砂上面の標高23.1～23.2m付近で検出された。掘立柱建物1棟・溝4条・土坑1基・柱穴約150基が確認されている。これらの遺構は飛鳥時代を中心とする中世までの遺構と考えられる。

(1) 掘立柱建物

SB101は調査区の東半で確認された東西2間、南北2間以上の総柱掘立柱建物である。南側は第132地点調査区側に伸びるが、第132地点では耕作に伴うと考えられる段差のため遺構面が削平されており、柱穴が確認されず全体の規模は明らかでない。検出された範囲での建物の規模は、東西5.5m、南北5.0m以上である。柱穴の形状は円形または隅丸方形で、直

SB101

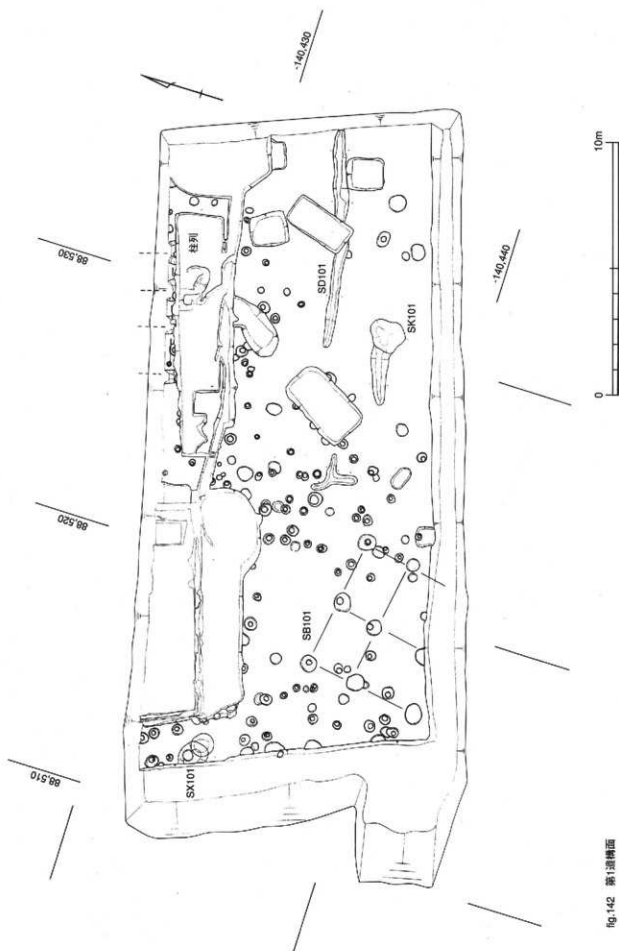


fig.142 第1遺構面

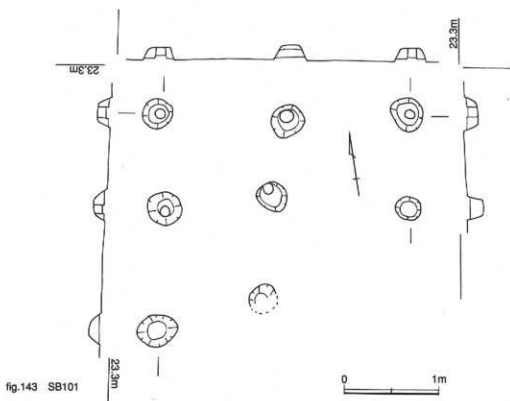


fig.143 SB101

径ないし一辺が55~70cm、深さ25~30cmを測る。南北の桁方向は $N 9^{\circ} E$ で、ほぼ真北方向を指向している。柱穴内からは、須恵器・土師器の小片のみが出土しているため時期は確定できないが、飛鳥時代に属すると考えられる。

柱列

調査区の北半に存在する現代の攪乱と調査区の北壁の間にわずかに遺構面が残存した部分で、大型の方形掘形をもつ柱穴が東西方向に並んで4基確認された。この柱穴列は1.5~2.0m間隔で並んでいることから、調査地の北側に伸びる掘立柱建物の南辺と考えられる。

(2) 遺物包含層出土の土器

405~412は第1遺構面上層の灰色中砂層中より出土した土器である。405~408は古墳時代中期から後期に属する須恵器の坏身・坏蓋で、本来は第2遺構面に伴う遺物である。

409~411は飛鳥時代前半の須恵器の坏身で、412は同時期の土師器の坏である。灰色中砂層中からはこの時期の遺物が最も多い。よって第1遺構面の遺構はこの時期に属するものが大半を占めるものと考えられる。

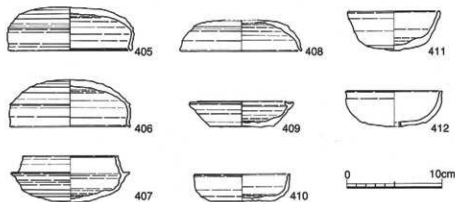


fig.144 遺物包含層出土土器

(3) 平安時代の遺構と遺物

S X 101

S X 101 (土器群101)は調査区の北西端で検出された、平安時代中期の土器群である。直径1.2m、深さ30cmのすり鉢を呈する土坑の上面に黒色土器碗・土器器皿等が多数置かれていた。この遺構は第1遺構面上層の飛鳥～奈良時代の遺物包含層である灰色中砂層を掘削中に確認されたことから、この灰色中砂層上面より掘り下げられていた遺構であり、同層上面が平安時代の遺構面と考えられる。

413～415は土師器の小皿である。丸底ぎみの底部から内湾して体部が外方に立ち上がる。口縁部は強く外反し、口縁端部は上方に摘み上げ、小さく突起するように収め、いわゆる「ての字口縁」の形態をもつ。器壁は非常に薄く、体部下半は手づくねによって成形され、口縁端部下の外面を強くヨコナデすることによって口縁部を外反させている。

416・417は土師器の坏である。416は平底に緩やかに外方に開き、やや深めの体部を持つ。口縁端部は外反し、丸く収める。417は丸底ぎみの底部から体部が緩やかに外方に広がる。口縁部は若干外反し、口縁端部は上方に摘み上げ、小さく突起するように収める。いわゆる「ての字口縁」の形態をもつ。体部下半はユビオサエによって、口縁端部下はヨコナデで成形されている。

418は土師器の脚付皿である。平底の底部にハの字に開く高めで断面三角形の輪高台がつく。体部は直線的に外方に開き、口縁端部は外反する。口縁端部は若干上方に摘み上げる。

419～426は黒色土器碗である。419は内外面が黒色化する両黒の黒色土器

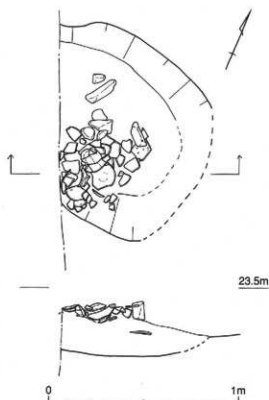


fig.145 SX101

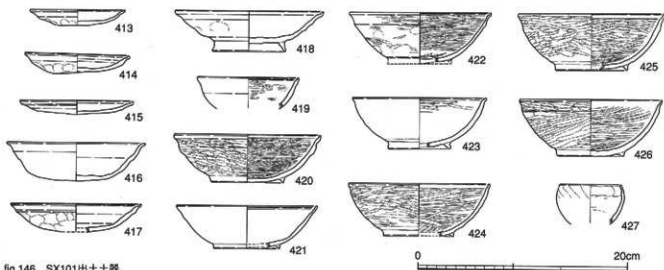


fig.146 SX101出土土器

で、それ以外は内面と外面口縁部のみが黒色化する内黒の黒色土器である。但し422は口縁部のみ黒色化しており、内面のほとんどは素地のままである。半球形の碗底部に断面三角形の輪高台が付く。外面口縁直下にヨコナデが施され、口縁部が若干外反するものもある。口縁端部内面にヘラ状工具により沈線が施され段状になる。体部内外面はヘラミガキが施されている。

427は黒色土器鉢である。内面のみ黒色化した内黒の黒色土器である。球形の体部を持ち、口縁部は内湾して端部は丸く収める。内外面ともにユビオサエで成形されている。

以上の土器類は平安時代中期の10世紀中葉に位置付けられる。

第6節 小 結

寺田遺跡第178地点では合計4面の遺構面から、弥生時代中期から平安時代にかけての遺構が確認された。

第4遺構面 第4遺構面の弥生中期前半（畿内第Ⅱ様式）に関しては、遺構の数や遺物量も少なく、集落としては周縁部に位置するものと考えられるが、寺田遺跡第142地点で見つかった貯蔵穴と同様の土坑が今回の調査区で見つかったことによって、この時期の集落の広がりを確認することができ、その意義は大きい。

第3遺構面 第3遺構面では弥生時代後期後半の堅穴住居が検出された。同時期の堅穴住居は、西側の第130地点や、東側の第127地点でも確認されており、山手幹線路線内の寺田遺跡では東西方向に広くこの時期の遺構が存在する。しかし、今回の調査区内では堅穴住居は確認されたが、そのほかの遺構に関しては散漫であり、集落内における遺構の粗密があるようである。

第2遺構面 第2遺構面では多数の古墳時代後期の堅穴住居が確認された。これまでも寺田遺跡から月若遺跡にかけては多数の同時期の堅穴住居が確認されており、弥生時代後期の集落と同様に芦屋川右岸扇状地上の広大な集落域が想定される。これまでの調査成果を合わせて検討することによって、集落内の住居の変遷等を考える資料となろう。

またS B 206からは、当時使用された土器が、住居内で元位置に置かれたままの状態出土した。これらの土器は住居内における生活空間の配置を考える上で重要である。また、これらの土器には韓式系土器が含まれている。集落の構成員の中に、渡来系の人々が含まれていたことが示唆され、城山・三条古墳群との関連が想定される。

第1遺構面 第1遺構面では飛鳥時代から平安時代の遺構が確認された。そのうち飛鳥時代に属すると考えられる掘立柱建物は、大型の掘形を持つものでも、これまでの寺田遺跡における調査と同様に芦屋廃寺に関連する寺域ないしは、官衙に関連する建物の可能性がある。

またS X 101は寺田遺跡の東半域ではこれまであまり確認されていない平安時代中期の遺構であり、寺田遺跡全体における集落の変遷を考える上で重要である。

第7章 まとめ

以上、芦屋市域における山手幹線街路事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は5年目となり、今回の調査地は、芦屋川左岸の業平遺跡と、右岸の月若遺跡・寺田遺跡といった、はじめて芦屋川兩岸にまたがった調査となった。本書では調査地点ごとにその成果を報告したが、以下については時代ごとにその成果をまとめて、総括としたい。

調査地の立地

まず、改めて今回の調査地の立地について見てみることにする。今回は芦屋川左岸の業平遺跡と、右岸の月若遺跡・寺田遺跡であるが、いずれも芦屋川等によって形成された、緩やかに南に傾斜する扇状地上に立地する。右岸の月若遺跡では、今回の調査区である第79地点と、第81地点の間に比高差約3mの崖が存在する。この崖下は現芦屋川が天井川化する以前の芦屋川の氾濫原と考えられる。この崖は弥生時代には存在したと思われる、それより西に広がる集落域の範囲を地形的見地から想定する上で重要である。

左岸側の業平遺跡ではこのような崖は確認できず、現地表面ではほぼ平坦であるが、東側が徐々に低くなっており、調査地は微高地上となっている。

縄文時代

今回の調査のなかで、最も古い縄文土器と思われるものは、寺田遺跡第181地点S D301出土のものである。この土器には特徴的な文様がなく、時期の確定は難しいが、胎土中に繊維状の炭化物が含まれ、繊維土器とすれば、縄文時代早期末に属する可能性がある。

月若遺跡第81地点では、縄文時代中期末の北白川C式の土器が出土した。この土器は遺構に伴っておらず、小片で且つ、量も少ない。同じ月若遺跡において、今回の調査地から北に約150mに位置する第2地点でも、同時期の土器が出土している。このことから山手幹線予定地より北側に縄文時代中期末における集落の中心が存在する可能性がある。

業平遺跡第61地点では縄文時代晩期中葉（篠原式）の埋甕墓が確認されたことの意義は大きい。この時期の遺構・遺物は寺田遺跡第181地点でも確認されており、芦屋川兩岸にこの時期の遺跡が広がっていることが改めて確認された。

弥生時代

弥生時代中期前半の遺構は今回の調査地のなかでは寺田遺跡第178地点でのみ確認された。寺田遺跡東半部において、弥生時代前期後半から続いて数多くの遺構が確認されており、この辺りが当時の集落の中心であったと考えられる。寺田遺跡第178地点の東側にあたる、寺田遺跡第181地点や月若遺跡第81地点においてはこの時期と考えられる遺構面は存在したが、遺物はほとんど出土しておらず、第178地点付近がこの時期の集落の周縁部にあたると思われる。

弥生時代後期後半については、月若・寺田両遺跡の各地点において多くの遺構・遺物が確認された。隣接する芦屋廃寺遺跡や三条九ノ坪遺跡でも同時期の遺構・遺物が確認されており、扇状地上に広がる集落域が想定されている。その内でも遺構のあり方に粗密があり、今後これらの遺跡にまたがる集落域内での構成を検討する必要がある。

また、業平遺跡においても、庄内併行期に属する竈穴住居が検出された。芦屋川左岸にも右岸扇状地上と同時期の集落が存在することが、今回の調査で初めて明らかになった。

古墳時代

古墳時代の遺構としては寺田遺跡第181地点のS D301の上層から布置式古段階の土器がある程度の量が出土しており、付近に住居等があったものと推定できる。しかしこれまでの付

近調査成果と同様、以降の時期には継続しない。

寺田遺跡第178地点において古墳時代中期後半から後期にかけての住居址がまとまって検出された。弥生時代後期の集落と同様に、芦屋川右岸の扇状地上にこの時期の集落が広範囲に営まれていたことが追認できた。しかし、この時期においても、遺構の粗密はあり、月若遺跡第81地点や寺田遺跡第181地点では、顕著な遺構は確認されなかった。

この内、寺田遺跡第178地点で検出された竪穴住居SB206では、住居内に数多くの土器が住居内に置かれていたままの状態でも出土し、住居内の空間利用を復元する上で重要な資料となる。また、その土器中には、韓式系土器の系譜を引くものが多く含まれ、渡来系住民の存在が想定される。寺田遺跡北側の山麓に所在する城山・三条古墳群では、ミニチュアの炊飯具等が出土しており、渡来人の造墓集団が想定されているが、寺田遺跡はこの造墓集団の集落である可能性が指摘できる。

栗平遺跡第61地点においては、同時期の古墳が2基と、箱式石棺墓など明確な墳丘を持たない埋葬施設が確認された。2基の古墳の内、1基はいわゆる「低墳丘方墳」であり、1基は初期の横穴式石室を主体部とする円墳であった。芦屋市域において平野部で古墳が確認されたのは初めてのことである。神戸市東灘区に所在する住吉宮町遺跡では同時期の方墳を中心とした古墳がこれまで70基以上見つかっている。この住吉宮町遺跡においても6世紀半ばに横穴式石室を採用している。また同遺跡の方墳群の周辺には箱式石棺墓群も確認されており、栗平遺跡との共通性が看取される。1号墳の付近からは、より古い時期の須恵器も出土していることから、さらに多くの古墳が付近に存在し「栗平古墳群」を形成していたものと思われる。今後、六甲南麓地域における群集墳の発生と変遷を考えるうえで重要な資料となる。

飛鳥時代

飛鳥時代のものとしては、寺田遺跡第181地点と月若遺跡第81地点から出土した、法隆寺式軒平瓦・軒丸瓦、高句麗式軒丸瓦および埴が特筆すべきものとして挙げられる。これらの瓦は調査地の北東約200～300mに位置する芦屋廃寺から出土したものと同范と考えられ、その関係が注目される。月若遺跡第81地点の大溝（SD101）からは上記の瓦の他にも大量の瓦が出土しているが、溝の方向や距離的にも芦屋廃寺より流れてきたとは考え難い。この時期の掘立柱建物は月若・寺田遺跡で確認された。これまでの調査でも両遺跡では多数の掘立柱建物が、扇状地上の広い範囲に存在する。白鳳期に創建された旧栗原郡内の唯一の古代寺院である芦屋廃寺の南に広がる扇状地上に、芦屋廃寺関連施設ないしは官衙的施設が存在した可能性が考えられる。

平安時代

寺田遺跡第178地点では10世紀中葉の黒色土器が多量入った土坑が確認された。栗平遺跡では平安時代の掘立柱建物が3棟確認された。11世紀前半に属する掘立柱建物で、栗平遺跡においてこの時期の遺構は初めての発見である。

中世

12世紀以降に属する中世の遺構は各調査地で確認された。寺田遺跡第181地点においては、鍛冶に関連すると思われる方形の深い土坑が2基確認された。鉋滓なども出土し、付近からは鑄物口も出土していることから、近隣で鍛冶が行われていたものと考えられる。

この時期、栗平遺跡では掘立柱建物などの顕著な遺構は存在せず、耕作地として利用されていたものと思われる。

カラー写真図版



1号墳全景（南から）



1号墳遺物出土状況（南西から）



ST301 (北から)



SB301 (西から)



第1遺構面全景（南東から）



SD203出土遺物



第1遺構面全景（南東から）



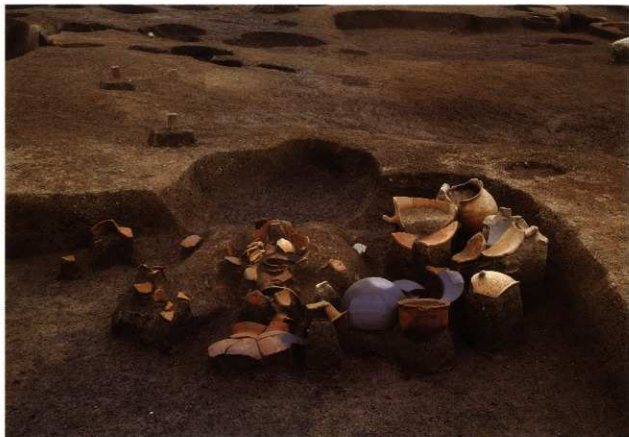
SK101遺物出土状況



SK101出土遺物



第2遺構面全景（南東から）



SB206遺物出土状況



SB206出土遺物

写 真 图 版



2区 第3遺構面（西から）

図版2 業平遺跡第61地点



3区 第3遺構面全景（南西から）



3区 第3遺構面全景（北西から）



2区 SK301 (南から)



2区 SB301 (東から)

図版 4 業平遺跡第61地点



3区 SK322 (北西から)



3区 SK329 (北から)



1区 第2遺構面全景（西から）



2区 第2遺構面全景（東から）



SB201・202（北東から）



SB204（南東から）

図版 8 葉平遺跡第61地点



2区 第2遺構面南西部（北東から）



1号墳東半部・2号墳（東から）



1号墳西半部（北西から）



1号墳主体部（北から）

図版10 葉平遺跡第61地点



1号墳主体部（南から）



奥壁付近遺物出土状況（南西から）



羨門部閉塞状況（北西から）

図版12 葉平遺跡第61地点



閉塞石除去状況（北西から）



基底石痕跡検出状況（南西から）



1号墳周溝（南西から）



1号墳周溝断面図（西から）

図版14 葉平遺跡第61地点



ST201 (南東から)



ST202 (南東から)



SK201 (南東から)



SD204 (南西から)

図版16 葉平遺跡第61地点



2区 第1遺構面全景（東から）



2区 第1遺構面全景（西から）



SP169断面（西から）



1区 西壁土層断面



3区 南側土層断面



ST301出土遺物

1



3

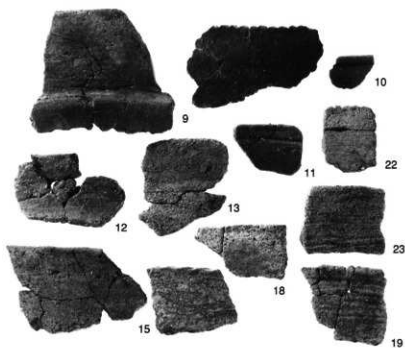
SK329出土遺物



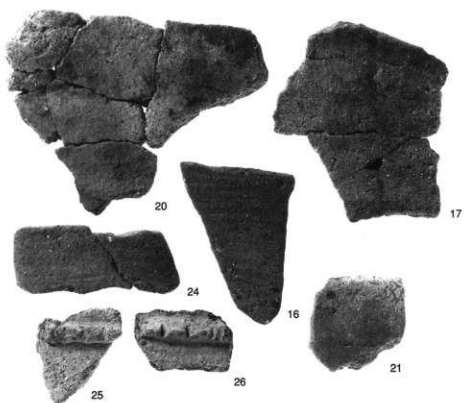
37



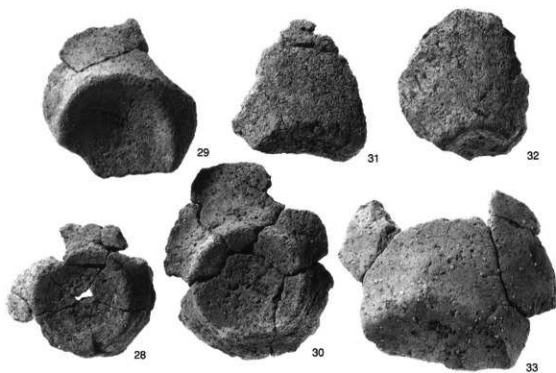
38



遺構に伴わない遺物 (1)



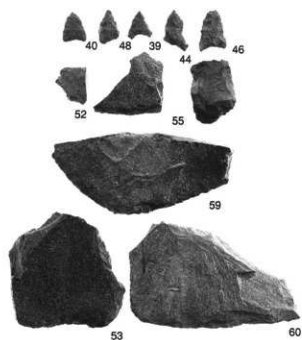
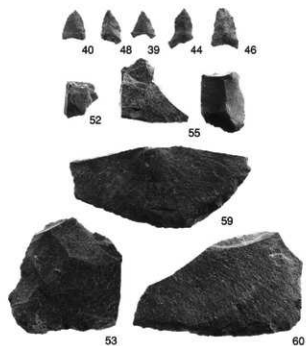
遺構に伴わない遺物（2）



遺構に伴わない遺物（3）



遺構に伴わない遺物 (4)



遺構に伴わない遺物 (5)



4



5



6



7



67



62



68



65

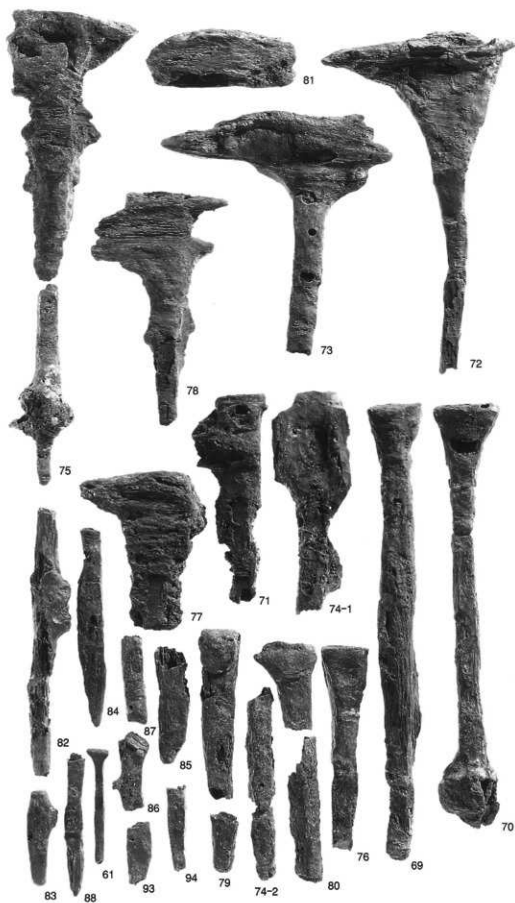


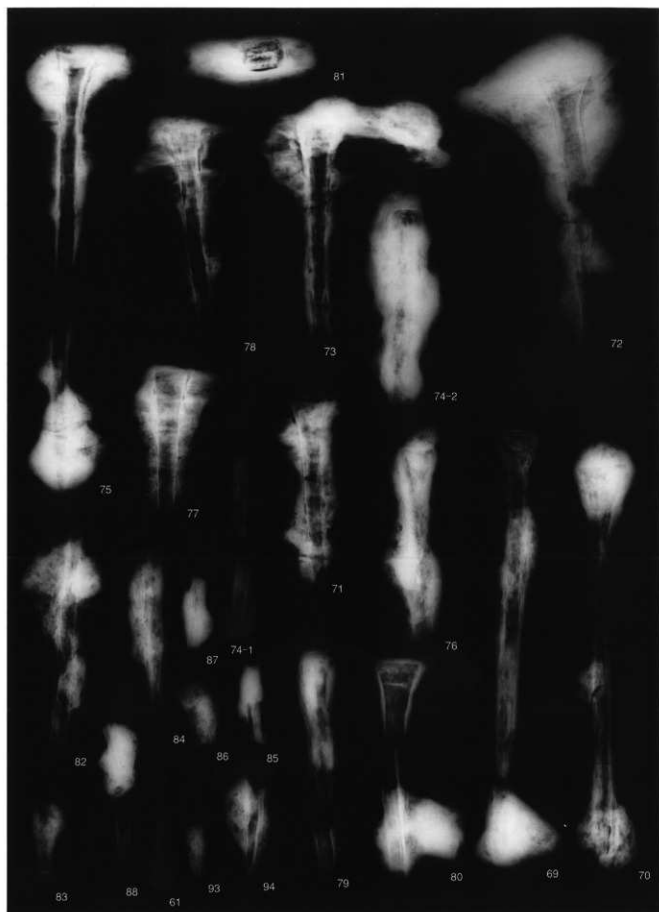
66

1号墳玄室出土遺物

1号墳周溝出土遺物

図版24 葉平遺跡第61地点





鉄製品 (X線写真)



89



90



91

1号墳付近出土遺物



92



95



96

2号墳周溝出土遺物

SK201出土遺物



98



100

SD204出土遺物



99



101

SD208出土遺物

SP142出土遺物



SP169出土遺物

102



SD111出土遺物

109



104



108



SD111出土器群 1 出土遺物

106



107



105



遺構に伴わない遺物

113



114

図版28 月若遺跡第79地点



全景（西から）



全景（東から）



第3遺構面全景（南東から）



第3遺構面全景（北東から）



第2遺構面全景（南東から）



第2遺構面全景（北東から）



SD203 (南から)



SD203遺物出土状況 (北から)

図版32 月若遺跡第81地点



SD203遺物出土状況（北から）



SD203遺物出土状況（南から）



SD203セクション3・4 東半（北から）



SD203セクション3・4 西半（北から）



第1遺構面全景（南東から）



第1遺構面全景（北西から）



SB102 (北東から)



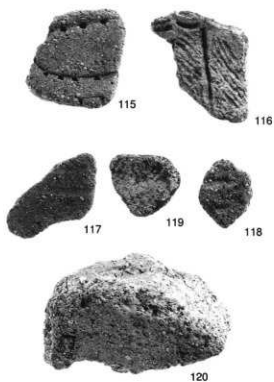
SB101 (北から)



SD101 (北から)



SD101セクション (南から)



縄文土器





125



128



126



129



127



130



131



134



132



135



133



136



137



140



138



141



139



142



145



149



146



150



147



151



148



152



153



157



154



158



155



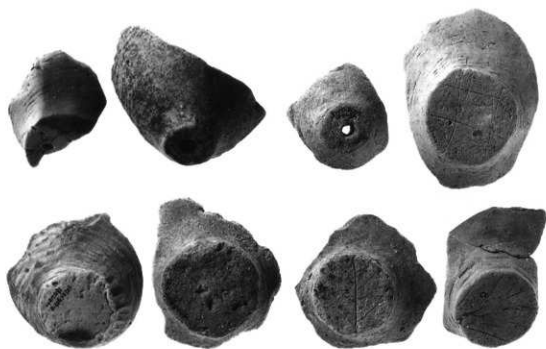
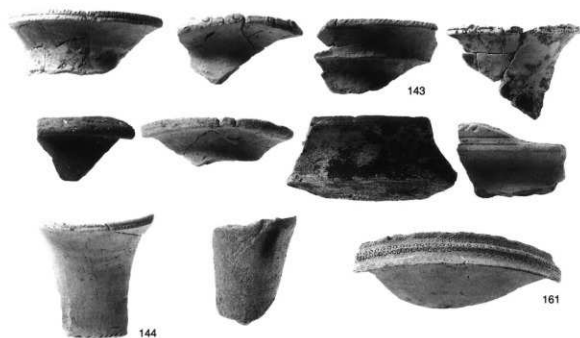
159



156



160





SD203出土絵面土器

162



162A面



162B面



SD203出土砥石



SD101出土燐

183



170



180



174



181



179



178



166



167



168



169



175



172



171



176



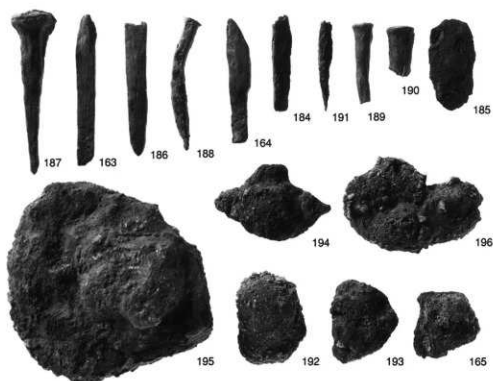
177



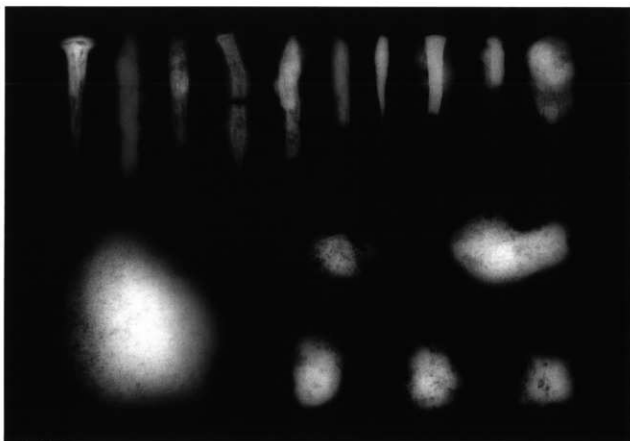
173



図版46 月若遺跡第81地点



月若遺跡第81地点出土鉄製品・鉄滓



同上X線写真



第5遺構面西半全景（南東から）



第5遺構面礫群（南東から）



第5遺構面礫群（東から）



SK504（西から）



SX501（南東から）

第5遺構面 東半全景
(南東から)



SR501



第4遺構面全景（南東から）



第4遺構面全景（西から）



第3遺構面全景（南東から）



第3遺構面全景（西から）



第3遺構面東半（南西から）



SX302（南から）



土器溜り301（北西から）



SD301（南東から）

図版54 寺田遺跡第181地点



第2遺構面西半全景（南東から）



第2遺構面全景（西から）



第2遺構面東半全景（南西から）



SB202（南東から）

図版56 寺田遺跡第181地点



SB201炭化材検出状況（西から）



SB201炭化材検出状況（北から）



SB201上層床面



SB201下層床面



第1遺構面西半全景（南東から）



第1遺構面全景（西から）



第1遺構面東半全景（南西から）



SK101遺物出土状況（北から）



SK101 (東から)



SK101セクション (西から)



SK103 (西から)



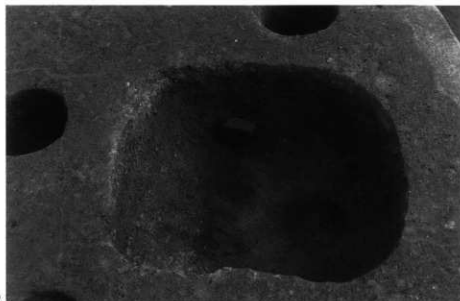
SK103セクション (南から)



SK105 (東から)



SX101 (北東から)



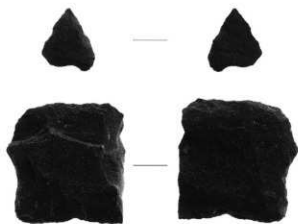
SP1009 (西から)



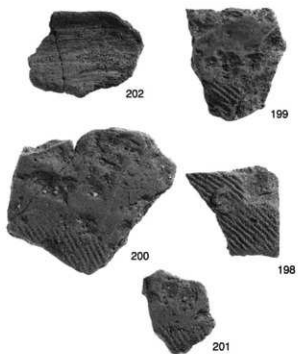
SP1064 (東から)



SP1035 (東から)



石製品



縄文土器



204



205



206

SD301出土土器 (1)



207



216



211



218



213



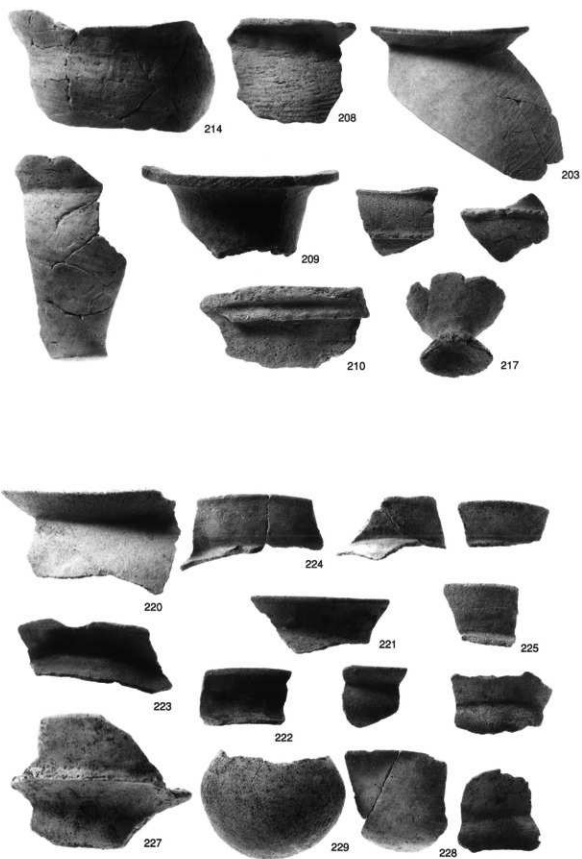
219



215



226





230

土器溜り301出土土器



236

SD201出土土器



234



235



231



232



240



223

SB201出土土器



237



239

SP1009出土瓦



SP1064出土遺物

238



243



241



242



244

飛鳥時代の遺物



245



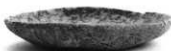
252



246



253



247



254



248



255



249



256



250



257



251



258



259



265



260



266



261



267



262



270



263



271



264



270



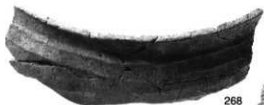
272



269



273

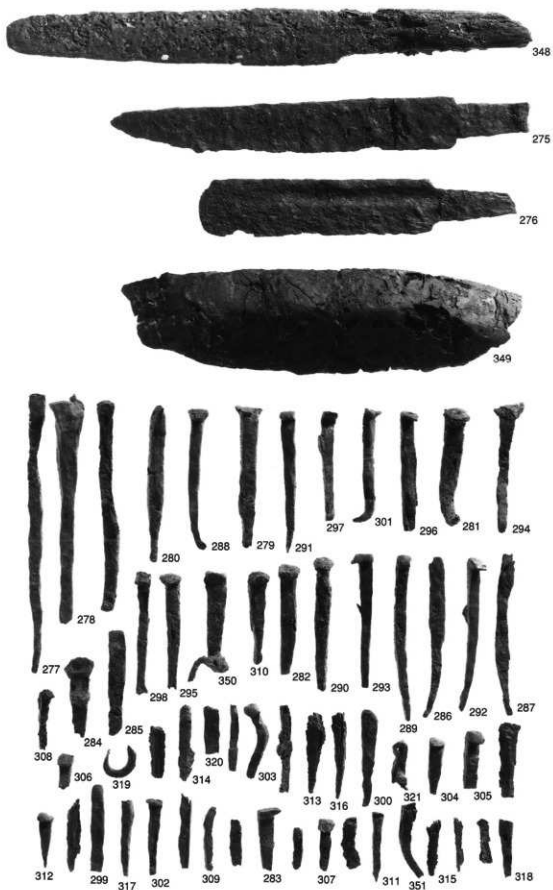


268

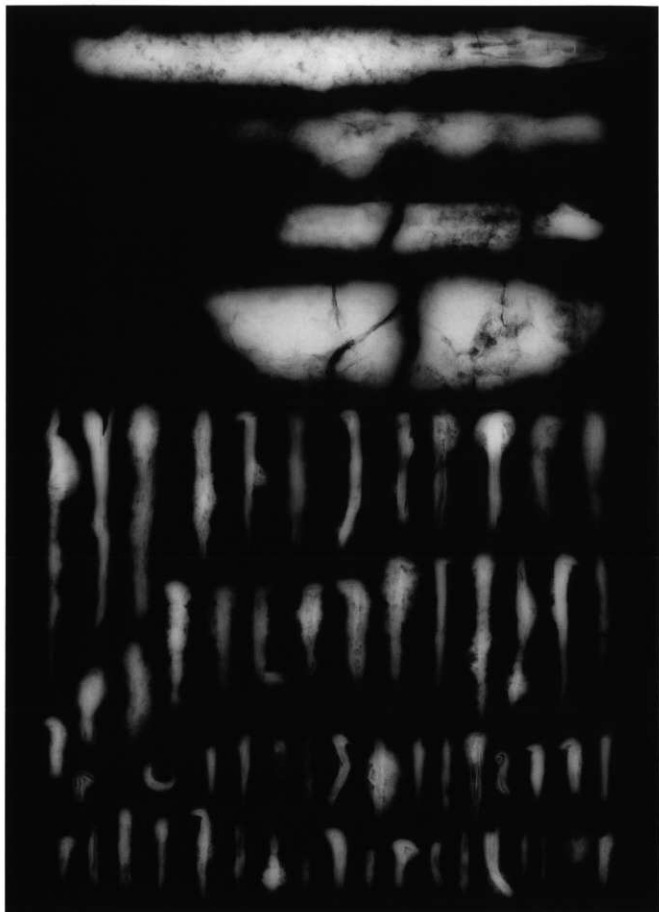


274

図版72 寺田遺跡第181地点



出土鉄製品



出土鉄製品X線写真



322



323



328



342



341



344



339



337



338



340



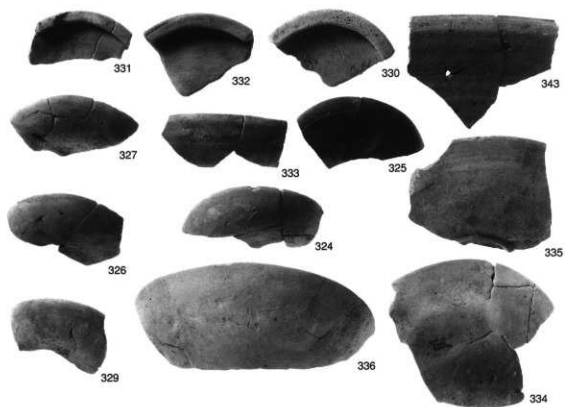
346



345



347



SK103出土土器 (2)



SK103出土石鍋



SK103出土壁材



352



358



353



359



354



360

SK105出土遺物



361



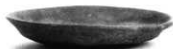
355

SP1073出土遺物

SP1035出土遺物



362



356

SP1037出土遺物



357



363

SP1061出土遺物

SP1075出土遺物



SP1078出土遺物

364

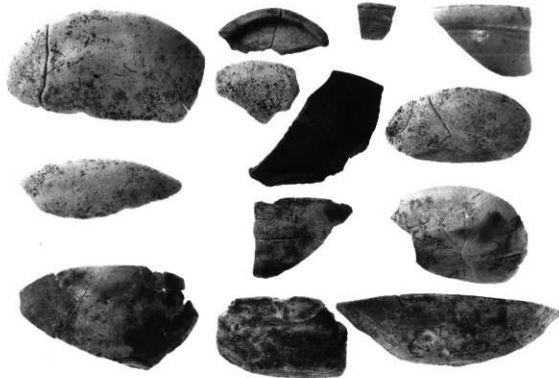


SP1081出土遺物

365

遺物包含層出土隼羽口

366



第1遺構面柱穴出土遺物



第4遺構面全景（南東から）



第4遺構面全景（西から）



SK404 (東から)



SK402 (北から)



第3遺構面全景（南東から）



第3遺構面全景（西から）



SB301 (南から)



SB301中央土坑 (西から)



第2遺構面全景（南東から）



第2遺構面全景（西から）



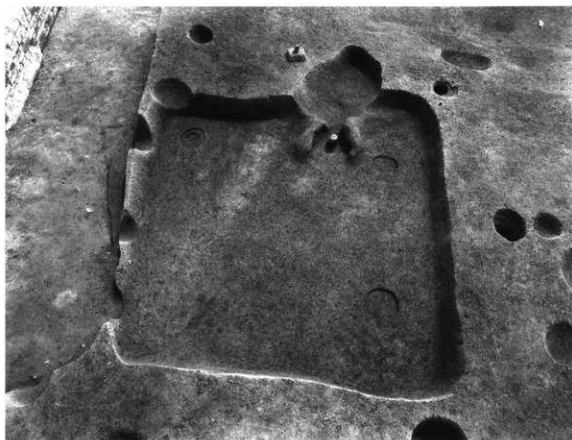
SB201・SB202・SB203・SB204 (南から)



SB203遺物出土状況 (北西から)



SB206遺物出土状況（西から）



SB206（西から）



SB206東半遺物出土状況（西から）



SB206西半遺物出土状況（北から）



SB206竈付近遺物出土状況（西から）



SB206竈（西から）



SB206竈（西から）



SB205 (南から)



SB207 (西から)



SB208 (西から)



SB209 (北から)



第1遺構面全景（南東から）



第1遺構面全景（西から）



SB101 (南西から)



SX101 (東から)



367



368



369



370

第4遺構面出土遺物

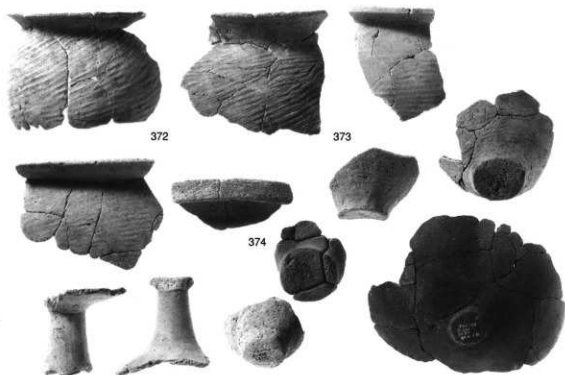


375



376

SB301出土土器 (1)



377



378



371



379



380

SB201出土土器



381

SB202出土土器



382



383



384



385

SB203出土土器



386



387

SB205出土土器



388



389



393



390



394



391



395



392



397



396



398



400



399



401



402



403



404





405



409



406



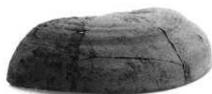
411



407



410



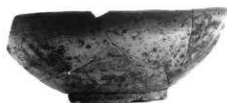
408



412



414



424



418



425



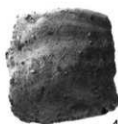
420



423



426



417



415



413



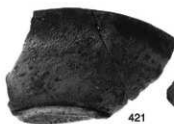
427



419



416



421



422

報告書抄録

ふりがな	なりひらいせきだい61ちてん つきわかいせきだい79・81ちてん てらだいせきだい178・181ちてん									
書 名	業平遺跡第61地点 月若遺跡第79・81地点 寺田遺跡第178・181地点									
副書名	都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅴ									
巻 次										
シリーズ名	芦屋市文化財報告書									
シリーズ番号	第62集									
編著者名	安田 滋（編）・山口 英正・阿部 功・中村 大介									
編者機関	神戸市教育委員会									
所在地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL.078-322-6480									
発行年	西暦2005年3月31日									
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間		調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号			開始	終了			
なりひらいせき 業平遺跡 第61地点	ひょうごけんあしや し まつのうちまう 兵庫県芦屋市松ノ内町 72番の1他	28206		34度 43分 53秒	135度 18分 20秒	20040617	20041210	1700	都市計画 道路山手 幹線街路 事業	
つきわかいせき 月若遺跡 第79地点	ひょうごけんあしや し つきわまちよう 兵庫県芦屋市月若町 66番6			34度 43分 50秒	135度 18分 10秒	20040415	20040514	105		
つきわかいせき 月若遺跡 第81地点	ひょうごけんあしや し つきわまちよう 兵庫県芦屋市月若町 69番他					20040902	20041207	359		
てらだ いせき 寺田遺跡 第178地点	ひょうごけんあしや し さんじょうのみまち 兵庫県芦屋市三条南町 7番1			34度 43分 50秒	135度 18分 03秒	20040521	20040901	336		
てらだ いせき 寺田遺跡 第181地点	ひょうごけんあしや し さんじょうのみまち 兵庫県芦屋市西芦屋町 30番1他					20041208 20050404	20050318 20050419	349		
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項		
業平遺跡 第61地点	集落跡 古墳	縄文時代 古墳時代 平安時代		土器棺・堅穴住居・ 円墳・横穴式石室		縄文土器・弥生土器・ 須恵器・土師器・鉄釘		遺構面を 3面検出		
月若遺跡 第79地点	集落跡	近世		耕作痕		弥生土器・須恵器・ 土師器				
月若遺跡 第81地点	集落跡	弥生時代・飛鳥時代・ 中世		掘立柱建物・大溝・ 土坑		縄文土器・弥生土器・ 須恵器・土師器・瓦・埴		遺構面を 3面検出		
寺田遺跡 第178地点	集落跡	古墳時代・飛鳥時代・ 平安時代		掘立柱建物・ 堅穴住居・土坑		弥生土器・須恵器・ 土師器		遺構面を 4面検出		
寺田遺跡 第181地点	集落跡	古墳時代・飛鳥時代・ 平安時代		掘立柱建物・ 堅穴住居・鍛冶遺構・ 溝		弥生土器・須恵器・土師器・ 瓦器・輸入陶磁・瓦・鉄鍋・ 刀子		遺構面を 5面検出		

芦屋市文化財調査報告 第62集

業平遺跡 第61地点
月若遺跡 第79・81地点
寺田遺跡 第178・181地点

発掘調査報告書

— 都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査V —
2006. 3. 31

編著 神戸市教育委員会
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL.078-322-6480

発行 芦屋市教育委員会
芦屋市精道町7番6号
TEL.0797-31-9066

印刷 デジタルグラフィック株式会社
神戸市中央区弁天町1-1
TEL.078-371-7000



